

# 鞍川D遺跡

鞍川バイパス遺跡群発掘調査報告Ⅱ

2006年3月

水見市教育委員会



巻頭写真1 鞍川D遺跡調査区近景(東から)



巻頭写真2 SE01の井戸側



SE01出土の丸木舟(氷見市立博物館常設展示室)

# 鞍川D遺跡

鞍川バイパス遺跡群発掘調査報告Ⅱ

2006年3月

水見市教育委員会

## 序

東に富山湾を隔てた靈峰立山を仰ぐ氷見市は、古くから海の幸、山の幸に恵まれ、人々の生活の場として、数多くの文化遺産を生み育んできました。

現在氷見市内では、富山県北西部及び能登地域と三大都市圏との交流を深め、沿線地域の産業、経済、文化の発展等を目指す能越自動車道の整備が進められています。その建設にあたっては市内の各地で新たな遺跡が発見され、大規模な発掘調査が実施されています。

氷見市教育委員会は、能越自動車道の氷見ICへのアクセス道路である鞍川バイパスの整備事業に伴う埋蔵文化財の調査を担っており、平成16年度までに鞍川中A遺跡、鞍川中B遺跡、鞍川D遺跡の本発掘調査を実施いたしました。

この報告書はそのうちのひとつ、鞍川D遺跡の本発掘調査の成果をまとめたものです。調査では井戸側に転用された中世の丸木舟が出土しました。これは県内初の丸木舟の出土として大きな話題を呼び、氷見市の歴史をひととくうえで新たな資料を提供してくれました。今回の調査結果が今後の文化財保護の一助となるとともに、地域の歴史への関心、理解につながることを願っております。

終わりに、発掘調査にあたりましては、関係者の皆様をはじめ、多くの方々にご指導、ご協力を賜りました。この場を借りまして厚くお礼申し上げます。

平成18年3月

氷見市教育委員会  
教育長 中尾 俊雄

## 例　　言

- 1 本書は、平成15年度に実施した富山県氷見市被川地内に所在する鞍川D遺跡の発掘調査の報告書である。
- 2 調査は、一般国道415号（通称鞍川バイパス）道路改築事業に先立ち、富山県の委託を受けて、氷見市教育委員会が実施した。
- 3 調査の面積・期間は次のとおりである。

調査面積 約1,371m<sup>2</sup>  
調査期間 平成15年4月21日より平成15年7月11日（実働42日間）
- 4 整理作業は、遺物洗浄・注記等基礎的な作業は調査と並行して実施し、自然科学分析は平成16年度に、出土木製品の保存処理と報告書作成、編集作業は平成16・17年度に実施した。
- 5 調査は、富山県からの委託金で実施した。
- 6 調査事務局は、氷見市教育委員会生涯学習課に置いた。事務担当者は次のとおりである。

平成15・16年度 講師：池田晃、主査：尾矢英一、主査：大野究、学芸員：廣瀬直樹  
平成17年度 講師：東海慎一、講師補佐：上田和弘、主査：大野究、学芸員：廣瀬直樹
- 7 調査は、廣瀬が担当した。
- 8 本書の執筆・編集は廣瀬が担当した。また遺物の実測、トレースは廣瀬が中心となり、後述する整理補助員、整理作業員が行った。
- 9 グリッド杭の設置、遺構図の空中写真測量は株式会社バスコに委託した。
- 10 自然科学分析は、土壤分析、樹種鑑定、種実鑑定、岩石鑑定、一部試料の放射性炭素年代測定（ $\beta$ 線放射法）等をパリオ・サーヴェイ株式会社に、SE01井戸側材の放射性炭素年代測定（AMS測定法）を株式会社加速器分析研究所に委託した。
- 11 出土木製品の保存処理は、井戸跡SE01関連遺物を財団法人元興寺文化財研究所に、その他のものを株式会社吉田生物研究所に、それぞれ委託した。
- 12 付章は、財団法人元興寺文化財研究所からの報告をもとに、廣瀬が編集した。
- 13 図版1・2に掲載の空中写真は、国土地理院長の承認を得て複製したものである。（承認番号 平17北複第253号）
- 14 出土遺物と調査に関わる資料は、氷見市教育委員会生涯学習課が保管している。なお、鞍川D遺跡の略号は「KRKD」とした。本報告書の遺構番号は、調査時に割り振った遺構番号をそのまま使用した。
- 15 土層の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖」に準じている。
- 16 調査参加者は次のとおりである。

平成15年度発掘調査業務  
発掘作業：穴倉　務・荒塙礼子・川口若子・川瀬喜作・坂口　輝・鶴口邦子・下野孝男・瀬戸道玄・  
　　田口重雄・津野外喜夫・百々米木キミ子・濱崎時生・濱本正道・林　文子・干場勇一・前田貞子・  
　　丸山レイ子・万田栄作・南　恵市・南　幸子・宮崎　清・向山清志・谷内健一・山岸幸美・山下　巽・  
　　山寺光雄・山本玲子（以上、氷見市シルバー人材センター）  
遺物整理作業員：三矢恵京・日南　静・山本昌美・大江智志
- 17 調査・本書作成にあたり、下記の方々・機関から多大なご教示・ご協力を得た。記して感謝申し上げる。

富山県道路課・富山県氷見土木事務所・富山県文化財課・富山県埋蔵文化財センター・氷見市立博物館・  
氷見市史編さん室・和船建造技術を後世に伝える会・黒崎直（富山大学教授）・小堀卓治（氷見市立博物館）・  
出口晶子（中南大学教授）・出口正登・西井龍儀（富山考古学会副会長・氷見市文化財審議委員）・  
橋本正春（富山県埋蔵文化財センター）・林昭男（平成15年度氷見市教育委員会生涯学習課嘱託職員）・  
番匠光昭・松澤那々子（小浜市世界遺産推進室）・光谷拓実（奈良文化財研究所）

## 目 次

第1章：遺跡の環境	1
第1節：遺跡の地理的環境	1
第2節：遺跡の歴史的環境	1
第2章：調査の概要	4
第1節：鞍川バイパス遺跡群発掘調査に至る経緯と経過	4
第2節：鞍川D遺跡試掘調査の成果	5
第3節：鞍川D遺跡本調査の概要	6
(1) 調査の方法	
(2) 調査の日程	
第3章：調査の成果	7
第1節：基本層序	7
第2節：遺構	7
第3節：遺物	14
(1) 遺構内出土遺物	
(2) 遺構外出土遺物	
第4章：まとめ	25
遺構・遺物について	
井戸跡について	
丸木舟について	
引用・参考文献	30
付章：樹種同定報告（元興寺文化財研究所）	80
報告書抄録	

## 表 目 次

第1表 周辺の遺跡	3
-----------	---

## 卷頭写真図版目次

卷頭写真1 鞍川D遺跡調査区近景	
卷頭写真2 SE01の井戸側	
卷頭写真3 SE01出土の丸木舟	

## 図 目 次

第1図	周辺の遺跡	2
第2図	鞍川D遺跡調査区位置図	4
第3図	鞍川D遺跡試掘調査出土遺物	5
第4図	調査区南壁土層断面図(1)	32
第5図	調査区南壁土層断面図(2)	33・34
第6図	鞍川D遺跡調査区全体図	35・36
第7図	I地区遺構配置図	37・38
第8図	II地区遺構配置図	39・40
第9図	III地区遺構配置図	41・42
第10図	遺構実測図(1)	43
第11図	遺構実測図(2)	44
第12図	遺構実測図(3)	45
第13図	遺構実測図(4)	46
第14図	遺構実測図(5)	47
第15図	遺構実測図(6)	48
第16図	遺構実測図(7)	49
第17図	遺構実測図(8)	50
第18図	遺構実測図(9)	51
第19図	遺構実測図(10)	52
第20図	遺構実測図(11)	53
第21図	遺構実測図(12)	54
第22図	遺物実測図(1)	55
第23図	遺物実測図(2)	56
第24図	遺物実測図(3)	57
第25図	遺物実測図(4)	58
第26図	遺物実測図(5)	59
第27図	遺物実測図(6)	60
第28図	遺物実測図(7)	61
第29図	遺物実測図(8)	62
第30図	遺物実測図(9)	63
第31図	遺物実測図(10)	64
第32図	遺物実測図(11)	65
第33図	遺物実測図(12)	66
第34図	遺物実測図(13)	67
第35図	遺物実測図(14)	68
第36図	遺物実測図(15)	69
第37図	遺物実測図(16)	70
第38図	遺物実測図(17)	71
第39図	遺物実測図(18)	72
第40図	遺物実測図(19)	73
第41図	遺物実測図(20)	74
第42図	遺物実測図(21)	75
第43図	遺物実測図(22)	76
第44図	遺物実測図(23)	77
第45図	遺物実測図(24)	78
第46図	遺物実測図(25)	79

## 写真図版目次

図版 1 造跡周辺空中写真(1947年米軍撮影)	図版10 1. SD31検出状況
図版 2 造跡周辺空中写真(1963年撮影)	2. SD31完掘状況
図版 3 1. 調査区全景	3. SD25・26土層断面
2. I地区全景	4. SK12土層断面
図版 4 1. II地区全景	5. SK03検出状況
2. III地区全景	6. SK03完掘状況
図版 5 1. I地区土層断面	7. SK18・19検出状況
2. I地区土層断面	8. SK18・19完掘状況
3. II地区土層断面	図版11 1. SD04・SK23検出状況
4. III地区土層断面	2. SK23土層断面
5. I地区遺構検出状況	3. SK23遺物出土状況
6. I地区遺構完掘状況	4. SK23完掘状況
7. I地区遺構完掘状況	5. SK32検出状況
8. I地区遺構完掘状況	6. SK32土層断面
図版 6 1. II地区遺構検出状況	7. SK46土層断面
2. II地区遺構検出状況	8. SX02土層断面
3. II地区遺構完掘状況	図版12 1. SX01検出状況
4. II地区遺構完掘状況	2. SX01土層断面
5. III地区遺構検出状況	3. III地区柱穴群
6. III地区遺構検出状況	4. III地区柱穴群
7. III地区遺構完掘状況	5. 作業風景
8. III地区遺構完掘状況	6. 作業風景
図版 7 1. SE01検出状況	7. SE01井戸側取り上げ作業
2. SE01上層遺物出土状況	8. SE01井戸側取り上げ作業
3. SE01土層断面	図版13 遺物写真(1)
4. SE01土層断面	図版14 遺物写真(2)
5. SE01完掘状況	図版15 遺物写真(3)
6. SE01井戸側	図版16 遺物写真(4)
7. SE01井戸側内	図版17 遺物写真(5)
8. SE01井戸側	図版18 遺物写真(6)
図版 8 1. SK02検出状況	図版19 遺物写真(7)
2. SK02板材出土状況	図版20 遺物写真(8)
3. SK02土層断面	図版21 遺物写真(9)
4. SK02土層断面	図版22 遺物写真(10)
5. SK02完掘状況	図版23 遺物写真(11)
6. SK07検出状況	図版24 遺物写真(12)
7. SK07土層断面	図版25 遺物写真(13)
8. SK07完掘状況	図版26 遺物写真(14)
図版 9 1. SD01検出状況	図版27 遺物写真(15)
2. SD01完掘状況	図版28 付章 樹種同定報告 準微鏡写真(1)
3. SD02・03検出状況	図版29 付章 樹種同定報告 準微鏡写真(2)
4. SD02・03完掘状況	
5. SD09・10・11検出状況	
6. SD09・10・11完掘状況	
7. SD10遺物出土状況	
8. SD28完掘状況	

# 第1章 遺跡の環境

## 第1節 遺跡の地理的環境

水見市は、富山県の西北部に位置し、能登半島の基部東側にある。昭和27年の市制施行から昭和29年までに、旧太田村を除く氷見郡1町17村が合併し、現在の氷見市が成立した。面積は約230km<sup>2</sup>、人口は約5万6千人である。

市域は、北・西・南の三方が標高300~500mの丘陵に取り囲まれ、東側約20kmの海岸線をもつ富山湾に面している。

鞍川D遺跡の所在する鞍川地区は、氷見市のほぼ中央を流れる上庄川下流南岸に位置する。河畔に平野が開け、背後には丘陵山地が連なる。上庄川は、氷見市南西端の大釜山(501.7m)に発し、約22kmで富山湾に注ぐ河川であり、氷見市では長さ、流域面積ともに最大である。

鞍川地区の北側に当たる上庄川下流左岸の加納地区の平野には、弥生時代から古代にかけて加納湯(仮称)という湯跡が所在したと推定される。加納湯は南北約1km、東西約0.5kmと推定され、さらに北側の余川下流域に広がる可能性がある。

鞍川D遺跡は、上庄川下流右岸の平野、標高約4mに立地し、背後には丘陵が迫る。鞍川では昭和30年代に土地改良が実施され、整然とした水田が広がっている。土地改良以前は、調査区のある辺りは低地であったという。

## 第2節 遺跡の歴史的環境(第1図・表1)

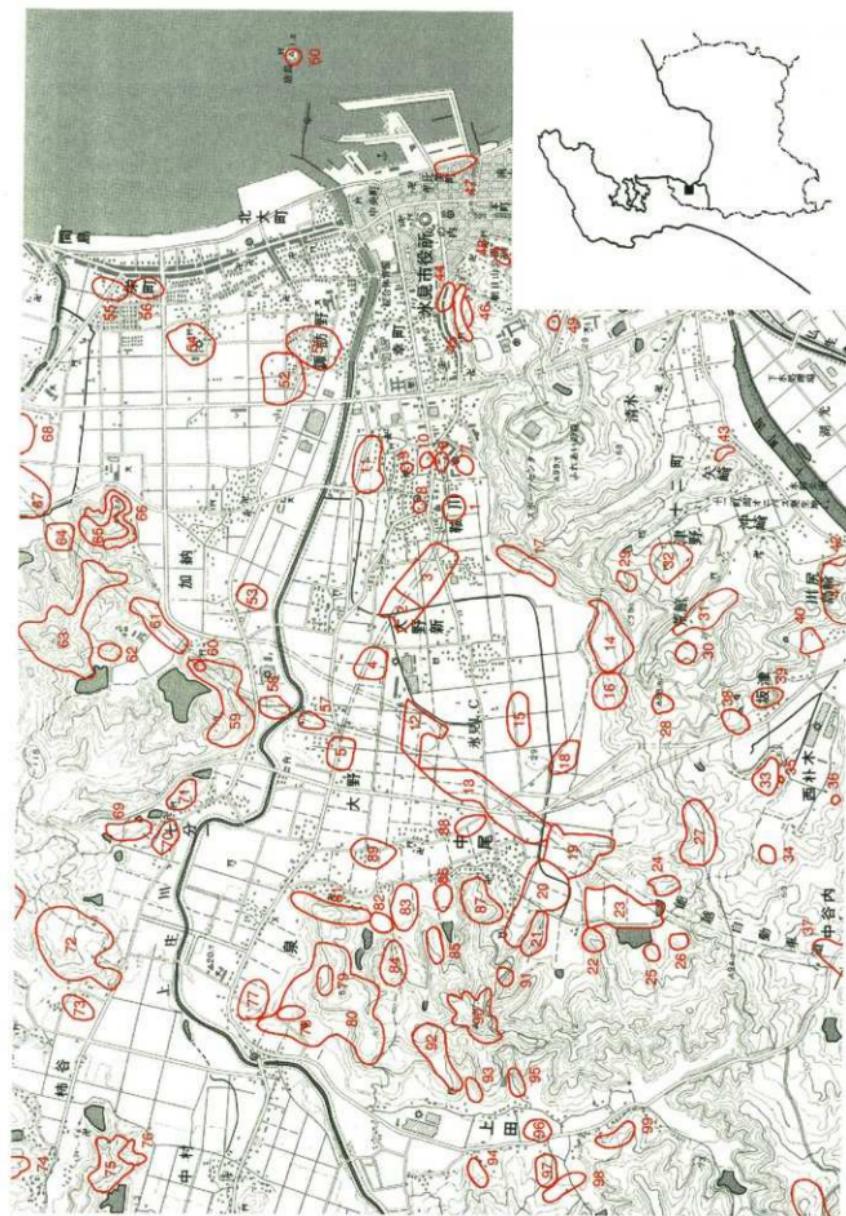
以下、上庄川流域の遺跡について下流域を中心に概観する。

上庄川流域の縄文時代の遺跡は上流丘陵部と下流域に散在している。下流域の縄文遺跡として縄文後期の鞍川寺田遺跡がある。有磯高校のグランド造成工事で縄文土器が出土したというが、詳細は不明である。

上庄川流域は弥生時代に入って積極的な土地利用が行われていったと考えられる。弥生時代中期の遺跡として鞍川中B遺跡がある。鞍川中B遺跡は加納湯に流れ込む流路のほとりの低地に営まれた遺跡と考えられる。弥生時代後期の遺跡として鞍川金谷遺跡が、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺跡として鞍川横羽毛遺跡、兼塚南遺跡、沖布A遺跡がある。いずれも加納湯を跨む丘陵縁辺部から微高地に営まれた遺跡である。弥生時代終末期にはいったん丘陵上へ生活圏が移動したのか、朝日山丘陵上に朝日大山遺跡が営まれた。

古墳時代には、上庄川流域から加納湯周辺にかけての丘陵上に多くの古墳が築かれた。その数は、上庄川流域で31群183基、加納湯周辺で6群62基となり、氷見市内で最も古墳が集中する地域である。これはこの地域が、氷見市内で最も広く安定した平野が開け農業生産に適していたこと、臼が峰越えのルートをはじめとする能登と結ぶ街道がこの谷を通っていたことなどが要因と推測される。だが鞍川南方の丘陵上を見ると、丘陵の反対側の布勢湖(現在の十二町潟)に面した朝日山周辺には古墳群が立地するものの、加納湯に面する鞍川側では古墳の存在は確認されていない。

古代・中世においても上庄川中下流域には遺跡が広く分布している。中世には上庄川流域から十二町潟周辺を範囲とする阿努荘という庄園があり、上庄川の水運、能登を結ぶ陸運などの要素を背景として古墳時代に引き続いて積極的な開発が行われていたと考えられる。鞍川地区では、室町・戦国期の国人主泰綱河氏がこの地域周辺を本拠地としていたことが知られる。



第1図 周辺の遺跡 (S = 1 / 25,000)

第1表 周辺の遺跡

No.	遺跡名	距離 番号	種別	時代	No.	遺跡名	距離 番号	種別	時代	No.	遺跡名	距離 番号	種別	時代
1	鞍川D遺跡	250	集落	古代・中世	34	舟木ヨウコウ山遺跡	383	散布地	古代・中世・近世	66	加納町六笠	32	橋穴墓	古墳～古代
2	鞍川中A遺跡	308	その他	中世・近世	35	西本木アルヤチ遺跡	381	その他	中世	67	NEI-28遺跡(奥林)	375	散布地	古代・中世・近世
3	鞍川中B遺跡	354	その他	中世・近世	36	西本木ドウガヤチ遺跡	382	墓	中世	68	鞍川山遺跡	260	散布地	古墳・古代
4	KB-2遺跡(板取)	309	散布地	古代	37	中谷内遺跡	274	集落	古墳・山地・中世	69	七分一	101	散布地	古墳後・古墳・小世
5	KH-3遺跡(板取)	310	散布地	古代	38	板津遺跡	100	散布地	古代	70	七分-B遺跡	258	散布地	古代・中世
6	鞍川B山遺跡	139	墓	中世	39	上野櫛塚群	54	桶穴墓	古墳	71	七分-C古坟・古墓	328	古墳・墓	古墳・中世
7	鞍川中田遺跡	97	散布地	绳文後期	40	坂谷B遺跡	247	散布地	生	72	板谷A山古墳群	216	古墳	古墳・中世
8	鞍川A山遺跡	138	墓	中世	41	局崎跡	249	桶車	中世	73	板谷山古墳群	191	散布地	中世
9	鞍川C遺跡	224	散布地	中世	42	二町河原遺跡	248	散布地	生	74	板谷C谷内古墳群	353	古墳	古墳
10	鞍川源寺遺跡	180	散布地	中世	43	十二里矢掛桶穴群	385	桶穴墓	古墳	75	中村山古墳群	33	城跡	中世
11	鞍川金谷遺跡	52	散布地	弘生後期	44	利町古墳群	163	散布地	輪文後期	76	中村城(穴門)	177	城跡	古墳
12	人野T河原遺跡	317	集落	中世	45	朝日山遺跡	219	城跡	中世	77	糸瀬山古墳	257	散布地	古墳
13	牛野古墳群	368	集落	中世	46	朝日大山遺跡	361	散布地	生	78	寅之山遺跡	40	散布地	繩文～石器
14	宇P遺跡	51	散布地	弘生～古代	47	比美深遺跡	96	散布地	古墳・中世	79	寅之山谷内古墳群	41	散布地	古墳
15	沖布B遺跡	92	散布地	古代	48	佐曾寺中世墓群	133	墓	中世	80	秦古井古墳群	42	古墳	古墳
16	沖布C遺跡	252	散布地	古代・中世	49	中谷内古墳群	140	桶穴墓	古墳	81	泉住易古墳群	329	古墳	古墳
17	鞍川柳沢毛毛遺跡	251	散布地	生後・古墳前	50	勝鳥遺跡	225	散布地	中世・近世	82	泉住B古墳群	188	散布地	繩文～古代
18	鞍家山遺跡	252	散布地	後生・古墳・中世	51	鍋野A遺跡	107	散布地	古代	83	C遺跡	256	散布地	古代
19	中尾新保谷内遺跡	49	集落	古墳・中世	52	鍋野B遺跡	108	散布地	古墳・中世	84	泉谷内古墳群	341	古墳	古墳
20	泉中B院寺遺跡	38	平谷	中世	53	鍋野打越遺跡	194	散布地	古墳	85	中尾谷方古墳群	342	古墳	古墳
21	中尾手竹野遺跡・中世墓	344	占碑・墓	占碑・中世	54	鍋野宮遺跡	189	散布地	中世	86	泉B古墳群	189	散布地	古墳
22	中尾C古坟	345	古墳	古墳	55	鍋宿三ツ屋遺跡	28	散布地	中世	87	中尾鍋宿古墳群	343	古墳	古墳
23	中尾戸戸戸遺跡	316	集落	古墳・古代・中世	56	鍋宿三ツ屋遺跡	59	散布地	中世	88	大野南遺跡	255	散布地	古代・中世
24	中尾桶穴群	48	桶穴墓	古墳	57	人野T山遺跡	371	散布地	古墳	89	人野泥瓦場	211	散布地	繩文・古代
25	中尾ガメ山遺跡	120	その他	中世	58	七分一草山遺跡	372	散布地	古代	90	久寿城跡	50	城跡	中世
26	中尾山山遺跡	187	散布地	古代	59	加納町吉行古墳群・城跡	327	古墳・城跡	古墳	91	竹架山古墳群	142	その他	中世
27	中尾保家古墳群	352	古墳	古墳	60	加納町山根塚	31	経塚	中世	92	上田古墳群	330	古墳	古墳
28	豐船A遺跡	62	桶穴古墳	不明	61	加納町内遺跡	373	桶穴地	古墳	93	上山A遺跡	214	散布地	古墳
29	十・兩・ガメ山古墳群	246	古墳	古墳	62	加納町六所塚	326	古墳	古墳	94	上山B遺跡	222	散布地	古墳
30	元郎・ソモギ遺跡	192	墓	中世	63	木谷城跡	97	山城	中世	95	上山C遺跡	215	散布地	中世
31	元郎B古墳	106	散布地	绳文・中世	64	福島大坂道遺跡	371	散布地	中世・近世	96	上山D遺跡	258	散布地	古代
32	十一・利津野遺跡	242	散布地	古代	65	加納町子山古墳群	150	古墳	古墳	97	上山E遺跡	212	散布地	繩文・古代
33	西朴木古墳群	359	古墳	古墳						98	上山F遺跡	223	散布地	不明
										99	上山G遺跡	289	散布地	中世

第2章 調査の概要

## 第1節 鞍川バイパス遺跡群発掘調査に至る経緯と経過

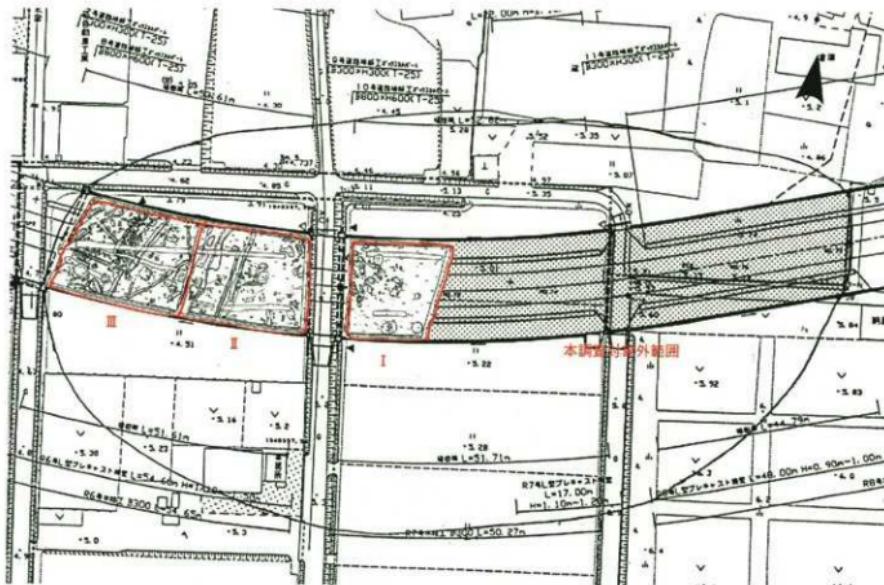
平成12年3月22日、富山県教育委員会により一般国道415号(通称鞍川バイパス)の建設計画地、鞍川・大野・大野新地区の分布調査が実施された。その結果、周知の鞍川D遺跡、鞍川B中世墓のはかに新たに埋蔵文化財包蔵地の存在を3箇所で確認した。新たに確認された包蔵地はそれぞれKB-1遺跡、KB-2遺跡、KB-3遺跡と仮称された。

その後平成12年度には路線の測量、土質調査が実施され、平成13年度からは用地買収が進められた。

水見市教育委員会による試掘調査は、用地買収がほぼ終了した遺跡から実施されることになり、平成14年2月にKB-1遺跡、KB-2遺跡、鞍川D遺跡の試掘調査を実施した。その結果、KB-1遺跡の対象範囲内の2箇所の地点と鞍川D遺跡の西側で遺構、遺物を確認し、本調査が必要であると判断した。(第2図)。KB-1遺跡は南北で分割し、それぞれ鞍川中A遺跡、鞍川中B遺跡とした。

平成14年度より本調査を開始、鞍川中A遺跡、鞍川D遺跡、鞍川中B遺跡の順で調査を実施していき、平成16年度まで本調査を実施した。

平成15年度には鞍川IB中世墓、KB-3遺跡で、用地買収が終了した区画の試掘調査を実施した。平成17年度には鞍川IB中世墓で残る区画の試掘調査を実施した。



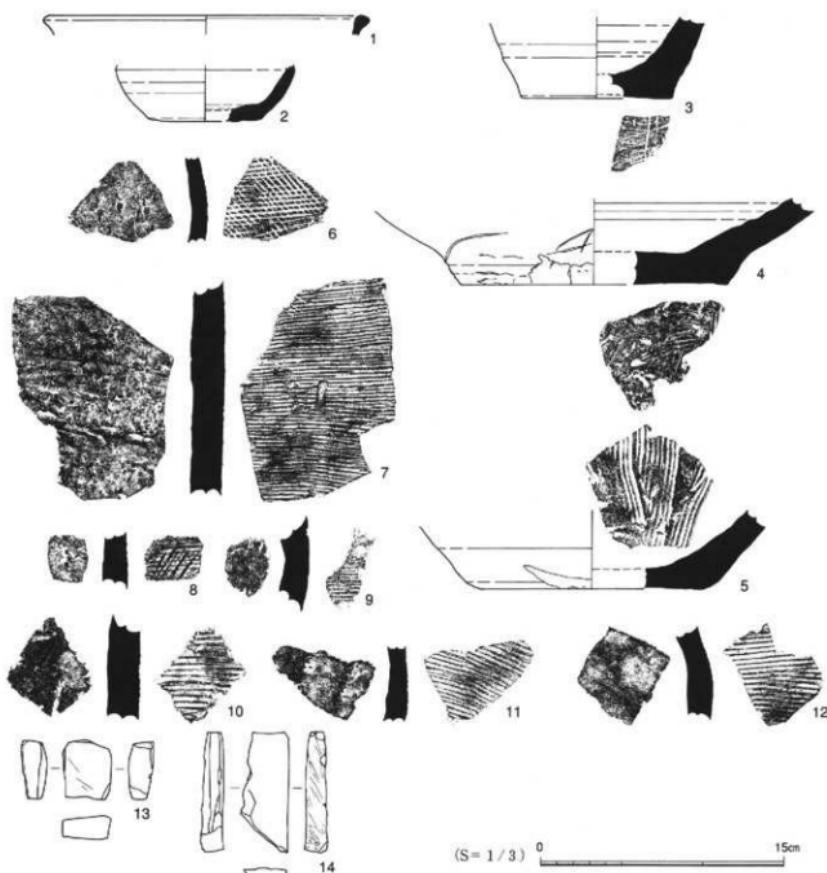
第2図 鞍川D遺跡調査区位置図(S=1/1,000)

## 第2節 鞍川D遺跡試掘調査の成果

鞍川D遺跡は、平成6年度の水見市教育委員会の分布調査で発見された遺跡である。分布調査では、須恵器2破片、珠洲焼2破片、瀬戸1破片、越中瀬戸1破片、近世陶器1破片などが採集されており、古代・中世主体の遺跡と推定された(水見市2002)。

試掘調査は、KB-1遺跡、KB-2遺跡とあわせて平成13年度に実施した。鞍川D遺跡の試掘調査の結果、調査対象地西側で遺構を確認した。一方の遺跡東側では、過去の土地改良の影響を強く受けしており、造成土が厚く堆積している。造成土の下層では遺構を確認していない。

遺物は須恵器・珠洲焼・近世陶器など48点が出土し、そのうち42点が本調査対象となる遺跡西側での出土である。ここでは主な14点を図示した(第3図)。1・2が古代須恵器、3~12が中世珠洲焼、13・14は砥石である。5の擂鉢は、粗雑に施された鉢目から吉岡編年でVI期のものであろう。



第3図 鞍川D遺跡試掘調査出土遺物(S=1/3)

### 第3節 鞍川D遺跡本調査の概要

#### (1) 調査の方法（第2図）

調査にあたっては、調査区を3分割してⅠからⅢまでの地区名を割り振り、まずⅠ・Ⅱ地区を調査し、その後にⅢ地区の調査を実施した。Ⅲ地区の調査に際しては隣接するⅡ地区を腐土置き場として利用した。

表土除去作業には重機を使用し、その後の作業はすべて発掘作業員による人力で掘削を行った。表土除去作業の終了後、國土座標（座標系第Ⅷ系）を用いて10m間隔に基準杭を設定して調査を実施した。

#### (2) 調査の日程

平成17年4月21日に調査区を設定し、以後5月7日まで10日間、重機によるⅠ・Ⅱ地区の表土除去作業を実施した。発掘作業員による作業は5月6日に開始し、機材搬入、草刈を行った。その後の作業はⅠ地区とⅡ地区を並行して、遺物包含層の掘削、遺構の掘削、遺構図の作成と進めていった。6月4日には有磯高校の生徒が日本史の授業を利用し遺跡見学に来訪した。6月5日に空中写真の撮影を実施し、後述するⅠ地区の井戸跡(SE01)以外の作業を終了した。

続いてⅢ地区的調査を開始。6月10日より20日まで8日間、重機による表土除去作業を実施した。発掘作業員による作業は6月23日に開始し、遺物包含層の掘削、遺構の掘削、遺構図の作成と進めていった。6月30日に空中写真の撮影を実施し、Ⅲ地区的作業を終了した。

さて、Ⅰ地区では丸太削り抜き式の井戸側を持つ井戸跡が検出された。この井戸跡(SE01)の作業は、井戸内より木製品を中心とする多くの遺物が出土したこと、井戸側材の取り上げ方法に熟慮が必要だったことから、多くの時間を割き、Ⅰ・Ⅱ地区的調査が終了してⅢ地区的調査を実施している間も並行して作業を進め、最終的にはSE01の井戸側の取り上げをもって鞍川D遺跡の調査の終了を迎えることとなった。

7月10日にはSE01の井戸側が鎌倉期の丸太削り抜き式井戸側であったことを記者発表し、その翌日11日に井戸側の取り上げ作業を実施、鞍川D遺跡の現地での作業を終了した。

取り上げた井戸側とその他の木製品は、平成16・17年度に保存処理を実施するまでの間は、水見市埋蔵文化財整理室にて水漬けの状態で保存し、詳細な検討や、劣化などの作業を行った。平成15年8月22日に甲南大学の出口晶子教授が来訪、井戸側材を実見していただき、丸木舟である可能性を探った。さらに8月29日には地元水見市で造船業を営む船大工の番匠光昭氏に井戸側材を実見していただいた。この一連の検討で、この丸太削り抜き式井戸側材が丸木舟の転用品であったことがほぼ明らかとなった。それを受け12月18日、取り上げ後検討を続けていた井戸側材が、中世の丸木舟の転用品と判明したことを記者発表した。

出土した丸木舟をはじめとする主要な木製品は、前述のとおり平成16・17年度の2ヵ年で保存処理を実施した。

## 第3章 調査の成果

### 第1節 基本層序（第4・5図）

鞍川D遺跡は、丘陵を背に上庄川に向けて開けた平野、標高約4.7～5.4mに立地する。鞍川地区では昭和30年代に土地改良が行われており、特にI地区は土地改良の際の盛土が早く堆積している。

基本層序は、I地区とII・III地区とで違いが見られる。I地区で地山とした造構掘り込み面はにぶい黄色を示す硬くしまったシルト層で、その下層に黒褐色砂質土、黄褐色砂が堆積する。その上に土地改良前の水田耕作土・畦畔、土地改良時の盛土、土地改良後の水田耕作土を確認している。II・III地区では、褐色砂の地山の上に黒褐色砂質土・暗褐色砂質土等の遺物包含層（II地区：8・9層、III地区：4層）が堆積し、造構はその盛土層の下に掘り込まれる。またII・III地区の地山にはこぶし程度の軽石が混入していた。なおII・III地区には現水田耕作土直下に掘り込む多数の柱穴が確認されている。特にIII地区中央では、南北に長い範囲で柱穴が密集しており、下層の造構は擾乱を受けている。この柱穴群の詳細は不明だが、近現代の樋架（ハゾ）穴の可能性がある。

### 第2節 造構（第10～21図）

今回の調査では、井戸（SE）、溝・流路（SD）、土坑（SK）、柱穴列（SA）、ピット（SP）、性格不明造構（SX）等を検出した。なお調査時の造構名をそのまま使用しているため、一部の造構で実際の造構の属性と異なる略号を付してある場合がある。主要な造構については図化し、以下に詳述する。

#### 井戸

今回の調査では、I地区で3基の井戸跡を確認した。

SE01（第10図） I地区南辺に位置する丸木舟転用の井戸側材を持つ井戸跡である。平面形は長径330cm、短径243cmの楕円形である。検出面から井戸底部（井戸側下端部）までの深さは208cmを測る。井戸側は湧水層である地山砂層にそえ付けられており、水溜の施設は存在しない。

井戸側には前述のように丸木舟が転用されている。丸木舟の船首・船尾が切り離されたものを輪切りにし、向かい合わせに組み合わせてあった。第10図の構造模式図のように、当初は2つの部材を互い違いに組み合わせ、生じた隙間を大小の板材でふさいだものだったと考えられるが、検出した時点では丸木舟部材は割れ、一部の部材が内側へ押し出されるようになっていた。これはおそらく井戸使用期間中に土圧などの影響を受けたものと考えられるが、内側へ傾いた部材につっかえの角材（165）が入れられており、その後も井戸の使用を継続したものとみられる。

埋土を見ると、1～5層は、井戸廃絶後の堆積土と考えられる6・7層、井戸側埋設の際に入れられたと考えられる8～21層、さらには井戸側材そのものを掘り込んでおり、いったん井戸上部を擂鉢状に掘り込んでから埋め戻したものと考えられる。6・7層は前述どおり井戸廃絶後の堆積土で、木製品や土器類とともに種実・木片・竹・松ぼっくりなどの自然遺体が多数出土している。これらはその出土状況から、人為的な埋納というより、井戸の利用が終了した後も長期間開口していたために自然に堆積したものと捉えられる。8～21層は井戸構築の際の埋め戻し土だが、井戸側材を地下に埋設するため、かなり大きく地面を掘り込ん

だことがわかる。地山は大変崩れやすい砂層なので、意図せず大きな掘り込みとなった可能性もある。22層は湧水に伴って井戸側内に噴き上がった地山砂である。

出土遺物の検討から、井戸が最初に構築されたのは13世紀前半。歪んだ井戸側材を応急処置しつつ使用を続け、同じく13世紀前半のうちには井戸としての役割を終えた。その後は自然堆積するに任せたものを、13世紀後半以降（下限は15世紀後半頃か）に埋め戻した。その際には、井戸側（とその上にあったであろう地上施設である井桁）を破壊するために、地面を擂鉢状に掘り込んで上部を完全に壊してしまってから埋め戻し、地ならしを行ったものと考えられる。

#### （自然化学分析の結果）

今回の調査にあたっては、自然科学分析をパリノ・サーヴェイ株式会社に委託して実施しており、その報告は「鞍川中B遺跡・鞍川バイパス遺跡群発掘調査報告Ⅲ」（水見市教委2006）に掲載した。ここではパリノ・サーヴェイ株式会社からの報告をもとに、SE01に関するデータを抜粋して掲載しておく。

実施したのは、井戸内から出土した木片の放射性炭素年代測定、井戸側内下層の堆積土の珪藻分析・花粉分析・寄生虫卵分析・植物珪酸体分析・微細物分析・種実・木材・骨の同定である。

放射性炭素年代測定では、（1）井戸側外側埋土出土の炭化材（クリ）、（2）井戸側内堆積土出土の炭化材（針葉樹）、（3）同木製品（ヒノキ科）を試料とした。測定の結果、（1） $980 \pm 80$ BP (calAD984-1,159)、（2） $770 \pm 140$ BP (calAD1,045-1,387)、（3） $1,290 \pm 70$ BP (calAD656-856) の値を示した。値にややばらつきがみられるものの、いずれの試料も中世より古く、平安時代の年代を示している。（1）については井戸構築時の混入である可能性が高く、（2）（3）は自然堆積の期間に混入したものと考えられる。

珪藻分析の結果では、淡水～汽水生種、陸生珪藻、淡水域に生育する水生珪藻など複数の由来を持つ種類が高い割合で混在していた。これは、井戸が廃絶された後に周囲の土壤によって自然に埋積したか、あるいは周囲の土壤を使用して人為的に埋め立てられたため、さまざまな生態性をもつ珪藻が混在しているものと思われる。

花粉分析では、花粉化石の検出が少なかったものの、モミ属、マツ属、イネ科、シソ科、シダ類胞子などが確認されている。なお寄生虫卵は検出されなかった。

植物珪酸体分析では、栽培植物であるイネ属の葉部に由来する短細胞列や機動細胞列、種柄殻に形成される頸珪酸体が認められ、短細胞列と頸珪酸体の産出が日立つ。この他、単体の植物珪酸体としてタケ革科やヨシ属、ススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ科なども認められる。

微細物分析及び種実同定では、木本6分類群40個、草本15分類群106個が検出され、栽培植物のモモ、イネ、ソバと、栽培植物の可能性があるカキノキ近似種が確認された。

樹種同定では、井戸内から出土した木片の同定を実施したが、スギ、ヒノキ、ウルシ、エゴノキ、ニレ属、ウツギ属、ツバキ属などが確認されている。

骨同定では井戸側内堆積土の下層から出土した骨1点の同定を実施した。この骨は、ドチザメの椎骨であり、一部破損する。椎体長757mm、同様1208mmを測る。ドチザメは、北海道南部以南の日本各地、東シナ海、日本海大陸沿岸、渤海、黄海、台湾に分布し、内湾の砂地や藻場、汽水域にも出現し低塙分にも対応するとされ、小魚やタコ・イカなどを捕食する体長18m程度の大型のサメである。おそらく、内湾などで網などに入ることもあったと思われる。

以上のように、種実同定や植物珪酸体分析では、井戸内から有用植物の化石が多く認められる。今回有用種実としてはモモ、カキ、ソバが検出されており、これらが投棄(もしくは堆積)された可能性がある。また、植物珪酸体分析の結果ではイネ属が多産することから、稻藁や稻穂を井戸に投棄した可能性がある。ただし、今回検出された有用種実の個数が少なく、周辺の山野に普通にみられる種実も多数検出されていることから、自然堆積の可能性も否定できない。

SK02（第17図） SE01の東側に位置する。長径243cm、短径230cmの円形を呈する。湧水層までの深さは約80cmを測る。I地区の地山は上層にぶい黄色を呈する硬くしまったシルト層が堆積し、その下は砂質土層・砂層となっているが、SK02では砂層の崩落が進み、断面を見ると著しくオーバーハングしている。井戸側材はないが、崩壊しやすい砂層に掘り込まれていることから考えて、当初存在した井戸側を、廃絶時に抜き取ったものと推測される。底面には二枚の板材が重ねて置かれていた（上240・下241）。また、井戸跡のほぼ中央の底面近くで縦に地山に立てられた竹筒を確認している。

この竹筒は節が抜かれており、井戸埋め戻しの際に設置された「息抜き」と考えられる。「息抜き」は井戸を埋める際に井神の通り道を確保するためのものといわれ、井戸埋め戻しの際の祭祀行為のひとつである。また先述したように、井戸側は確認していないが、砂地に掘り込まれていることからも井戸側の存在は不可欠と考えられ、おそらく埋め戻しの際に抜き取られたのだろう。なお井戸底面に置かれていた2枚の板材は、抜き取られた井戸側材の一部を重ねて意図的に埋納したものである可能性がある。

出土した遺物は珠洲焼、中世土師器皿、木製品などが中心で、13世紀前半のものと14世紀中頃までの二群に分けられる。井戸構築年代の上限が13世紀前半頃、埋め戻しが14世紀中頃と考えておく。また自然遺物としてモモの種実が出土している。

SK07（第13図） I地区の北西に位置する。長径214cm、短径192cmの不整円形を呈する。井戸側は存在しないが、底面が湧水層まで達していることから井戸跡の可能性が高いと考えた。湧水層までの深さは約80cmを測る。角材1点と板材1点が出土しており（第41図258・259）、SK02同様井戸側材の埋納である可能性がある。SK07では他に木札が1点、土器片が1点出土している。土器は細片で詳細は不明である。

#### 溝・流路

SD01（第11・12図） II地区を南北に流れる流路である。検出長1968cm、最大幅555cm、深さ33cmを測る。埋土は単層で、上層から下層にかけて珠洲焼、中世土師器が散布しており、珠洲焼はI～II期及びIII期、中世土師器は12世紀後半のものが中心となる。

SD02（第11・12図） SD01・SD03と平行する溝である。検出長1440cm、最大幅88cm、深さ23cmを測る。珠洲焼、中世土師器が出土している。

SD03（第11・12図） SD01・SD02と平行する溝である。検出長1857cm、最大幅179cm、深さ24cmを測る。I～II期を中心とする珠洲焼、中世土師器が出土している。

SD04（第13図） Ⅱ地区中央に位置しSK23に切られる溝である。最大長376cm、最大幅70cm、深さ21.5cmを測る。珠洲焼が1点出土している。

SD07（第13図） T地区北西、SK07に近接する溝である。最大長283cm、最大幅82cm、深さ18.5cmを測る。

SD09・SD10・SD11（第14図） Ⅲ地区北西側に位置する。南西から北東に向けて流れるSD09とそれに直交するSD10、流れ込むSD11である。SD09は検出長1286cm、最大幅280cm、深さ36cmを測る。北側には中州状の部分がある。SD09から直角に伸びるSD10は検出長562cm、最大幅85cm、深さ23cmを測る。南西側からSD09と平行に流れ、直角に屈曲してSD09に接続するSD11は検出長650cm、最大幅70cm、深さ18.5cmを測る。SD09では、珠洲焼、中世上師器（14世紀前半、15世紀前半のもの）を中心に、古代土師器や越中瀬戸焼が出土している。SD10ではⅢ期の珠洲焼が出土している。

SD19（第15図） Ⅲ地区中央南側に位置する溝である。検出長608cm、最大幅88cm、深さ32cmを測る。珠洲焼、土師器が出土している。

SD25（第15図） Ⅲ地区西側に位置する東西方向の溝である。最大長294cm、最大幅52cm、深さ21cmを測る。

SD26（第15図） SD25と平行する溝である。最大長906cm、最大幅80cm、深さ18cmを測る。

SD27（第16図） Ⅲ地区南東に位置する溝である。最大長314cm、最大幅88cm、深さ13cmを測る。SA03と平行する。

SD28（第15図） Ⅲ地区北東角に位置する溝である。最大長706cm、最大幅60cm、深さ31cmを測る。

SD29（第15図） SX05に切られる東西方向の溝である。最大長278cm、最大幅104cm、深さ10cmを測る。珠洲焼、須恵器杯、土師器が出土している。

SD30（第16図） Ⅲ地区中央を南北に横切る溝である。最大長1358cm、最大幅126cm、深さ24cmを測る。遺物は須恵器、古代土師器の杯類が出土している。

SD31（第16図） Ⅲ地区的南東に位置する溝である。検出長1650cm、最大幅110cm、深さ15cmを測る。SD01に接する部分で二股に分かれる。SD01と切り合う部分が調査区の境になってしまったため、新旧関係あるいはSD31がSD01に流れ込んでいたかなど詳細は不明である。古代土師器、中世上師器皿が出土している。

SD37（第16図） SD31を横切る南北方向の溝である。最大長1650cm、最大幅110cm、深さ15cmを測る。

### 柱穴列（櫛列）

調査で検出されたピットは、そのほとんどが規則性を判断できないものだったが、明確に列を構成するものとして抽出できる柱穴群が三群確認できた。

SA01（第11・12図） SD01に平行するもので、SP129・SP130・SP131で構成される。柱間は120～140cmである。

SA02（第16図） Ⅲ地区のSP320・SP321・SP322・SP323・SP324・SP325・SP326・SP327・SP328・SP330で構成される。柱間は150～170cmである。

SA03（第16図） Ⅲ地区のSP311・SP312・SP313・SP314・SP315・SP317で構成される。やや間隔が開くものの、第16図では図化していないⅡ地区のSP87・SP88まで含まれる可能性がある。柱間は120～130cmである。

### 土坑

SK03（第17図） I地区中央西よりに位置する隅丸方形の土坑で、長径140cm、短径122cm、深さ21.5cmを測る。

SK04（第18図） I地区中央に位置する楕円形の土坑で、長径170cm、短径96cm、深さ14cmを測る。

SK05（第18図） SK04の南側に位置する浅く不整形の土坑で、最大長257cm、最大幅164cm、深さ17cmを測る。

SK06（第18図） I地区北西側に位置する不整形に長く伸びる土坑で、最大長402cm、最大幅126cm、深さ17cmを測る。土師器が1点出土している。

SK12（第18図） SD07南側に近接する隅丸方形の土坑で、長径103cm、短径95cm、深さ64cmを測る。古代土師器、珠洲焼などが出土している。

SK18（第19図） II地区北東側に位置する不整隅丸長方形の土坑である。単層で、最大長226cm、最大幅93cm、深さ29cmを測る。

SK19（第19図） SK18と平行する不整形の土坑である。単層で、最大長334cm、最大幅206cm、深さ51cmを測る。土師器が2点出土している。

SK20（第19図） II地区東壁付近に位置する。不整楕円形の土坑である。単層で、長径166cm、短径117cm、深さ13cmを測る。

SK21（第19図） SK20と近接する土坑である。検出長166cm、最大幅117cm、深さ13cmを測る。

SK22（第19図） II地区中央やや東よりに位置する不整楕円形の浅い土坑である。長径187cm、短径105cm、深さ8cmを測る。

SK23（第13図） II地区中央に位置する不整楕円形の土坑である。SD04を切り、長径272cm、短径206cm、深さ71.5cmを測る。珠洲焼、中世土師器、越中瀬戸焼が出土している。

SK27（第20図） II地区南東側に位置する不整形の土坑である。SP56に切られる。最大長177cm、最大幅112cm、深さ25cmを測る。

SK28（第20図） SK27に近接する不整楕円形の土坑である。試掘レンチに一部削平され、検出長238cm、最大幅157cm、深さ23cmを測る。土師器が2点出土している。

SK30（第20図） II地区中央やや南よりに位置する楕円形の土坑である。長径167cm、短径85cm、深さ30cmを測る。土師器が1点出土している。

SK32（第18図） I地区中央東よりに位置する円形の土坑で、長径129cm、短径117cm、深さ51cmを測る。南側に木杭が刺さっているが、土層の堆積と木杭に関係性はなく、後世のものか。

SK37（第21図） III地区南壁沿いに位置する隅丸方形の土坑である。最大長220cm、検出幅120cm、深さ12cmを測る。

SK38（第20図） SD26の南側に位置する楕円形の土坑である。長径88cm、短径57cm、深さ24cmを測る。中世土師器皿が1点出土している。

SK39（第20図） III地区中央南側に位置する不整方形の土坑である。長径180cm、短径145cm、深さ35cmを測る。

SK40（第15図） SK39の北東側に位置しSD19に切られる浅く不整形の土坑である。最大長242cm、最大幅138cm、深さ15cmを測る。土師器、近世陶器が出土している。

SK42（第15図） SD25と平行する楕円形の土坑である。長径115cm、短径46cm、深さ10cmを測る。

SK43（第16図） SD27に近接する浅く不整形な土坑である。単層で、最大長144cm、最大幅130cm、深さ8cmを測る。

SK44（第16図） SK43に接する浅く隅丸方形の土坑である。単層で、長径168cm、短径140cm、深さ10cmを測る。

SK45（第15図） Ⅲ地区北東よりに位置する方形の土坑である。単層で、長径96cm、短径80cm、深さ25cmを測る。

SK46（第16図） Ⅲ地区やや南東よりに位置する浅い不整隅丸方形の土坑である。単層で、長径152cm、短径132cm、深さ11cmを測る。

SK47（第16図） SA03に切られる小型の土坑である。長径78cm、短径71cm、深さ14cmを測る。

SK48（第20図） Ⅲ地区中央南側に位置する不整梢円形の土坑である。長径198cm、短径96cm、深さ24cmを測る。

SX01（第21図） Ⅲ地区南西角に位置する大型の土坑である。検出長394cm、検出幅324cm、深さ45cmを測る。黒褐色砂質土とオリーブ褐色砂が交互に堆積している。上層から珠洲焼・近世陶磁器類が出土しており、底面近くからは板材（288）が出土している。

SX02（第21図） Ⅲ地区南西側に位置する不整円形の土坑である。長径336cm、短径324cm、深さ45cmを測る。12世紀後半～13世紀前半頃の中世土師器皿、近世陶磁器類が出土している。

SX03（第21図） SX01の東側に位置する。検出長372cm、最大幅102cm、深さ19cmを測る細長い土坑である。

SX04（第21図） SX03に沿う不整形の土坑である。検出長234cm、最大幅194cm、深さ15cmを測る。

SX05（第15図） SD29を切る不整形の土坑である。最大径570cm、最大幅216cm、深さ20cmを測る。須恵器・土師器・珠洲焼・近世磁器が出土している。

### 第3節 遺物

調査では、土器陶磁器類等942点、石製品7点、木製品・植物遺体等744点のあわせて1,693点の遺物が出土した。ここでは、そのうち403点を図示した。なお珠洲焼は吉岡康暢氏の7期編年（吉岡1994）に準拠した。曆年代はⅠ期：12世紀後半、Ⅱ期：13世紀前半、Ⅲ期13世紀中葉～1270年代、Ⅳ期1280年代～1370年代、Ⅴ期：1380年代～1440年代、Ⅵ期：1450年代～1470年代、Ⅶ期：1480年代～1500年と推定されている。

#### （1）遺構内出土遺物

##### SE01出土遺物（第22～35図）

SE01出土遺物は、出土した地点や上層の検討の結果、1. 挖形埋土出土遺物、2. 井戸側外側埋土（井戸側崩壊時の裏込め土もしくは掘形埋土の流入土）出土遺物、3. 井戸側内堆積土出土遺物、4. 埋め戻し出土遺物、5. 井戸側構成材の5つに分類した。

1は井戸が最初に築造され、井戸側が埋設された時点で埋没したもの、2は井戸築造時と井戸使用時の二通りの可能性があるもの、3は井戸の使用が終了した後、自然に堆積した土の中に含まれていたもの（井戸祭祀関連の遺物も含む）、4は最終的に井戸側を破壊し井戸を埋め立てた際に埋没したものである。

##### 1. 挖形埋土出土遺物

1～10は珠洲焼である。1は内面にうねりながら十字に交差する鉢目が施される片口鉢で、吉岡編年でⅡ期と考えられる。2も片口鉢だが、やや粗雑な胎土で鉢目が荒くⅢ～Ⅳ期のものか。3は口縁部を四角く面取りした片口鉢で、酸化硬質の焼き上がりで赤褐色を呈する。Ⅰ～Ⅱ期のものと考えられる。4はⅡ期とみられる甕の口縁、5～10は壺壺類の体部破片である。9と10は同一個体の破片で、いずれも叩き目が粗く、焼きは甘く明褐灰色を呈する。それらを考慮するとⅥ期のものとなろう。なお9のみ内外面に煤が付着する。

11～15は中世土師器皿である。いずれも非クロ成形で、13世紀前半のものである。13は内外面に煤が付着している。

16は砥石である。流紋岩製で最大長6.5cm、最大幅6.5cm、最大厚3.4cmを測り、重さ157gを量る。

17～20は木製品である。17は曲物の底板と見られる円盤状のもので、3方向に側板を固定するための釘穴が確認できる。長径17.1cm、短径16.6cm、最大厚0.9cmを測る。18は曲物の側板破片。締じ合わせのための孔が3か所確認できる。19は板材、20は自然木を人為的に切断したものである。

2・9・10など、埋め戻し及び上部構造材の破壊時に混入したと見られるものもあるが、それ以外はおおむね13世紀前半までの遺物を中心としている。

##### 2. 井戸側外側埋土出土遺物

21～25は珠洲焼である。21は壺の颈部だが、内外面の剥離が著しい。22～25は壺壺類の体部破片である。

26は陶質に焼き上がる土器の体部破片である。内面にハケメ調整が施される。外面は剥離しているようにも見受けられ、詳細は不明である。27は非クロ成形の中世土師器皿で、13世紀前半のもの。

28は石硯である。粘板岩製で、残存長8.2cm、残存幅4.7cm、残存厚1.7cmを測り、重さ6231gを量る。上面は剥離し、内面（海部）の一部が残存している。外面形は方形で、下部に向けて広がるようにも見受けられるが、台形硯か長方硯かは判断しづらい。表面は平坦で、側面は表面に向けて広がるように傾斜している。内面の

平面形は入角式ではなく、外面形に沿った形になると見られる。それらの特徴を水野和雄氏の分類に当てはめると、台形硯 I A c もしくは長方硯 I A c に該当する。その年代観は、台形硯 I A c とすれば13世紀中頃から15世紀中頃に、長方硯 I A c とすれば14世紀後半頃から15世紀後半頃ということになる(水野1985)。なお梅原胡摩堂遺跡からは12世紀後半から13世紀の遺構から長方硯が出土しており(富山県文化振興財團1996)、28がそこまで遡る可能性も残る。

29は、長卵形の自然石が割れたものだが、一方の端部に敲打痕が残る。砾石器の一種か。石材は輝石安山岩で、残存長10.9cm、残存幅6.8cm、残存厚5.3cmを測り、重さ371gを量る。

30~42は木製品である。30~35は曲物の側板破片で、いずれも内面にケビキが入る。36・37は箸状木製品、38・39は板材。40は端部を斜めに加工したもの。41・42はおそらく同一個体の不明木製品。いずれも側面が炭化している。それぞれの三角に加工した部分が肉端になるとすると、例えば舟形のようなものになる可能性もある。

### 3. 井戸側内堆積上出土遺物

43~47は珠洲焼である。43~45は片口鉢の口縁部でいずれもⅡ期のものであろう。46は鉢ないし壺の底部近くの破片、47は壺堀類の体部破片である。

48~60はいずれも非口クロ成形の中世土師器皿。48~52・57が13世紀前半、その他も13世紀の範囲におさまるものだろう。57は口縁外間に煤が付着している。60の外面には「川」と読める墨書きが確認できる。

61は土鍤。寸胴型で最大長5.4cm、外径4.5cm、内径2.1cmを量り、重さ80.36gを量る。

62~113は木製品である。62は漆器の皿。材質はトチノキである(付章参照)。見込みに文様があり、底外面は削られ木地がむき出しとなっている。12世紀末から13世紀前半頃のものと考えられる。63は舟形木製品である。舟形代として祭祀行為に用いられたものか。上面には三段に削り込みを入れる。下半を欠き残存長8.7cm、最大幅2.9cm、最大厚1.0cmを測る。64は陽物形木製品か。断面を多面的に面取りした棒材に切り欠きを入れている。下半を欠き残存長6.7cm、長径2.3cm、短径1.9cmを測る。73~76は曲物側板破片で、74~76の内面にはケビキが入る。73は綱のケビキではないが、斜めに交差する切込みが入れられている。86は、2か所に浅いV字の切り欠きを入れた板材である。88~101は箸状木製品。107・110は木杭。107は前面に加工が施されるが、110は自然の木の先端を尖らせただけのものである。111・112はいずれも同種のもので、桜のような木の枝の先端を面取りしたもの。113は柄杓の柄。先端近くに柄杓本体である曲物などを固定する木釘(ないし竹釘)が、貫通するものが1つ、貫通しないものが1つの計2つが確認できる。この釘穴の位置から取り付けられていた曲物は直径8cm前後のものだと推測される。その他の木製品には、木札状のもの(102・103など)や板状のもの(87・104など)、棒状のもの(81~85・106など)があり、中には形代のような意味をもつものや、井戸側の破片もあるかもしれない。

以上、井戸側内の堆積上から出土した遺物はおおむね13世紀前半に属するものと考えられる。井戸側堆積上内からはここであげたもののほかにも自然遺物が多数出土している。

#### 4. 埋め戻し土出土遺物

114～125は珠洲焼である。114は肩部に波状文を巡らせたクロコ壺の破片で、I～II期のものである。115はI期の片口鉢、116もI～II期の片口鉢であろう。内面の一部にさっと描いたような鉤目が確認できる。117は壺ないし鉢の底部である。118～125は壺壺類の破片。119・120は9・10と同一個体で、叩き日は粗く、焼きも甘く明褐色を呈するもの。先述したようにそれらの特徴からはVI期まで下る可能性がある。

126は山茶碗。13世紀前半のものである。山茶碗は近接する鞍川中B遺跡からも出土が確認されている(水見市教委2006)。127は白磁、12世紀から13世紀前半のものである。128は青磁。こちらは13世紀中ごろから14世紀までに属すると考えられる。

129～134は中世上部器皿である。129が13世紀後半、その他も13世紀代に属すと考えられる。

135は木の板である。井戸埋め戻し時に破壊された井戸備材の破片だろうか。

埋め戻し土内から出土した遺物には、井戸<sup>i</sup>の使用中である13世紀前半頃のものも含まれるが、13世紀後半の上部器皿(129)や、13世紀中頃以降と見られる青磁(128)、15世紀後半まで下る可能性のある珠洲焼(119・120)が出士している。

#### 5. 井戸側構成材

136～165は井戸側構成材である。丸木舟とその他に分けて記述する。

(丸木舟)

136～140は丸木舟転用の井戸側構成材である。136と137、138～140がそれぞれ接合する。丸木舟の船首部・船尾部を切断し、輪切りにした断面「コ」の字形の部材を、互い違いに組み合わせて井戸側としてあった。本書では以後136・137を丸木舟(a)、138～140を丸木舟(b)と呼称する。

丸木舟(a) 残存長166.8cm、最大幅102.0cm、最大高68.8cm、船体の深さ56.4～60cmを測る。材質はスギである。136と137の2つに割れていたが、これは井戸側として使用されている際に土圧などの影響で割れたものと考えられる。<sup>11)</sup>上部は破損及び腐食により原形をとどめていないが、井戸の底側になっていた小口、舷側端面などには工具痕等が良好に残存していた。舷側端部の厚みは一定ではなく、小口側に向いて厚くなり、小口側で6.8cm、薄い部分で2.8cmを測る。船底部も小口側が厚く12.8cmを測り、薄い部分で9cmを測る。舷側端面は水平ではなく、やや内傾している。

小口側の舷側上部には「コ」の字形の切り欠きと方形の穴があり、これらは両舷で向かい合って対応しているが、切り欠きの深さは左右で異なっている。切り欠きの縦横の大きさは、136が1.6×4.8cm、137が4×3cmを測る。方形の穴の縦横の大きさは、136が5.2×3.6cm、137が6×4.8cmを測る。方形の穴を断面で見ると(第29回断面b・d)、中央部が狭く、材の外側に向いて広がる構造を持っていることがわかる。なお、穴内面には繩をかけたりしたような磨耗痕はない。

136の切り欠きの下方には、もう1つ長方形の穴が開けられており、そこは別部材でふさがれている(第29回断面c)。この別部材もスギ製である。別部材の厚みは舷側部の厚みの半分程度しかなく、舷側内面に長方形の凹みが出来ることになる。

136では、船体の腐食部側の舷側部にも横長の長方形を有する穴が確認でき、2.4×5.4cmを測る。その反対側、137でも腐食のため途切れてはいるものの対応する穴が存在し、こちらは4.4×12.4cm程度の大きさとなる。

(腐食により厳密な寸法は不明)。137では舷側部の穴の下方にさらに44×22cmの楕円形の穿孔が確認できる。

舷側部の端面には切削痕が明瞭に残っている。これは舷側の上辺を整形した工具の刃痕と考えられる。刃痕を観察すると、船体の縦方向(=木材の繊維方向)に平行に切削されており、主刃痕が24~52cm、進行刃痕が12~28cmを測る。<sup>12)</sup>形状はサジ面を持つ船形のもので、チョウナ(手斧・鋸。いわゆる横斧)によるものであろう(廣瀬2005)。幅が広い小口側では2列にわたり、幅が狭くなった部分は1列の切削を施している。切削痕の残存は、おそらく舷側端面に別材による「コベリ」が装着されていたためと推測される。コベリを装着することで、「コ」の字形の切り欠きも方形の穴として機能したのではないだろうか。

船底部外面には、無数の小穴が確認できるが(図版16-6)、これはフナクイムシ、キクイムシなど海水域~汽水域に生息する生物による食害痕と考えられる。<sup>13)</sup>また船底部内面を見ると、埋木がされているのが目を引く。この埋木は長径14cm、短径6.4cmの不整形で、ちょうど埋木の部分にあたる船底部外面に食害痕が集中しているため外面上にも顔を出し、貫通した穴をふさいだような状態になっている。これが本来そうだったのか、食害痕による二次的なものなのかは検討をする。船底部内面にはこの他、船体に対して斜め方向に入った工具痕(切痕)が残っている。

小口には、丸木舟を井戸側に転用する際に、船体を切断した鋸の痕跡が明瞭に残っている。切断の際には左右舷側から縦で切り込んでいたらしく、船底部の中央付近で左右から入ってきた鋸目がかち合い段差が出来ている。この鋸目の入り方からも、井戸側に転用された時点で136と137が断裂していなかったことが判断できる。鋸入れの際に慎重に位置決めをしたためなのか、両舷とともに実際の切断面より内に入ったところに鋸で切り込んだ痕跡が残っている。136では船体外面のみ、鋸の切り込みから延びる溝が彫られている。これらも鋸でつけたものと考えられ、切断の際の目安として彫ったものだろう。

丸木舟(b) 残存長178.4cm、最大幅96.8cm、最大高60.0cm、船体の深さ49.2~51.2cmを測る。材質はスギである。こちらは舷側が立ち上がる部分で3つに割れていたが、割れ口を内側からカスガイで補修した痕跡が残っている。このため、井戸側に転用された時点ですでに割れていたか、ある程度割れが進行していたと推測される。こちらも丸木舟(a)同様、上部は破壊及び腐食により原形をとどめていないが、小口、舷側端面などには工具痕等が良好に残存していた。舷側端部及び船底部の厚みは全体にはば一定で、舷側端部が28cm、船底部が8~8.4cmを測る。丸木舟(a)に比べて全体に薄い作りである。特に舷側の立ち上がり部分は船底部分を広く取るために薄くなってしまっており、そこから割れが進行したと考えられる。舷側端面は水平ではなく、やや内傾している。

小口側の舷側上部には方形の穴が開けられている(138には2か所、140には破損のため1か所)。穴はいずれも28×32cm程度のもので、上方の角に縄をかけて磨り減った痕跡が認められる。丸木舟(a)の穴とは根本的に異なる目的を持つ穴だと考えられる。なお138の内面、穴の横には艦と推測される刃痕が残る。これは穴の大きさとほぼ同じであるため、穴を開けようとして中断した痕跡だと考えられる。また138では腐食部側に不整五角形を呈する穴が開けられている。相対する140の舷側部は欠落しており、左右にあったものかは不明である(なお140の欠落部分は井戸跡からは出たしていない。上部破壊時に抜き取られたものか)。

舷側部の端面には丸木舟(a)同様、チョウナによると見られる切削痕が確認できる。こちらの舷側端面は幅が狭いため、1列に切削痕が並んでいる。切削痕1単位の長さ(進行刃痕に対応)は12~68cmを測る。こちらの舷側部にもコベリが設置されていた可能性がある。

船底部外面には丸木舟(a)と同じくフナクイムシによる食害痕が確認できるが、丸木舟(a)がより食害が激しく、丸木舟(b)ではそれほど被害を受けていない印象がある。また意図したものかどうかは不明ながら、船底にあたる139ではスギ材のフシが抜けて穴となっている場所が2か所ある。

前述したように、船底内面から舷側が立ち上がる部分には、割れをつなぎとめるようにカスガイによって補修されている。カスガイは138・139間に1か所、139・140間に5か所入れられている。腐食部にある1か所を除き、錆化した爪部が穴の中に残存している。カスガイ本体は残存しないが、カスガイが装着されていた部分の木肌が浮き上がって残っており、そこからカスガイはいずれも同サイズで幅1.5cm、長さ9cmを測ると推測される。

小口には井戸側転用の際の鋸による切断痕が残っている。この切断痕を観察すると、まず138の舷側上端から船底の方に切り込んでいき、いったん鋸を止め、再度140の舷側端面から鋸を入れ直し、140から139までは連続して切断している。これらの状況から、割れがどの程度まで進行していたにしても、舟の前後を切断するまでは丸木舟としての形は維持していたことになる。上記したカスガイによる補修は、井戸側として用いられる際に施された可能性も考えられたが、切断痕の状況から考えて、丸木舟の補修として施された可能性がより高いと思われる。

さて、木目、年輪、フジの入り方などを検討した結果、丸木舟(a)と丸木舟(b)は一艘の丸木舟から切り出した部材である可能性が高いと考えられる。用材の木取りは、丸木舟(a)の小口をスギの根元側、丸木舟(b)の小口をスギの先端側とし、腐食部が船体・用材の中央部となると推測される。根元側にあたる丸木舟(a)の木目、年輪を観察すると、用いられたスギは根元がカーブしたいわゆる「根曲がりのスギ」で、そのカーブが船体のカーブに利用されたと考えられる。<sup>14)</sup>

丸木舟(a)と丸木舟(b)、それぞれの形体を観察すると、(a)は小口側に向かって厚みを増し、丸底で幅、深さとともに(b)を上回る。一方(b)は船体壁が一定して薄く、船底部内面は平底気味で広く浅い。断面形状の違いが大きい(a)と(b)をスムーズにつなぐためには失われた中間部に4mほどの長さが必要で、丸木舟としての全長は船首船尾を除いても7.5~8mはあったことになる。<sup>15)</sup>

SE01の年代から考えると、13世紀前半には丸木舟はその役割を終えたことになり、新造されたのは12世紀代にさかのほると考えられる。なお、奈良文化財研究所の光谷拓実氏の協力を得て年輪年代の測定を実施したが、木日の入り方が特殊で、年代を確定することは出来なかった。また(b)の割れ口の破片(年輪外周部に近い部位)を試料として放射性炭素年代測定法(AMS法)を実施した結果、1010~1160CalADという数値が出ている。

#### (その他の構成材)

141~164は、丸木舟転用材(136~140)で構成された井戸側本体の周辺を覆うように取り付けられていた部材である。おそらく丸木舟材の組み合わせで生じた隙間をふさぐ意図があったものと考えられる。井戸側底面付近から腐食・破壊により存在しない上部までは薄く長い板材(141~148)が、井戸側残存部の中ほど以上には角材など厚めの材(149~152)や小板材(153~164)が井戸側周囲を包んでいた。なお、薄板材のうち143・148の一部には焼け焦げて炭化した痕跡が認められた。

151・152は同一の意匠を施した板材。上部は不明だが、下を向いた部分にかけて幅がすさまっていき、端部付近の側面を切り欠く。151にはV字の加工が顕著に認められるが、152にも同様の切込みが施されている

ようである。何らかの部材ないし構造物の転用と考えられるが、どのようなものからの転用か特定は出来ていない。

165は井戸側が割れて歪んだ際に、補強のつかえ棒として入れられたと考えられる角材である。

#### SD01出土遺物（第36・37図）

166～193は珠洲焼である。166は肩部に波状文を2帯巡らせたロクロ壺。167も同様のロクロ壺だが、肩部に巡らせた1帯の波状文は浅く不整形である。内面には黒色の吹き出しが多数確認できる。どちらもⅠ～Ⅱ期のものだろう。168・169は壺底部。170は壺の口縁部で、こちらもⅠ～Ⅱ期のものと考えられる。171・173～177は片口鉢である。177以外は卸目がなく、Ⅰ～Ⅱ期のものと考えられる。175は口縁部外面に波状文風のナデが施される。177はⅢ期に属するもの。172は壺ないし鉢の底部で底外面は静止糸切りである。178～180は壺の口縁部でいずれもⅡ期に属すと考えられる。181は壺壺類の肩部、182・183は叩き壺の体部である。184～193は壺壺類の体部破片である。191は焼成不良で軟質の焼き上がりとなる。

194は土師質捕鉢か。灰黄色で粉っぽく、摩滅が著しい。割れた後に被熱しており、内外面及び割れ口に炭化物が付着する。195はロクロ成形の中世土師器皿。12世紀後半のものか。

#### SD02出土遺物（第38図）

196は珠洲焼の壺壺類体部破片である。

#### SD03出土遺物（第38図）

197～203は珠洲焼である。197が壺の底部、198・199がともにⅠ～Ⅱ期の壺の口縁部、200～203が壺壺類の体部破片である。200は軟質の焼成と荒い叩き目が特徴で、SE01から出土している一連の軟質・粗雑な壺体部破片と同一個体の可能性がある。

#### SD04出土遺物（第38図）

204は珠洲焼の壺壺類体部破片である。焼成は悪く軟質で、灰白色を呈する。

#### SD09出土遺物（第38図）

205・206は珠洲焼の壺壺類体部破片である。207～209は中世土師器皿。207は非ロクロ成形のもので14世紀前半、208はロクロ成形で15世紀前半と考えられる。209は口縁内外面に煤が付着する。210は古代土師器の壺と考えられ、内面にハケメが施される。211は越中瀬戸焼の皿の底部である。

#### SD10出土遺物（第38図）

212は珠洲焼片口鉢である。内面はロクロ口が段状に明瞭に残り、コの字のしっかりした片口を作り出す。内面には2.1cm幅に10本の卸目を施入する。吉岡編年でⅢ期のものと考えられる。

#### SD19出土遺物（第38図）

213は珠洲焼の壺破片。摩滅が著しい。胎土は粗雑でⅤ～VI期に属するものか。

#### SD30出土遺物（第39図）

214は須恵器の杯蓋である。焼成は不良である。213・215は古代土師器である。215が杯A、216が壺類の底部である。

#### SD31出土遺物（第39図）

217は古代土師器の壺で、内面に斜め方向のナデ調整が確認できる。218は非ロクロ成形の中世土師器皿で、13世紀前半のものか。内外面に煤が付着する。219は摩滅が著しく詳細は不明だが土師器の壺などの口縁部か。

#### SK02出土遺物（第39～41図）

220～226は珠洲焼である。220は内面が著しく磨耗し、底部の静止糸切り痕にも使用痕と考えられる磨耗が見られることから片口鉢の底部であろう。焼成は悪く、にぶい黄橙色を呈する。221は片口鉢底部で、内外面及び割れ口が被熱し、煤が付着している。鋭利な原体で卸目を施入する。Ⅲ～Ⅳ期のものと考えられる。222は壺などの底部。223は壺の口縁部である。I～II期か。224は壺の肩部、225・226は壺壺類の体部破片である。

227～232は中世土師器皿。いずれも非ロクロ成形で228・230・231が13世紀後半、227・229・232が14世紀中頃と考えられる。

233は砥石。流紋岩製で最大長4.7cm、最大幅2.7cm、最大厚2.2cmを測り、重さ32.28gを量る。

234～256は木製品である。234・235は同一個体の曲物側板破片だが、約8mmと非常に厚い。内面にはケビキが入る。236も曲物側板で、綴じ合わせるための樹皮が残存していた。237～239は小板片。240と241は2枚重ねて井戸底に置かれていた板材である。SK02は井戸側材が無かったが、この2枚の板材が井戸側材で、意図的に埋納された可能性があると考えている。241の方には釘穴と見られる穿孔が3か所残存している。242・243・245・246は木片で、246には切疵が残る。244は木札状のもの。247～256は著状木製品である。

SK02の出土遺物の年代を見ると、13世紀前半頃のものが出土している一方で、14世紀代まで入るものも見受けられる。井戸の使用開始時期と廃絶時期を示していると考えられる。

#### SK07出土遺物（第41図）

257～259は木製品である。257は樹皮製の木札状のもの。一方の端部は破損しているが、残存しているもう一方の端部は左右非対称の三角にカットしている。58は井戸底に立った状態で出土した板材、259は井戸底に横たえられた状態で出土した角材である。どちらもSK02の板材で推測したように抜き取った井戸側材の意図的な埋納である可能性がある。

その他、図示していないが土器片1点が出土している。

#### SK08出土遺物（第41図）

260は須恵器の瓶類か。261は珠洲焼の壺壺類体部破片。262は珠洲焼の壺口縁部である。II～III期頃のものか。SK08ではこのほかに近世の磁器類も出土している。

#### SK12出土遺物（第41図）

263は中世土師器皿。ロクロ成形で底外面に回転糸切り痕が残る。15世紀前半のものか。264は珠洲焼の壺頸部破片である。

#### SK23出土遺物（第42図）

265～271は珠洲焼である。265・266は片口鉢。265は丸みを帯びた器壁と約1cm幅に4本の原体で施入した鉢目を持つ。内面・底外面の磨耗が著しい。266はかなり立ち気味の器壁に、やや纖細な芯押気を持つ鉢目を施入したもので、こちらも内面・底外面の磨耗が著しい。267は壺の底部破片、268～271は壺頸部の体部破片である。

272～274は中世土師器皿。いずれも非ロクロ成形で13世紀前半のものである。

275は越中瀬戸焼。外外面に鉄釉を施した壺であろう。

#### SK25出土遺物（第42図）

276は中世土師器皿である。非ロクロ成形で13世紀前半のもの。

#### SK38出土遺物（第42図）

277は古代土師器の杯Aである。底外面に回転ヘラ切り痕が確認できる。

#### SK41出土遺物（第42図）

278はロクロ成形の中世土師器皿底部である。15世紀前半のもの。

#### SK49出土遺物（第42図）

279は須恵器の杯Aの底部破片である。焼成は非常に堅敏である。

#### SP67出土遺物（第42図）

280は珠洲焼の小鉢か。薄く作った器壁がふくらみを持ちつつ立ち上がり、口縁端部をやや外に引き出すように仕上げる。I～II期のものであろう。

#### SP131出土遺物（第42図）

281は珠洲焼の壺頸部である。

#### SP133出土遺物（第42図）

282は土鍤である。樽型の細長いもので、残存長4.5cm、外径1.05cm、内径0.3cmを測り、重さ4.19gを量る。

#### SP217出土遺物（第42図）

283は越中瀬戸焼の皿で、内面及び外面上半に灰釉を施釉する。

#### SP220出土遺物（第43図）

284は珠洲焼壺の底部破片である。

SP324出土遺物（第43図）

285は須恵器杯類の破片である。

SP353出土遺物（第43図）

286は珠洲焼の壺壺類体部破片である。

SP358出土遺物（第43図）

287は珠洲焼の壺壺類体部破片である。摩滅が著しい。

SX01出土遺物（第43図）

288は板材、289は珠洲焼の壺破片である。SX01からはその他にも近世陶磁器類が出土している。

SX02出土遺物（第43図）

290・291は中世土師器皿。290は非ロクロ成形で13世紀前半、291は底外面に回転糸切り痕が明瞭に残るロクロ成形で12世紀後半～13世紀前半のものと考えられる。SX02からはその他にも近世陶磁器類が出土している。

SX05出土遺物（第43図）

292は珠洲焼の壺壺類体部破片である。SX05からはその他にも須恵器・土師器・近世磁器が出土している

（2）遺構外出上遺物

I 地区東壁出土遺物（第43図）

293・294は珠洲焼の壺壺類体部破片である。

I 地区西壁出土遺物（第43図）

295は珠洲焼の壺壺類体部破片である。

I 地区南壁出土遺物（第43図）

296～298は珠洲焼である。296は底外面に静止糸切り痕を持つ壺などの底部、297・298は壺壺類の体部破片である。

II 地区南壁出土遺物（第43図）

299は珠洲焼の叩き壺の体部破片である。300は須恵器の壺か。

II 地区北壁出土遺物（第43図）

301は珠洲焼の壺壺類体部破片である。

#### I 地区旧耕作土層出土遺物（第44図）

第4図の4・6層から出土したものである。302・303とともに珠洲焼で、302はⅡ～Ⅲ期の壺口縁、303は鉢か。

#### II 地区包含層出土遺物（第44図）

304は須恵器の瓶類。外面にカキメ調整を施したもので、横瓶の体部側面の可能性がある。305～310は珠洲焼。305は底外面に静止糸切り痕を持つロクロ壺の底部である。306は片口鉢底部で、鉢口からⅢ期のものと考えられる。307は片口鉢の片口部である。薄く精緻な作りからⅠ～Ⅱ期のものと考えられる。308～310は壺類体部破片である。308の外面は剥離が著しい。311・312は非ロクロ成形の中世土師器皿で、いずれも13世紀代のものである。

#### III 地区包含層出土遺物（第44・45図）

313～343は珠洲焼である。313～319は片口鉢。315は片口部である。313～316・319はⅠ～Ⅱ期に属するものであろう。317の鉢口も曲線的で、Ⅰ～Ⅱ期の可能性がある。320は壺などの底部か。321～343は壺類の体部破片である。

344は土師器の壺破片か。摩滅が著しく詳細は不明である。

345～347は中世土師器皿である。非ロクロ成形の345・346が14世紀前半、ロクロ成形で底外面に回転糸切り痕が明瞭に残る347が12世紀後半～13世紀前半と考えられる。

348は外面に錦織文を持つ青磁碗で、13世紀前半のもの。349は白磁の小壺である。

350～355は越中瀬戸焼である。350は内面及び外面上半に鉄釉を施した皿類、352・353は鉄釉の丸碗口縁部。351・354・355は内外面鉄釉を施した小壺。354・355は底部で、底外面に回転糸切り痕が残る。いずれも17世紀代か。356は壺器系陶器の壺体部破片である。

357は土鍾である。樽型で、最大長5.7cm、外径4.5cm、内径1.8cmを測り、重さ40.85gを量る。

#### 表土出土遺物（第45・46図）

358～381は珠洲焼である。358～363は片口鉢。358～361は鉢口が無く外端で面を取ることからⅠ～Ⅱ期、362は曲線的な鉢口の存在からⅡ期と考えられる。364はⅠ～Ⅱ期の肩部に波状文を巡らすロクロ壺の破片であろう。365・366は壺などの底部破片である。367は叩き壺の頸部、368はⅠ～Ⅱ期の壺の頸部である。369は著しく軟質の鉢底部である。珠洲焼ではなく、土師質擂鉢などの可能性もある。370～381は壺類の体部破片である。

382は口縁部に大きめの玉縁を持つ白磁の壺。13世紀前半のものである。

383は砥石。流紋岩製で、最大長9.1cm、最大幅5.7cm、最大厚4.1cmを測り、重さ211gを量る。

#### 廃土出土遺物（第46図）

384は須恵器の壺体部破片。内面に同心円状當て具痕が残る。

385～395は珠洲焼。385はⅠ～Ⅱ期の片口鉢口縁部である。386・387は壺の底部破片。388・389はいずれも片口鉢の体部破片で、曲線的かつ纖細な鉢口からⅡ期のものと考えられる。390は壺の肩部、391～395は壺類の体部破片である。

396～400は中世土師器皿。400のみクロ成形で、それ以外は非クロクロ整形である。397～398が13世紀前半、396が13世紀後半、400が12世紀後半～13世紀前半と考えられる。

401～403は越中瀬戸焼である。401が内外面に鉄釉を施釉した小壺の底部、402が内外面鉄釉を施釉した皿類I縁部、403が一部に鉄釉が残る皿類の底部である。いずれも17世紀代か。

## 註

- (1) 丸木舟(a)が破損した直接の原因は丸木舟(b)の139が倒れこんできたことによると思われる。第10図の構造模式図で示したように、当初よりカスガイのみで固定されていた139が井戸内側へ押し出され、その際に137を巻き込んだ状況が想定できよう。
- (2) 切削痕の名称については渡邊晶「日本建築技術史の研究－大工道具の発達史－」(2004)に依拠した。切削用いたチヨウナなどの刃に平行するラインが主刃痕、刃の進行方向に平行(つまり刃の方向には直交)するラインが進行刃痕である。互いに切り合うため、最小値にはそれほど意味はない。
- (3) フナクイムシ：フナクイムシ科の二枚貝。石灰質の水管をつくり、壳として木材に穿孔する。軟体は長虫状で、孔道内で生活する(波部1961、日高1997)。日本沿岸の海水域～汽水域に生息し、木造船頭や棧橋を食害して被害を与える。キクイムシ：キクイムシ科の節足動物。海中にある木材の表面からくいこみ、管状で横枝をもつ孔を木材の表面と平行にほり込み、ところどころに呼吸孔をあける。しだいに内部に向かって多層的にほり込む。被害材はネズミにかじられたようにやせ細る。棧橋・杭・貯木などに人害を与える。日本及び世界各地の港湾に分布する(内海1983)。
- (4) 本目、年輪などの観察、木取り方法については番町光昭氏のご教授を得た。番町氏は水見市内でも数少ない和船建造技術を知る船大工で、造船技術をはじめとする有意義な情報を多くいただいた。
- (5) 1/3及び1/2スケールで製作した出土丸木舟の模型(製作：番町光昭)、実測図を元に検討した結果による。船首部・船尾部の形状によっては、全長10mを超す大型の丸木舟であった可能性があろう。なお、丸木舟の検討に当たっては甲南大学の出口晶子氏、出土正登氏、番町光昭氏、水見市立博物館の小堀卓治氏に様々なご教授をいただいた。なお丸木舟の記述に関しては拙稿「鞍川D遺跡出土の丸木舟－出土丸木舟に残る加工痕・使用痕への試論－」(廣瀬2005)を下敷に、数値データなどを中心に大幅な改稿を加えた。

## 第4章　まとめ

今回の調査で得られた知見をそれぞれの観点からまとめておきたい。

### 遺構・遺物について

今回の調査では井戸跡、流路、溝、土坑などの遺構が検出されている。人々の生活と密接に関わりを持つ井戸跡がⅠ地区で3基確認されたものの、建物跡等を確認することは出来なかった。Ⅰ地区では井戸の他は不整形な土坑や小穴類が、Ⅱ・Ⅲ地区では流路・溝が遺構の中心となり、それに土坑、小穴類が加わる。

遺物は、珠洲焼、中世上師器皿を中心とし、井戸跡からは木製品が大量に出土している。過去に実施された分布調査、試掘調査では、本遺跡は古代から中世の遺跡とされてきたが、古代の可能性のある遺構は須恵器と古代土師器が出土したSD30のみで、古代の遺物の出土量自体もそれほど多くない。

SE01・SK02といった井戸跡、SD01をはじめとする流路では、13世紀前半をピークに12世紀後半から13世紀代いっぽいの遺物が出土しており、本遺跡の主体となる時代にはその頃があてられよう。また、SD09では14世紀前半～15世紀の中世土師器皿を中心に越中瀬戸焼なども出土しており、中世後半から近世まで土地の利用が続いたものと考えられる。とはいえ、珠洲焼をひとつの指標としてみると、Ⅰ～Ⅱ期に属するものが大半を占め、そこに若干数Ⅲ期のものが加わる。確実にⅣ～Ⅵ期に属するものはほとんどない、といった様相を示す。これは近接する鞍川中B遺跡での珠洲焼がⅠ期からⅥ期まではほとんど満遍なく出土している状況（氷見市教委2006）とは対照的である。鞍川中B遺跡の性格を、建物跡等は検出されておらず溜池状遺構を中心としていることから、集落跡とは一線を画することも勘案しなければならないが、13世紀前半を中心人々が生活を営んだ集落の主体が本遺跡近辺にあったことはまず間違いないだろう。

では、集落の主体はどこにあったか。その様相はどういうものだったか。井戸跡をひとつの手がかりとして考えてみたい。

中世前半(12～14世紀)における井戸のあり方は、井戸を個人所有するという事例は少なく、一般集落内では4～5棟に対して井戸1基という共同井戸の形態を取り、拠点集落の中の有力者層についてのみ、区画した屋敷地内に井戸を持つ例があるという（塙田2001）。本遺跡ではSE01・SK02という井戸跡、井戸の可能性の高いSK07がⅠ地区の比較的狭い範囲で検出されている。それぞれの井戸跡の時期差については、SK07は確証となる遺物は出土していないため、SE01とSK02の比較となる。出土遺物からは、SE01が構築：13世紀前半、廃絶：13世紀後半以降（最終的には15世紀後半頃まで下るか）、SK02が構築：13世紀前半、廃絶：14世紀中頃と推測される（若干の異論については次項で述べる）。明確な構築時期・廃絶時期は不明であるが、使用開始から使用終了にはある程度の時期差を持つつも、一定期間並存していたような状況が想像される。おそらくⅠ地区のあたりが集落共同の井戸場ないし有力者の屋敷地の井戸場としての機能を持っていたということになろう。

2基の井戸跡が使用開始された13世紀前半とほぼ同時期の遺構として流路SD01と、それと平行に延びる溝SD02・SD03があげられる。このSD01以西と以東では遺構の様相に違いが見られることに注目したい。SD01以西、つまりⅢ地区では不定方向に流れる流路や溝が主体となり、SD01以東であるⅠ・Ⅱ地区では、そういう様子はほとんど見ることが出来ない。少ない情報から判断することは危険だが、ひとつの仮説としてSD01及びSD02・SD03が区画溝としての役割を持っていたとすれば、集落ないし屋敷地はその東側に存在することになる。つまりⅠ地区北側の現在の町並みの下か、丘陵裾となる南側か、それとも溜場整備の影響を受けた東側か、いずれかに集落ないし屋敷地の主体が存在するということである。集落の性格、また、そこが有力者層の屋敷地であるか否かは、検討が必要であろう。

## 井戸跡について

ここでは井戸の廃絶行為、また井戸祭祀についての知見をまとめておく。今回の調査区で井戸跡として確認したのは、先に述べたようにSE01・SK02に可能性のあるSK07を加えた3基である。

SE01は、丸木舟を転用した井戸側が残存しており、珠洲焼・中世土師器・青磁・白磁・山茶碗・硯・砥石・木製品(漆器皿・曲物・柄杓)・箸状木製品・舟形木製品・陶物形木製品・木札状木製品・木杭・板材など)・自然遺物(竹・松ぼっくり・モモ・カキ・ソバなどの種実類・木枝・木片・ドチザメ椎骨)などが出土している。また自然化学分析の結果、稻藁や稲秆の投棄の可能性も指摘されている。13世紀前半に構築され、13世紀前半中に井戸としての使用を終えた。その後は自然堆積で埋没していき、最終的には13世紀後半以降15世紀後半頃までに完全に埋め戻された。

SK02は、井戸の廃絶後に井戸側を抜き取ったものである。珠洲焼・中世土師器皿・砥石・木製品(曲物・箸状木製品・木札状木製品など)が出土しているほか、抜き取られた井戸側材の一部と推測される板材が2枚重ねて埋納され、さらに井戸の中心には節を抜いた竹筒が突き立てられていた。13世紀前半の構築で、最終的な廃絶は14世紀中頃まで下ると考えられる。

SK07は井戸の可能性のある土坑である。角材が横たえられた状態で、板材が立てられた状態で出土している。その他に木札状木製品・土器片が出土しているが、時期は不明である。

以上3基の井戸跡で特筆すべきなのが、SK02で確認された井戸の廃絶に伴う祭祀行為である。第3章でも簡単に触れたが、突き立てられていた竹筒は「鳥抜き」を目的として設置されたものであろう。

井戸は生活に密着したものであったと同時に信仰の対象としての側面を持っており、特に井戸が地下の冥界と現世をつなぐ境界であり、魂魄の通り道であると考える他界観の思想は民衆にも広く広まっていたものとされる。井戸は使用されなくなってしまっても、埋めずに自然消滅を待つものとされ、急に埋めることは井神の忌の報を止めてしまうといい、早急に埋める際には井神が呼吸するために長い青竹の節を抜いたものを井戸の底に立てたという(鍾方2003)。竹筒の設置は、富山県内でも旧福野町の田尻遺跡や旧越中町の道場I遺跡で確認されている(北陸中世考古学研究会2001)。

SK02で確認した竹筒も、これらと同様、井戸を廃絶する際に立てられたものだと考えられる。出土した竹筒は地山に突き刺さった状態で、長さもそれほどなかったが、本来は地上まで顔を出していた物が腐食のため依存しなかったのだろう。

また、廃絶の際に抜き取られた井戸側材の一部の可能性がある板材の埋納も井戸廃絶の際の祭祀行為に伴うものだと考えられる。もし井戸側材ではなかったとしても、その出土状況からは意図的なものを読み取ることが出来る。1枚は等間隔に釘穴と見られる穿孔のあるもので、これが井戸側材だとすれば、丸木舟転用のSE01とは異なる板組型式の井戸側を持っていたことになる。抜き取った井戸側は、新たに掘る井戸に再利用する例があるという(沙見2001)。SK02での井戸側材抜き取りにもそのような意図があった可能性があるが、では埋納された板材にはどういう意味があったのだろうか。SK07も井戸跡だとすれば井戸側は抜き取られていることになり、出土した2つの木材がSK02同様の意図を持っている可能性がある。今後、類例を探っていく必要があろう。

もうひとつ、SK02からは1個だけであるがモモの種実が出土している。ウメやモモなどの種実が井戸から出土する例はままあり、井戸の祭祀行為に伴う可能性があるとされている。

SK02は、遺物の年代が13世紀前半から14世紀中頃と幅が広い。ここから13世紀前半の構築と14世紀中頃ま

で下る廃絶時期を想定したのだが、そうなると井戸の使用期間の長さ、あるいは使用終了から埋め戻しまでの期間の長さが問題となってくる。井戸の使用期間は、中世の石組井戸で土器1型式（約30年）程度といわれ（宇野1982）、SK02での100年以上のずれをどう考えるか。使用終了後、ある程度の期間人為的に埋め戻すことなしに自然堆積に任せたのだろうか。あるいは何度も同じ場所で井戸を作り直したということもあったろうし、井戸以前の遺構からの混入である可能性も否定できない。

さて、SK02とは対照的に自然堆積である程度まで埋まつたことが確実なのがSE01である。SE01では、最終的に井戸側上部及び井桁を破壊するまでは、自然堆積によって埋つていったものと考えられる。実際問題として地中に埋まつた巨大な丸太削り貫き材である井戸側を抜き取ることが困難だったとも考えられ、最終的な埋め戻しの際には井戸側ごと地面を掘り上げて上部を破壊し、埋め戻しているのが十層断面からも確認できる。SK02で見られた竹筒など廃絶の際の祭祀行為の痕跡は確認できないことも、自然堆積によってゆるやかに埋まつたために「息抜き」の必要がなかったとも取れよう。

とはいえた祭祀行為の痕跡がないわけではない。SE01からは大量の木製品が出土しているが、その中に舟形木製品や陽物形木製品、木札状木製品、箸状木製品といったものがある。箸状木製品には実用品も含まれていようが、これらは井戸に対する信仰を表した祭祀具であろう。特に舟形木製品は厄神や穢れを祓い流すためのものと考えられ、これも井戸の他界観に根ざしたものだといえるだろう。これらのほとんどは井戸側内の堆積土中から出土している。井戸内は通常、定期的な井戸さらいによってきれいに保たれていたであろうから、前述した祭祀具が埋没した時期というのは自然堆積が進行した時期、すなわち井戸の使用が終了した後ということになる。また、自然化学分析で推測された有用種殻や、稻葉・稻穀の投棄の可能性についても、もし人為的なものであるならば、井戸側下層で確認されていることから井戸使用終了後の祭祀行為と見ることが出来る。

さて以上のように、本遺跡の井戸跡では井戸の他界観に根ざす祭祀行為が行われていたと考えられる。これらは他の地方でも普遍的に見ることが出来るもので、中世前半の井戸のあり方をよく示しているものといえよう。

#### 丸木舟について

SE01の井戸備材は丸木舟を転用したものだった。丸木舟を井戸側材に転用するという行為自体は各地の遺跡でまだ確認できる事象である。井戸側の部材は基本的に埴築部材などの転用品である例が多く（鐘方2003）、そういう観点からすると丸太を削り貫いた大型の木製品である丸木舟を井戸側へ転用するという考え方、効率よく木製の筒を得られるという意味において至極妥当なものといえよう。

逆に丸木舟として考えてみると、丸木舟が地中に遺存し遺跡から出土するための条件が整うのが井戸側材への転用だということになる。低湿地帯から好条件で出土する丸木舟以外は、ほとんどが井戸側などに転用されたもので、遺存はするものの文字どおり断片的な資料となってしまう。本遺跡出土の丸木舟もその例に漏れず断片的な情報しか与えてくれないが、それでもこの丸木舟が製作された当時の造船技術など、様々に知見を得ることができた。

筆者はこの報告書刊行以前に本遺跡出土の丸木舟について検討したことがある（廣瀬2005）。その時点では、本遺跡については整理作業の段階であり、丸木舟も保存処理を行っている最中であったため、整理作業がほぼ終了した現時点での知見とは一部齟齬をきたす部分がある。ここではあらためて本遺跡出土の丸木舟について検討してみたい。

まず、この両戸側を丸木舟の転用であると結論付けた理由のひとつである、舷側上部に設けられた方形の穴と「コ」の字形の切り欠きである。

方形の穴は丸木舟(a)と丸木舟(b)ではその役割が違うと推測される。(a)に見られる向かい合う2か所の穴には内面に磨耗痕が確認できない。一方、(b)に見られる3個の穴には繩をかけた磨耗痕が残されている。(a)については磨耗痕が無いこと、舷側壁の外面上に「ハ」の字に聞く断面形状をしていることから、左右舷側に差し渡すように船梁を通した梁穴と考えられる。「ハ」の字の断面形状は内側に門状に入れた船梁を外面からクサビによって固定したためと推測したい。

(b)の穴では、穴の上方両角に繩の跡が残る穴と、一方の斜め上方に伸びる穴がある。穴にかけられたと考えられる繩にはいくつかの役割が想定される。檣櫂をかける繩(早緒・檣綱など)とコベリや舷側上部に差し渡した船梁などの構造物を固定するための繩である。現存する木造船の使用痕などを検討した結果、そのうち斜め上方に伸びる穴については、櫂を用いた痕跡である可能性が高い。その他のものはコベリや船梁などの固定、檣の固定などに用いられていたのだろう。

「コ」の字形の切り欠きについては、上部に装着されたコベリによって方形の穴として機能したと考えられる。一方の材を切り欠き、それを別材でふさぐことによって穴を作り出し、繩をかけたりすることは木造船では一般的に行われていたようで、この丸木舟についてもそのように用いられた可能性が高い。これは左右の切り欠きの深さが著しく異なることも説明でき、例えばコベリの側にも切り欠きを設ければ、左右同じ寸法の穴が出来上がることになる。

コベリについてここで補足しておきたい。第3章で述べたように、舷側部端面の切削痕の残存がコベリが装着されていた傍証となる。食害痕などからもわかるように、かなり使い込んだ舟であることは確かで、しかも使用中の摩減が避けられない部位であるにもかかわらず製作時の工具痕を留める事から、そこを覆っていた別材の存在が浮かんでくる。この丸木舟は、他の出土例と比較しても深さがあり(廣瀬2005)、別材が装着されていたとしても舷側板のような大掛かりなものではなく、薄く舷側上部をカバーするコベリ程度のものであったと考えられる。

以上のように、この丸木舟は一本のスギを割り貫いたものであるが、まったくの単材刳舟ではなく、ある程度の構造物を装着したものだったと考えた。その接合に釘等が用いられた痕跡はなく、繩などが用いられていたと推測され、この丸木舟はいわゆる縫合船の範疇におかれるものとなろう。

さて、丸木舟(a)と丸木舟(b)が全長7.5~8m以上の1艘の丸木舟であることは第3章で述べた。では、この著しく形状の異なる部材のどちらが船首でどちらが船尾になるのだろうか。

丸木舟(a)は小口側に向かって船体の厚みを増し、丸底で、幅広く深さがある。スギ材が用いられ、小口側がスギの根元側となる。舷側部には「コ」の字形の切り欠きとそれに対応する方形の穴があり、方形の穴のほうは横梁を通した梁穴と考えられる。丸木舟(b)は船体が一定して薄く、底部内面は平底気味でやや狭く浅い。こちらの小口側は、(a)とは逆でスギの先端側があたられる。(a)と同じく舷側上部に別材によるコベリが設置されていた可能性が高い。舷側部には、小口側に方形の穴が左右で3個穿たれている。方形の穴には、コベリなどの固定用の繩や早緒・檣綱の痕跡が残る。これらの特徴を勘案して、丸木舟(a)が船首側、丸木舟(b)が船尾側と仮定したい。檣櫂が(b)側に設置され、そこで漕ぎ手が操船し、重く深みがある(a)側で波を切って進んだものと考える。

それでは、この丸木舟はどのような場所で、どのような目的で使用されたのだろうか。海水・汽水でしか

生きられないフナクイムシないしキクイムシによる食害痕が多数残されていることは、その舟が海水域ないし汽水域で長期間係留されていた大きな証拠となろう。フナクイムシの場合、河口などの汽水域では生息可能だが、純淡水では生息できず、また急激な環境の変化には耐えられないという。船体に穿孔するのにはある程度時間が必要なため、時に川をさかのぼるようなことがあったとしても、基本的には河口から海にかけて使用されていたと考えられる。船首部が重く頑丈で深さがあるという構造も、海で丸木舟を使用する際に操船や波切りといった面で有利だったのではないだろうか。

この丸木舟の特徴のひとつとしてあげられるのが船体の深さである。また、フナクイムシ・キクイムシによる食害痕が漸減外間に限られ舷側部まで被害を受けないということは、この丸木舟の喫水線が非常に浅かったということを示している。その深さと喫水線の浅さによって、この丸木舟は非常に積載能力に長けていたことが推測される。また(b)では、舷側立ち上がり部分の強度を落としてまで船底内面を平たく広く取ろうとしているが、これは積載性を高めるための処置だったのではないか。これらのことからこの丸木舟が荷船として利用されていた可能性を考えてみたい。浮力に優れた丸木舟の特徴である空荷の際の喫水線の浅さと船体の深さを活かして、海から河口にかけての積荷の運搬に用いられたのではないか。最終的に鞍川という海岸線から約2kmの内陸部へ運ばれ、井戸側に転用されているわけだが、移送には上庄川とその支流が用いられた可能性がある。現役の丸木舟であった時にも海から河川へ侵入し運航されたことがあったかもしれない。

丸木舟が与えてくれる情報には、製作時の工具痕や補修痕、井戸側に転用する際の鋸痕などもある。工具痕からは当時の造船技術の一端をうかがうことができる。平面の整形にはチョウナ、舷側部の方形の穿孔には盤が用いられていたと考えられる。また船底部内面に残る切痕は、内面を削り貫く際に斧などが切り込んだ際に出来た刃痕と推測される。丸木舟の削り貫き技法として近年まで全国的に見られた技法として、一定の間隔で刻みを入れ、横から斧やクサビを打ち込んで木片を割り取っていく方法があるが、この技法が用いられた可能性がある(川崎1991・廣瀬2005)。

(a) 船底内面の埋木や(b)のカスガイは丸木舟を使用していく中で補修した痕跡であろう。埋木については、前述した削り貫き技法でついてしまった凹みを埋めたようにも、食害痕で開いた穴をふさいだように見える。製作直後か使用中かは不明ながら、埋木によって凹みを塞ぐという補修技術が存在したことがわかる。船体の剝れをつなぎ止めるためにはカスガイが使用されていた。そのカスガイは鉄製で規格性のあるものだった。

この丸木舟は、最終的には削れが進むことで廃船となったと考えられ、13世紀前半には井戸側に転用された。丸木舟は一般に耐用年数が長く、100年近く使われるものもあるという。補修を受けつつ使い続けられたこの丸木舟も、12世紀前半、平安時代にまでさかのぼるものである可能性があろう。

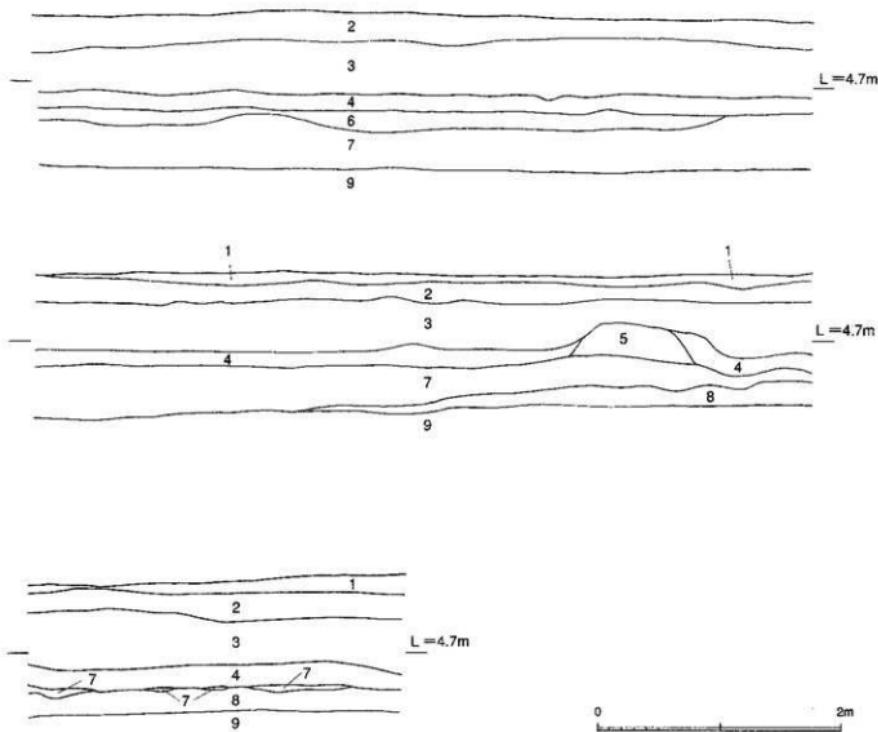
直径1m以上、長さ10m近いスギの原木から作り出された丸木舟は、補修を受けながら長い年数の使用に耐え、その役割を終えた後は井戸側として人々の生活と密着にかかわりを持ち、さらには信仰の対象としての役割を果たしてきた。その丸木舟は、現在保存処理を終えて氷見市立博物館で展示されている。

海を中心に活躍したと考えられる丸木舟が、海岸線から約2km離れた本遺跡で井戸側とされた。そこにはこの集落を営んだ人々の動きがあった。ではこの集落がどういう性格を持つものだったのか。丸木舟と鞍川で生活する人々にはどのようなつながりがあったのか。今回の調査では明らかにすることは出来なかった。それらを今後の課題とし、周辺の遺跡を見据えた上で調査・研究を進めていきたい。

## 引用・参考文献

- 秋田県埋蔵文化財センター 2000 「海崎遺跡－県官は堀整備事業(浜井川地区)に係る埋蔵文化財調査報告書－」 秋田県埋蔵文化財調査報告書第303集
- 石川県埋蔵文化財センター 2002 「金沢市 藤江C遺跡Ⅵ」 金沢西部地区土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書13
- 石川考古学研究会 1997 「石川県考古資料調査・集成事業報告書[祭祀井Ⅱ]」
- 岩本正二 2001 「中世の井戸」「中世北陸の井戸」 第14回北陸中世考古学研究会資料集 北陸中世考古学研究会
- 内海富士男監修 1983 「学研生物図鑑 水生生物」 学習研究社
- 宇野隆夫 1982 「井戸考」「史林」 65巻5号 史学研究会
- 大橋康二 1989 「肥前陶磁」 考古学ライブラリー55 ニューサイエンス社
- 大林太良編 1975 「船」 日本古代文化の探求 社会思想社
- 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1988 「鹿田遺跡I－医学部附属病院外来診療棟改築およびNMR-CT室新築に伴う発掘調査－」 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第3号
- 加納史話編集委員会 1970 「加納史話」
- 鎌方正樹 2003 「井戸の考古学」 ものが語る歴史シリーズ⑧ 同成社
- 上庄村史編纂委員会 1963 「上庄村史」
- 川崎児允 1991 「日本丸木舟の研究」 法政大学出版局
- 九州近世陶磁学会 2000 「九州陶磁の編年－九州近世陶磁学会10周年記念－」
- 京都府立丹後郷土資料館 1990 「海・ふね・人」 特別陳列図録27
- 小出泰弘 2004 「慈頤浦之前遺跡の井戸」 「紀要 富山考古学研究」第7号 富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所
- 小松市教育委員会 2004 「佐々木遺跡 一般国道8号小松バイパス建設工事、渠営かんがい排水事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」
- 塙田明弘 2001 「越中(富山県)の様相」「中世北陸の井戸」 第14回北陸中世考古学研究会資料集 北陸中世考古学研究会
- 沙見一夫 2001 「鎌倉の井戸・井戸祭祀」「中世北陸の井戸」 第14回北陸中世考古学研究会資料集 北陸中世考古学研究会
- 清水満三 1975 「日本古代の船」「船」 日本古代文化の探求 社会思想社
- 須藤利一編 1968 「船」 ものと人間の文化史!法政大学出版局
- 中世土器研究会編 1995 「概説 中世の土器・陶磁器」 真鶴社
- 出口晶子 2001 「丸木舟」 ものと人間の文化史 98 法政大学出版局
- 富山県 1984 「県営上庄川沿岸用水補給事業 事業誌」
- 富山県文化振興財团 1994 「梅原湖畔堂遺跡発掘調査報告(遺構編)－東海北陸自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告I－」 埋蔵文化財発掘調査報告第5集
- 富山県文化振興財团 1996 「梅原湖畔堂遺跡発掘調査報告(遺物編)－東海北陸自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告II－」 埋蔵文化財発掘調査報告第7集
- 富山県文化振興財团 2002 「能越自動車道関連 埋蔵文化財包蔵地試掘調査報告」 埋蔵文化財発掘調査報告第16集
- 豊栄市教育委員会 2004 「下前川原遺跡発掘調査報告書」
- 新潟市教育委員会 1995 「新潟市小丸山遺跡 直り山団地造成事業用地内発掘調査報告書」
- 新潟市教育委員会 2004 「新潟市山木戸遺跡 マンション等建設予定地内発掘調査報告書」
- 西村真次 1938 「先史時代及び先史時代の水上運搬具」「人類学・先史学講座」 第6巻 雄山閣
- 日本貿易陶磁研究会 1999 「貿易陶磁研究」第1号-第5号(合本)復刻版 六一書房
- 柳口尚武 2005 「縄文時代の舟と交流・交易」 「月刊考古学ジャーナル」10月臨時増刊号 No536 ニューサイエンス社
- 波部忠重 1961 「続原色日本貝類図鑑」 保育社
- 日高敏郎監修 1997 「日本動物大百科」 第7巻 無脊椎動物 平凡社
- 水見市 1963 「水見市史」

- 水見市 1972 「水見百年史」
- 水見市 1999 「水見市史」 9 資料編7 自然環境
- 水見市 2000 「水見市史」 6 資料編4 民俗、神社・寺院
- 水見市 2002 「水見市史」 7 資料編5 考古
- 水見市 2004 「水見市史」 8 資料編6 松岡・地図
- 水見市教育委員会 2002 「水見市埋蔵文化財分布調査報告（丘陵地区）Ⅱ」 水見市埋蔵文化財調査報告第35冊
- 水見市教育委員会 2003 「水見市埋蔵文化財分布調査報告（丘陵地区）Ⅲ」 水見市埋蔵文化財調査報告第39冊
- 水見市教育委員会 2005 「鞍川中八遺跡鞍川バイパス道路群発掘調査報告」 水見市埋蔵文化財調査報告第41冊
- 水見市教育委員会 2006 「鞍川中B遺跡鞍川バイパス道路群発掘調査報告Ⅱ」 水見市埋蔵文化財調査報告第45冊
- 水見市教育委員会 2003 「国説 水見の歴史・民俗」
- 水見市立博物館 2003 「特別展 写真にみる水見の昔と今」
- 廣瀬直樹 2005 「鞍川D遺跡出土の丸木舟 -山十九木舟に残る加工痕・使用痕への試論-」  
「船をつくる、たたえる 和船建造技術を後世に伝える会調査報告書」和船建造技術を後世に伝える会
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2002 「小堀津遺跡 県立図書館・公文書館建設事業に伴う調査」 福井県埋蔵文化財調査報告第39集
- 福井県立若狭歴史民俗資料館 1985 「特別展 いま見る丸木舟 -日本最古の浜浜日塚出土丸木舟公開記念展-」
- 藤澤良祐 1997 「中世漁戸空の動態」 「研究紀要」 第5輯 漁戸市埋蔵文化財センター
- 北陸中世考古学研究会 2001 「中世北陸の井戸」 「第14回北陸中世考古学研究会資料集」
- 北陸中世土器研究会編 1997 「中・近世の北陸 考古学が語る社会史」 桂書房
- 細江真澄 2001 「庄海宮田遺跡出土の土鍬について」 「紀要 富山考古学研究」 第4号 富山県文化振興財团埋蔵文化財調査事務所
- 松本信廣 1952 「古代日本人と舟」 「日本民族」 日本人類学会編 岩波出版
- 水野和雄 1985 「日本石硯考 -出土品を中心として」 「考古学雑誌」 第70巻 第4号
- 宮田進一 1988 「越中漁戸の空資料（1）」「大堀」第12号 富山考古学会
- 宮田進一 1997 「越中漁戸の変遷と分布」 「中・近世の北陸 考古学が語る社会史」 桂書房
- 宮田進一 1997 「北陸における古瀬」の流通」 「研究紀要」 第5輯 漁戸市埋蔵文化財センター
- 森隆 2001 「富山県出土上の土鍬集成」 「紀要 富山考古学研究」 第4号 富山県文化振興財团埋蔵文化財調査事務所
- 吉岡康輔 1994 「中世須恵器の研究」 吉川弘文館
- 吉川金次 1976 「鏡」ものと人間の文化史 18 法政大学出版局
- 吉川金次 1984 「斧・鑿・鎧」ものと人間の文化史 51 法政大学出版局
- 古川町教育委員会 2000 「竹原下片南部遺跡・古川遺跡発掘調査報告書」
- 四輪嘉章 2001 「西川島遺跡群における井戸祭祀」 「中世北陸の井戸」 第14回北陸中世考古学研究会資料集 北陸中世考古学研究会
- 和船建造技術を後世に伝える会 2005 「船をつくる、たたえる 和船建造技術を後世に伝える会調査報告書」
- 渡辺 品 2004 「日本建築技術史の研究 -大工道具の発達史-」 中央公論美術出版

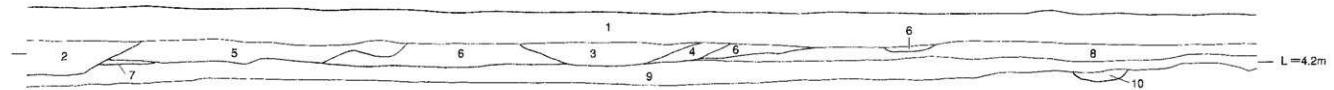


I 地区

- |           |                                   |
|-----------|-----------------------------------|
| 耕作土       | 1 検査区区画地                          |
|           | 2 Hucl25Y3/2 黒褐色砂質土               |
| 土地改良前の耕作土 | 3 Hucl0YR5/6 黒褐色砂質土               |
| 土地改良前の耕作土 | 4 Hucl25Y4/1 黄褐色砂質土 ややシルト         |
| 土地改良前の耕作土 | 5 Hucl0YR5/3 にぶい黄褐色砂質土 カリカリかたくしまる |
| 土地改良前の耕作土 | 6 Hucl0YR4/1 黒褐色砂質土 ややシルト         |
| 地山        | 7 Hucl25Y6/4 にぶい黄色シルト ハード         |
|           | 8 Hucl0YR3/2 黑褐色砂質土               |
|           | 9 Hucl0YR5/6 黃褐色                  |

第4図 調査区南壁土層断面図(1) I地区 (S=1/40)

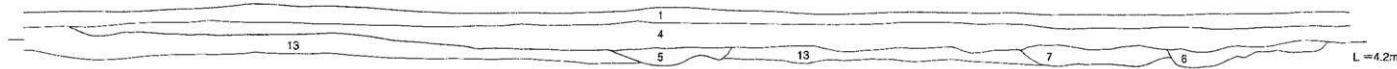
II地区



III地区

耕作上	Hue10YR4/2 黄褐色砂質土	SD06 10 Hue10YR2/2 黑褐色砂質土
近現代堆積	Hue20YR4/2 黑褐色砂質土	SD07 11 Hue10YR2/3 黑褐色砂質土
近現代堆積	Hue10YR2/2 黑褐色砂質土 ハード	SD09 12 Hue10YR2/3 黑褐色砂質土
4	Hue10YR2/2 黑褐色砂質土 ハード	S100 13 Hue10YR2/3 黑褐色砂質土
5	Hue10YR4/3 に高い黄褐色砂質土	埠山 14 Hue7.5YR4/6 黑褐色
6	Hue10YR5/4 に高い黄褐色砂質土 ハード 黄褐色土被多量混入	
7	Hue10YR3/3 黑褐色砂質土	
8	Hue10YR3/3 黑褐色砂質土 ハード	
9	Hue10YR2/2 黑褐色砂質土 (ゆうはい)	

IV地区

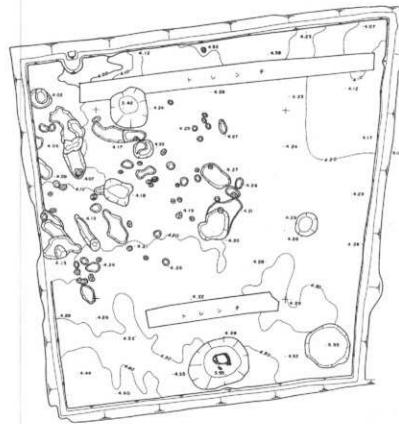
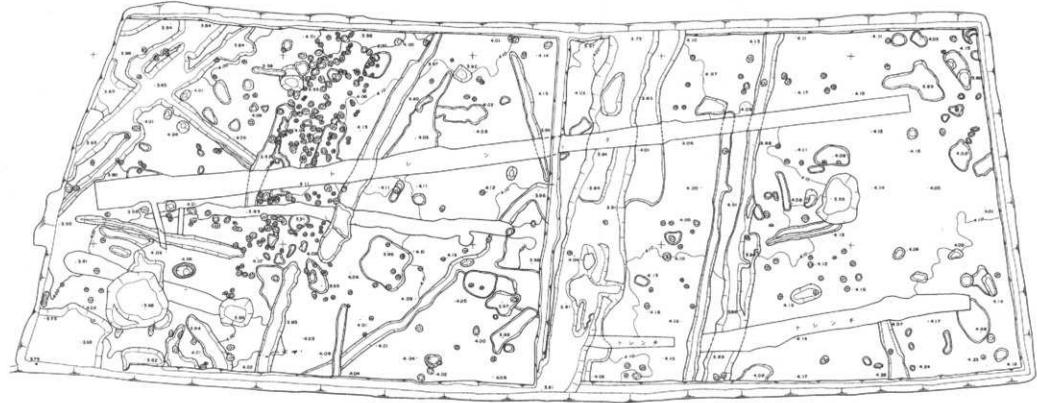


Ⅲ地区

耕作上	Hue2.5Y3/2 黄褐色砂質土	9 Hue10YR4/2 黄褐色砂質土
近現代堆積	Hue10YR4/1 黄褐色砂質土 ややシルト	10 Hue10YR2/3 黑褐色砂質土 良好
近現代堆積	Hue10YR2/3 黑褐色砂質土	11 Hue10YR2/3 黑褐色砂質土 良好
5	Hue10YR2/3 黑褐色砂質土	12 Hue10YR2/2 黑褐色砂質土 良好
6	Hue10YR2/2 黑褐色砂質土 ややしまる	13 Hue10YR2/3 黑褐色砂質土 ハード
7	Hue10YR4/2 黑褐色砂質土	14 Hue10YR2/3 黑褐色砂質土 深淡
8	Hue10YR2/3 黑褐色砂質土 灰褐色	埠山 15 Hue7.5YR4/6 黑褐色

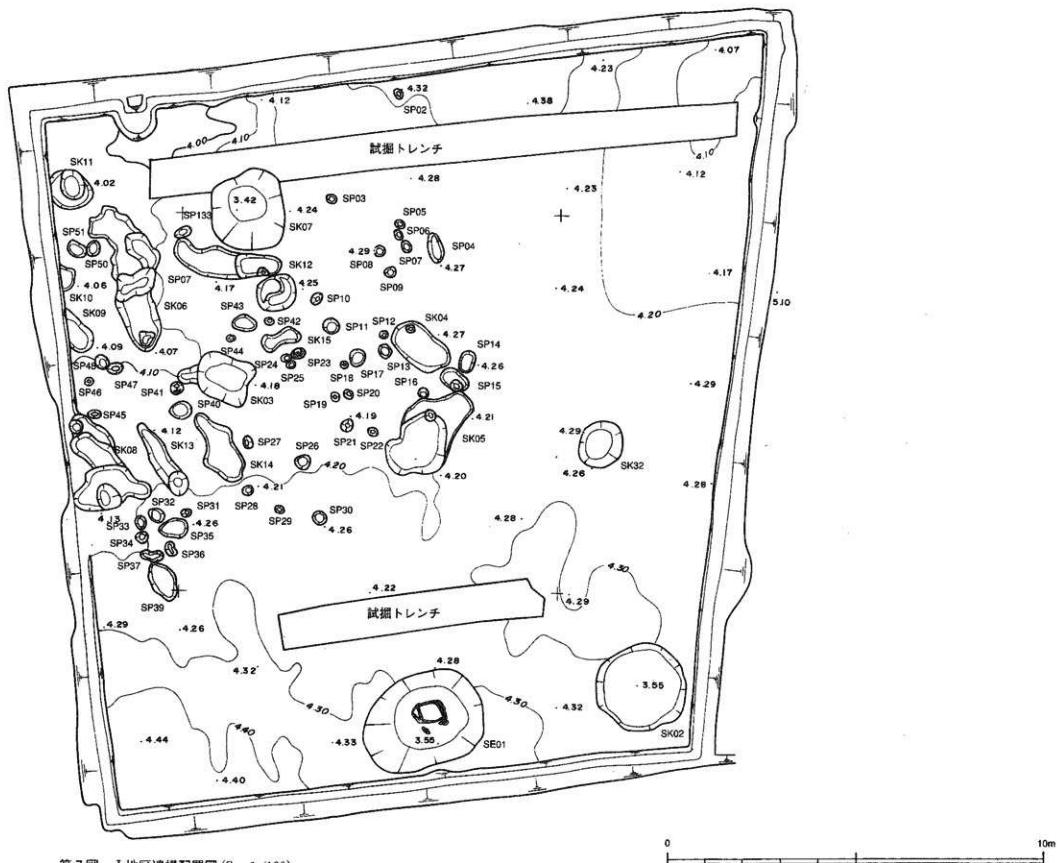
0 2m

第5図 調査区南壁土層断面図(2) II地区・III地区 (S = 1/40)

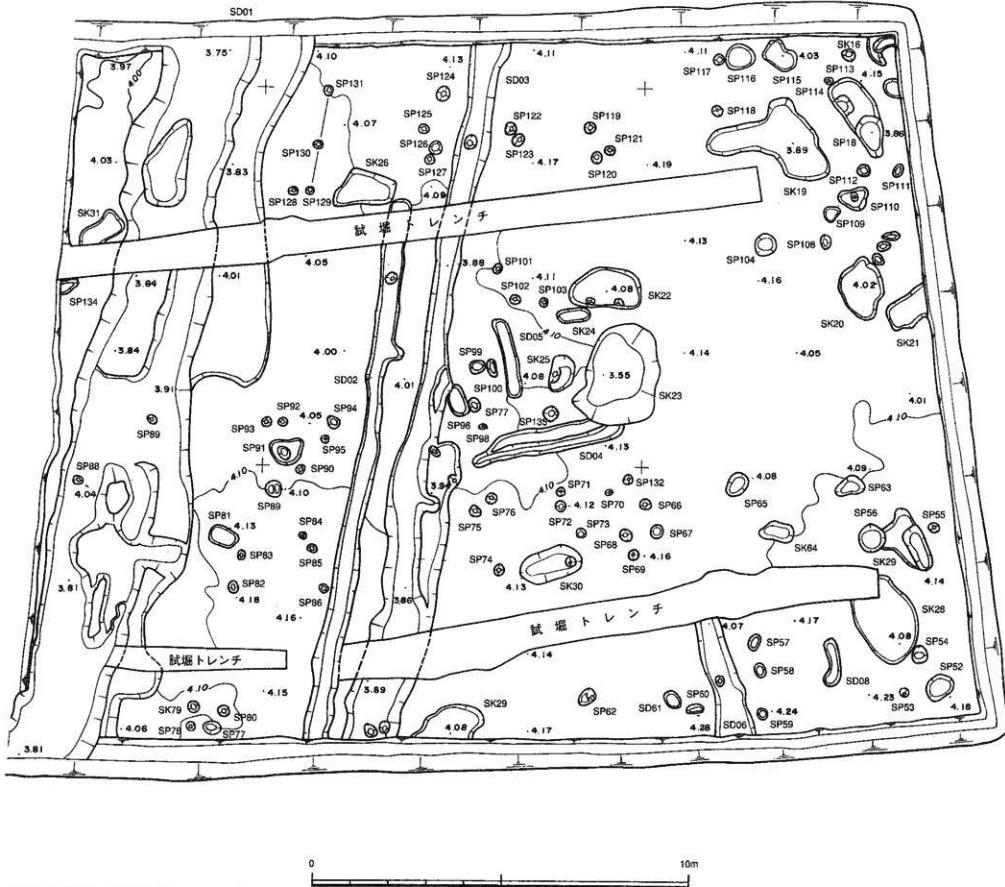


第6図 鞍川D遺跡調査区全体図 (S = 1/200)

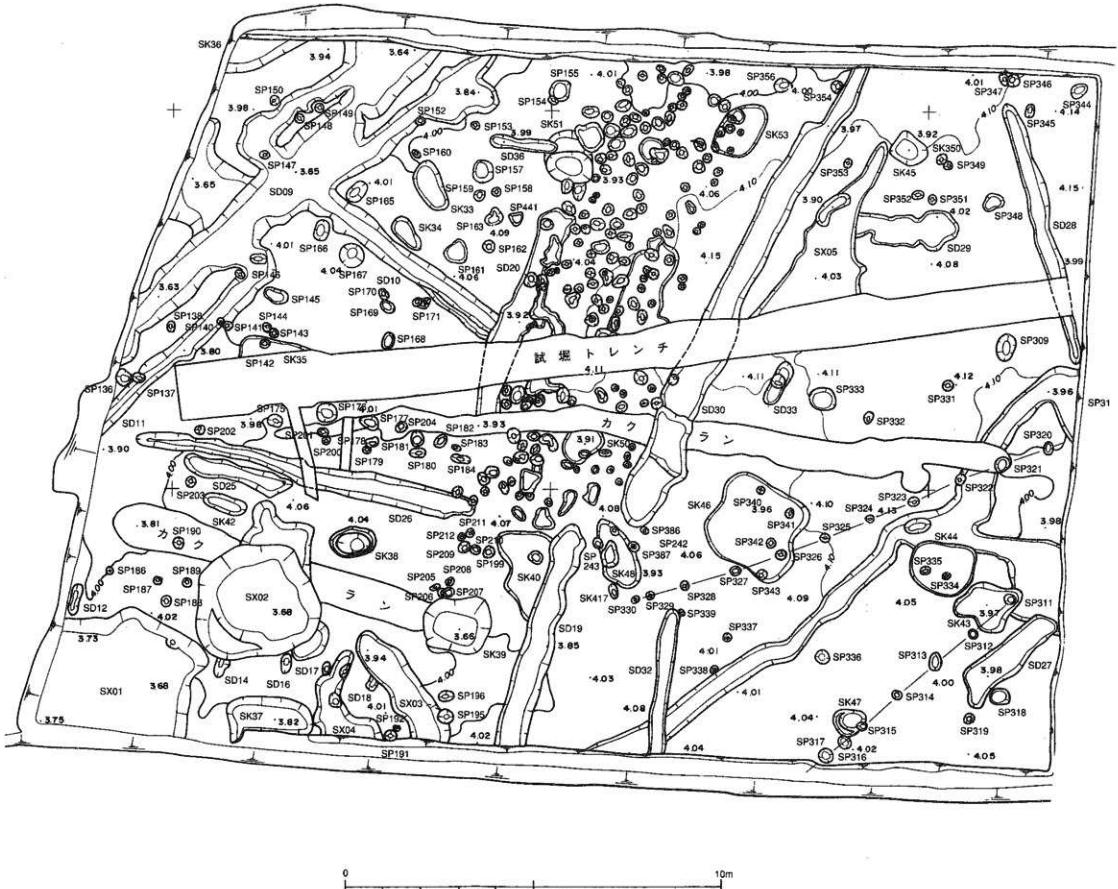




第7図 I地区遺構配置図 (S = 1 / 100)

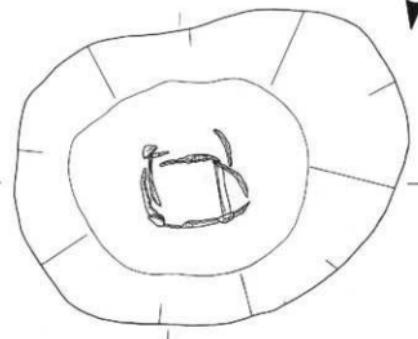
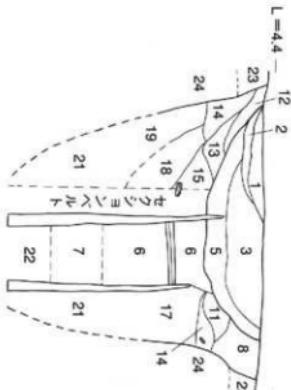


第8図 II地区造構配置図( $S = 1/100$ )



第9図 Ⅲ地区構造配置図 (S = 1/100)

SE01



E01

- 井戸構築時  
埋め戻し土  
1 Hse10YR3/1 黄褐色砂質土 カなりしまる 欽混  
2 Hse2SY3/3 オリーブ色粘土質土 しまる 黄褐色土粒混  
3 Hse2SY3/2 黄褐色砂質土 しまる

4 3付にHse10YR3/6明黄色砂質土ブロック混  
5 Hse2SY3/1 黑褐色砂質土 ややシット  
明黄褐色土ブロック (2cm大) 少量混 欽混

- 6 Hse5Y2/1 黒色シルト

7 Hse2SY3/2 黒褐色シルト 結物多量に帯状

- 8 Hse2SY3/2 黑褐色砂質土 明黄褐色シルトブロック (2cm大) 多量混  
9 Hse10YR3/6 黃褐色シルト

10 Hse10YR6/4 にじみ 黄褐色シルト

11 Hse2SY3/2 黑褐色砂質土 明黄褐色シルトブロック (1cm大) 多量混 欽混

12 Hse2SY4/2 細灰黃褐色砂質土 膜状じごる

13 Hse2SY3/1 黑褐色砂質土 ややシット 黄褐色土粒混 欽混

14 Hse2SY3/2 黑褐色砂質土 明黄褐色土粒 (1cm大) 多量混

15 Hse5Y2/1 黑色シルト

16 Hse2SY3/1 黑褐色シルト 明黄褐色シルトブロック少量混 欽混

17 Hse5Y3/2 オリーブ色シルトブロック (1cm大) 多量混

18 Hse2SY3/3 黑褐色シルト 稀少層混

19 Hse2SY3/2 黑褐色シルト (1cm大) 多量混

20 Hse2SY3/2 黑褐色砂質土 黄褐色土ブロック混  
明黄褐色土ブロック多量混

21 Hse5Y3/1 オリーブ黑色シルト

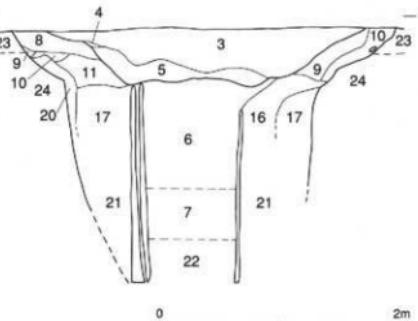
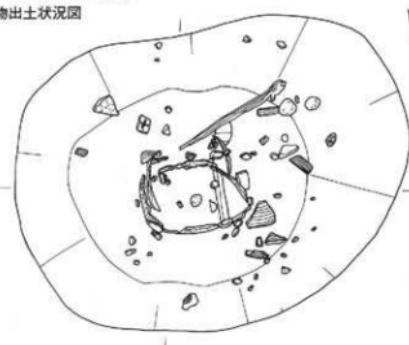
Hse2SY5/1 オリーブ灰シルトブロック柱 (1cm大) 混

- 山形の積み上がり  
22 Hse5Y5/1 黄色砂質土

- 23 Hse2SY3/4 黄褐色砂質土 固くしまる

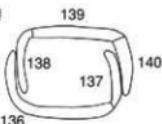
- 24 Hse10YR4/4 黃褐色

E01上層遺物出土状況図



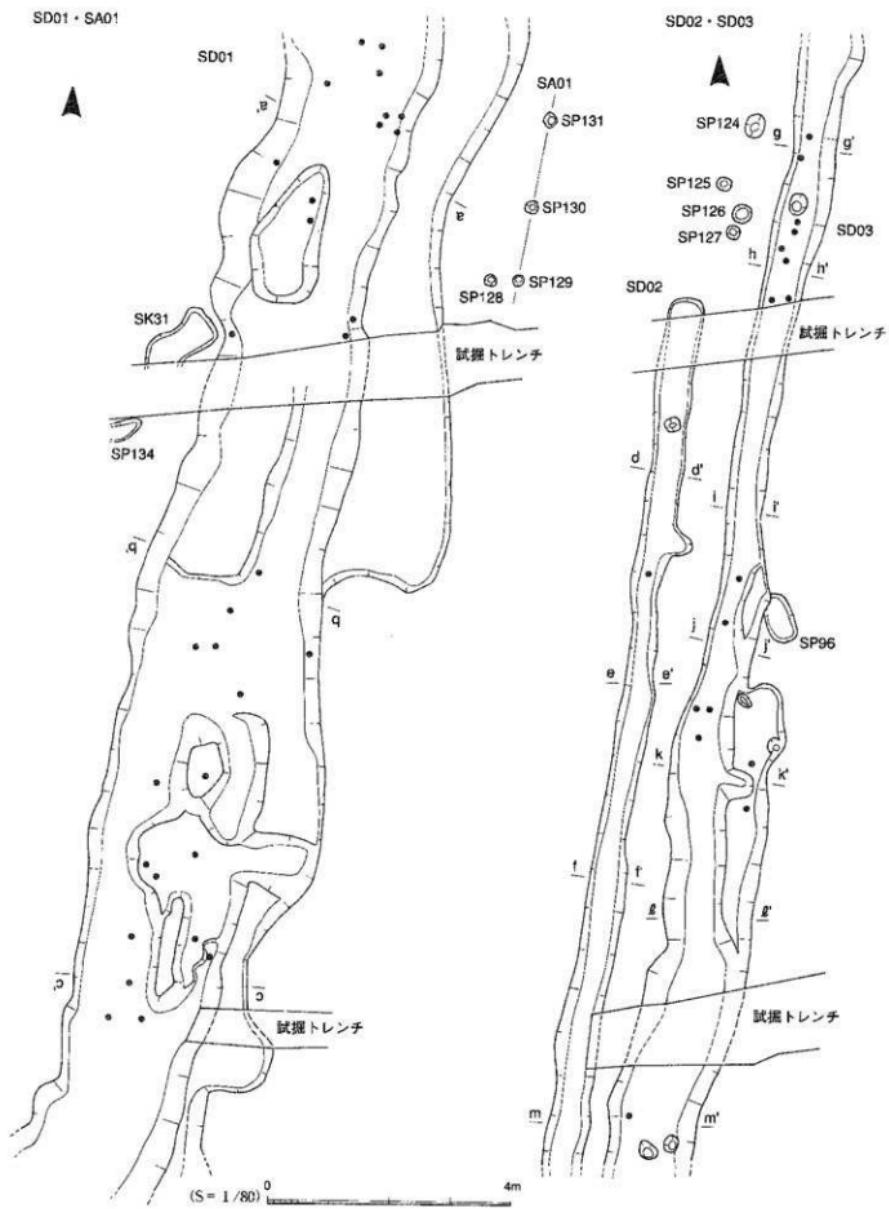
SE01井戸側材構造模式図(上から)

井戸構築時



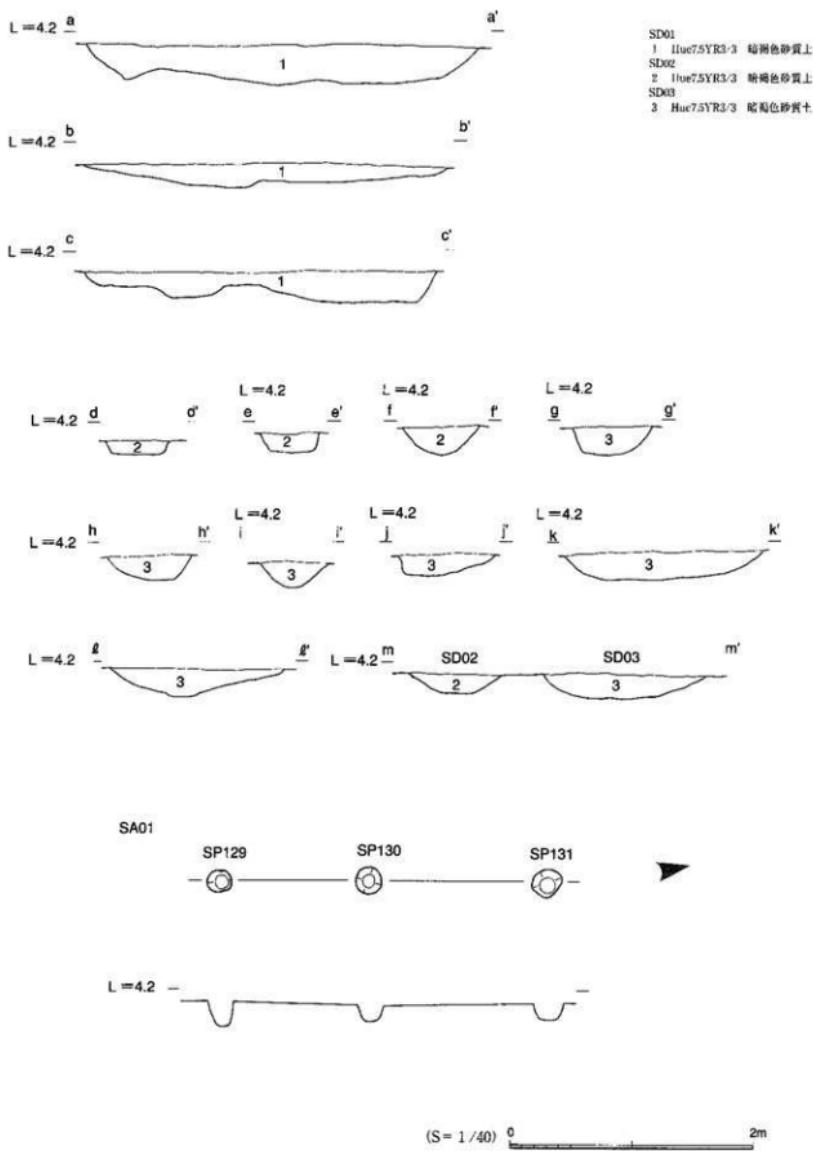
※数字は遺物番号に対応

第10図 遺構実測図(1) SE01 (S = 1/40)



第11図 遺構実測図(2) SD01・SD02・SD03・SA01 (S = 1/80)

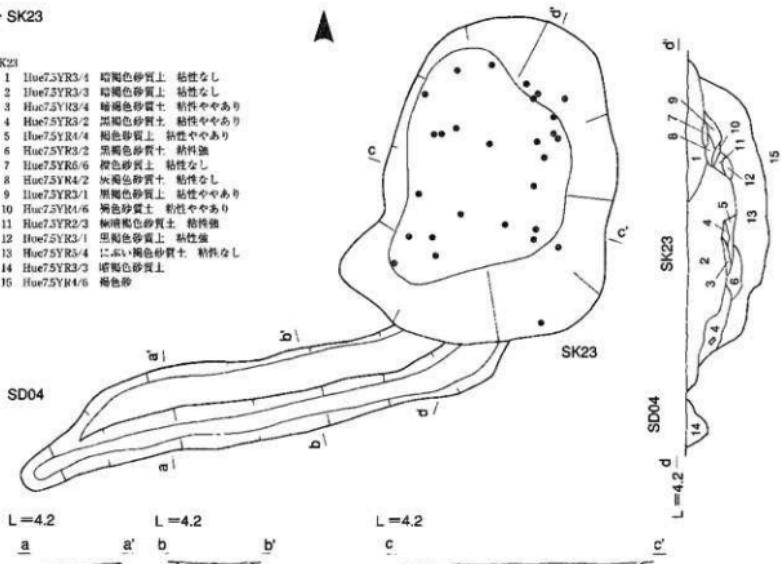
●は遺物出土地点



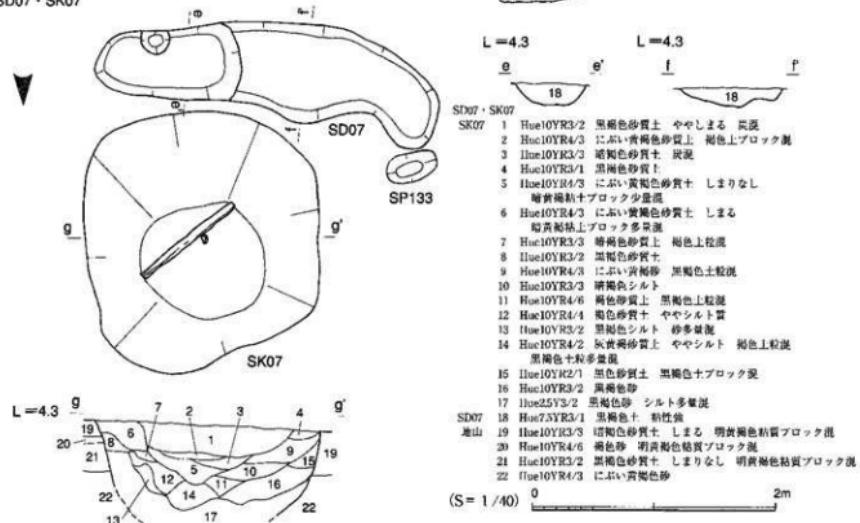
第12図 遺構実測図(3) SD01・SD02・SD03・SA01 ( $S = 1/40$ )

## SD04・SK23

- SD01・SK23  
 SK23 1 Huet5YR3/4 暗褐色砂質土 粘性なし  
 2 Huet5YR3/3 暗褐色砂質土 粘性なし  
 3 Huet5YR3/4 暗褐色砂質土 粘性やあり  
 4 Huet5YR3/2 黒褐色砂質土 粘性ややあり  
 5 Huet5YR4/4 暗褐色砂質土 粘性やあり  
 6 Huet5YR3/6 黒褐色砂質土 粘性強  
 7 Huet5YR6/6 暗褐色砂質土 粘性なし  
 8 Huet5YR4/2 黑褐色砂質土 粘性なし  
 9 Huet5YR3/1 黑褐色砂質土 粘性ややあり  
 10 Huet5YR1/6 黑褐色砂質土 粘性強  
 11 Huet5YR2/3 暗褐色砂質土 粘性強  
 12 Huet5YR3/1 黑褐色砂質土 粘性強  
 13 Huet5YR3/4 にぶい暗褐色砂質土 粘性なし  
 SD04 14 Huet5YR2/2 黑褐色砂質土  
 地山 15 Huet5YR4/6 暗褐色



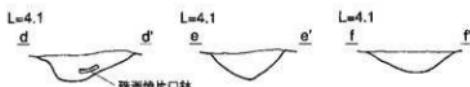
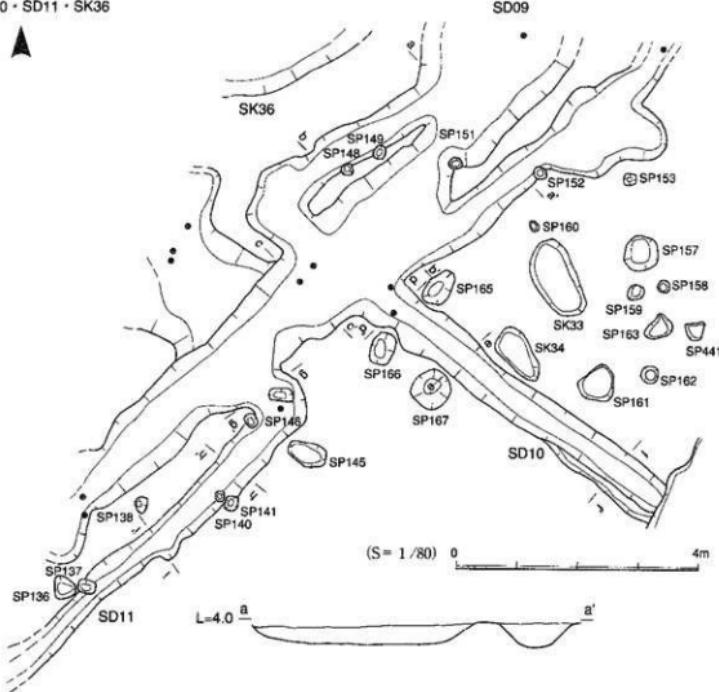
## SD07・SK07



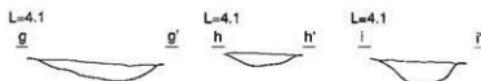
第13図 遺構実測図(4) SD04・SD07・SK07・SK23 (S = 1/40)

●は遺物出土地点

SD09・SD10・SD11・SK36



SD10  
Hue10YR3/2 黑褐色砂質土

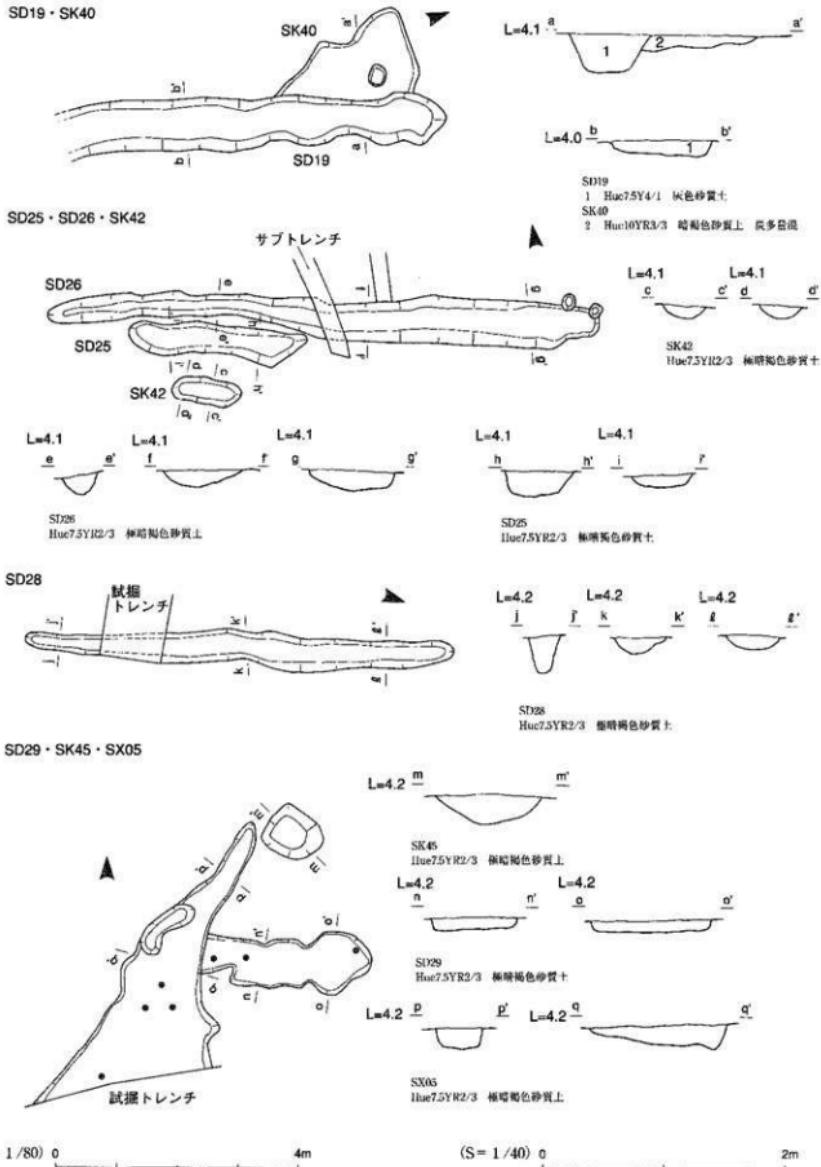


SD11  
Hue10YR3/2 黑褐色砂質土

(S = 1 / 40) 0 2m

●は遺物出土地点

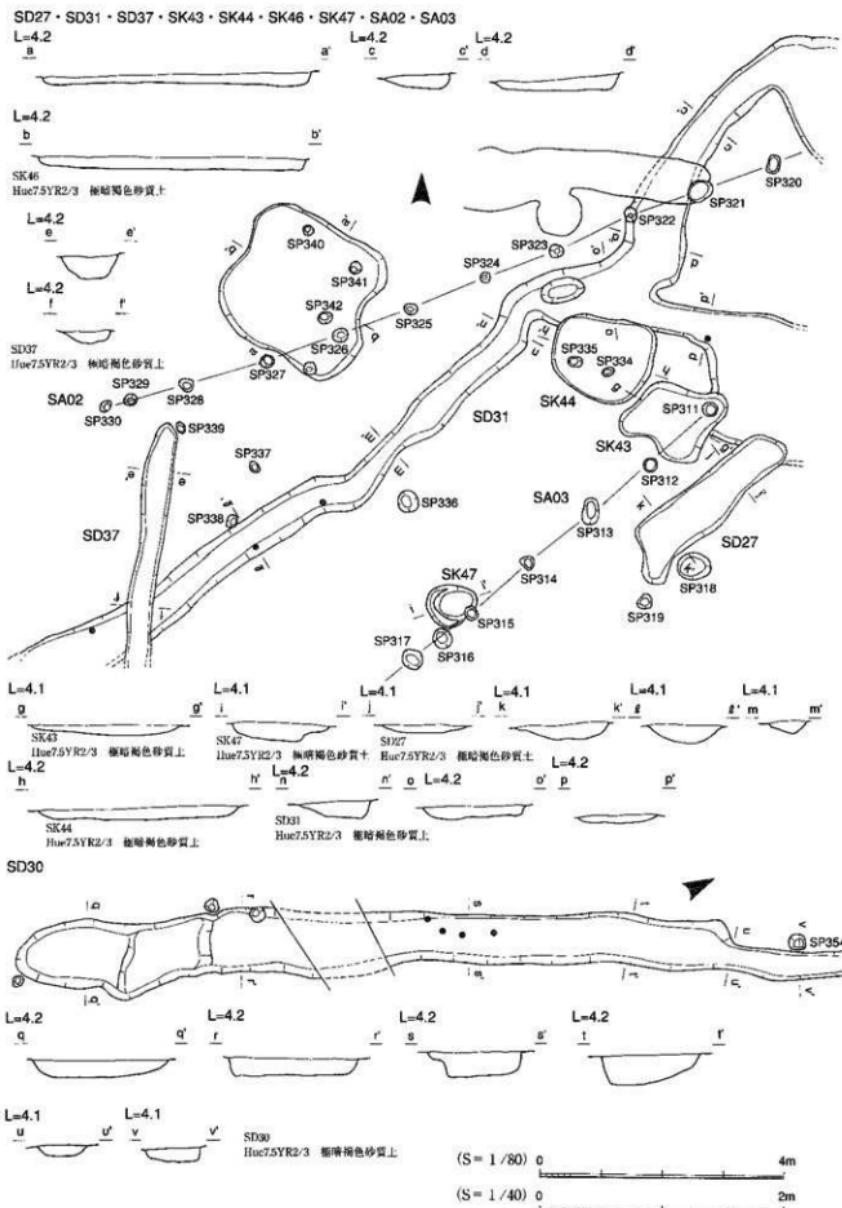
第14図 遺構実測図(5) SD09・SD10・SD11・SK36 (平面図はS = 1 / 80、断面図はS = 1 / 40)



第15図 遺構実測図(6) SD19・SD25・SD26・SD28・SD29・SK40・SK42・SK45・SX05

(平面図はS = 1/80、断面図はS = 1/40)

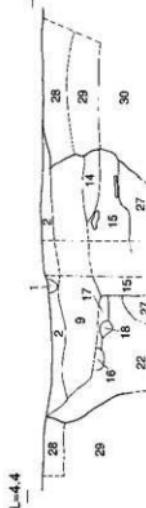
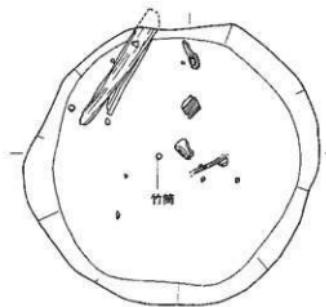
●は遺物出土地点



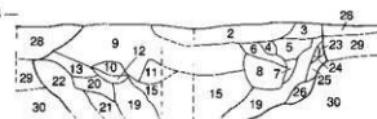
第16図 遺構実測図(7) SD27・SD30・SD31・SD37・SK43・SK44・SK46・SK47・SA02・SA03  
 (平面図はS=1/80、断面図はS=1/40) ●は遺物出土地点

●は遺物出土地点

SK02



L=4.4 —

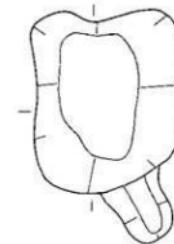


SK03

SK02

- 1 Huc25Y6/3 にぶい黄色シルトブロック
- 2 Huc25Y7/2 黒褐色砂質土 かたくしまる 黄色シルトブロック小混
- 3 Huc25Y5/3 黄褐色シルト かたくしまる
- 4 Huc25Y6/3 にぶい黄色シルトブロック
- 5 Huc25Y4/2 暗灰黃シルトにほり黄色シルトブロック小多量混
- 6 Huc25Y3/2 黑褐色砂 にぶい黄色シルトブロック大混
- 7 Huc25Y4/2 黑褐色砂 にぶい黄色シルトブロック小混
- 8 Huc25Y6/3 にぶい黄色シルトブロック
- 9 Huc25Y3/2 黑褐色砂質土
- 10 にぶい黄色シルトブロック小混 (小2cm大5cm) 多量混 黄混
- 11 Huc25Y6/3 にぶい黄色シルトブロック 黑褐色シルトブロック小混 かたくしまる
- 12 Huc25Y7/1 黑褐色シルト
- 13 Huc25Y5/3 黄褐色シルト 黄褐色シルトブロック混
- 14 Huc3Y6/2 淡オリーブ色シルト Huc5Y4/1 黄色シルトブロック大混
- 15 Huc3Y3/2 オリーブ黑色シルト にぶい黄色シルトブロック小混 暗褐色砂ブロック混
- 16 Huc25Y6/3 にぶい黄色シルト 黑褐色シルトブロック小混
- 17 Huc3Y4/1 黄色砂 ややシルト質 にぶい黄色ブロック小混
- 18 Huc25Y2/1 黑色シルト
- 19 Huc3Y5/2 淡オリーブシルト 黑褐色シルト混
- 20 Huc25Y2/1 黑色シルト 黑褐色シルトブロック大混
- 21 Huc25Y5/2 暗灰色シルト 黑褐色シルトブロック小混
- 22 Huc25Y4/1 黄褐色シルト にぶい黄色シルトブロック小~大多量混 黄褐色シルトブロック小多量混 黄混
- 23 Huc3Y5/2 淡オリーブシルト
- 24 Huc25Y3/3 淡オリーブ暗褐色シルト混
- 25 Huc3Y5/2 淡オリーブシルト
- 26 Huc25Y3/2 黑褐色砂 シルト混
- 27 Huc25Y5/1 オリーブ灰褐色シルト
- 28 Huc25Y6/3 にぶい黄色シルト
- 29 Huc10YR3/2 黑褐色砂質土
- 30 Huc10YR4/4 灰色砂

L=4.2



L=4.2 —

SK03

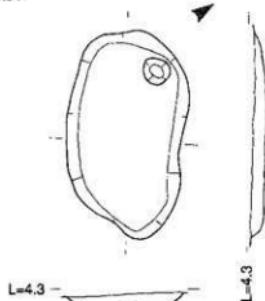
- 1 Huc75YR3/1 黑褐色砂質土
- 2 Huc75YR3/3 黑褐色砂質土

第17図 遺構実測図(8) SK02・SK03 (S=1/40)

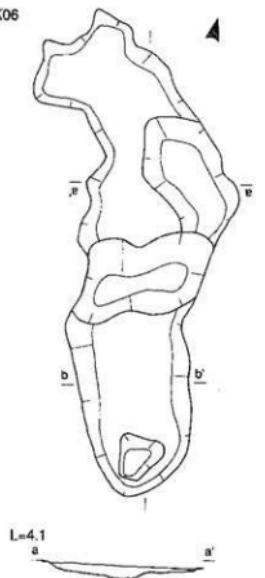
(S=1/40) 0

2m

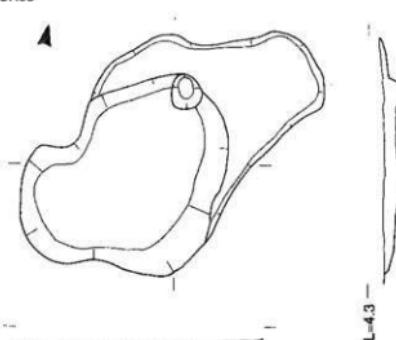
SK04

SK04  
Hue7.5YR3/4 單褐色砂質土、粘性なし

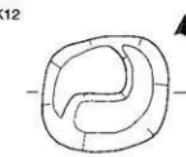
SK06

L=4.1  
SK06  
Hue7.5YR3/3 單褐色砂質土

SK05

SK05  
Hue7.5YR3/3 單褐色砂質土

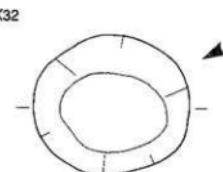
SK12



L=4.3 -

- SK12
- 1 Hue7.5YR3/1 黒褐色土、粘性強
  - 2 Hue7.5YR4/3 紅色砂質土、粗粒、粘性弱
  - 3 Hue7.5YR2/3 單褐色砂質土、粘性強
  - 4 Hue7.5YR3/3 單褐色土、粘性やや強
  - 5 Hue7.5YR3/3 單褐色土、粘性やや強
  - 6 Hue7.5YR4/3 紅色砂質土、粗粒、粘性弱

SK32



L=4.4 -

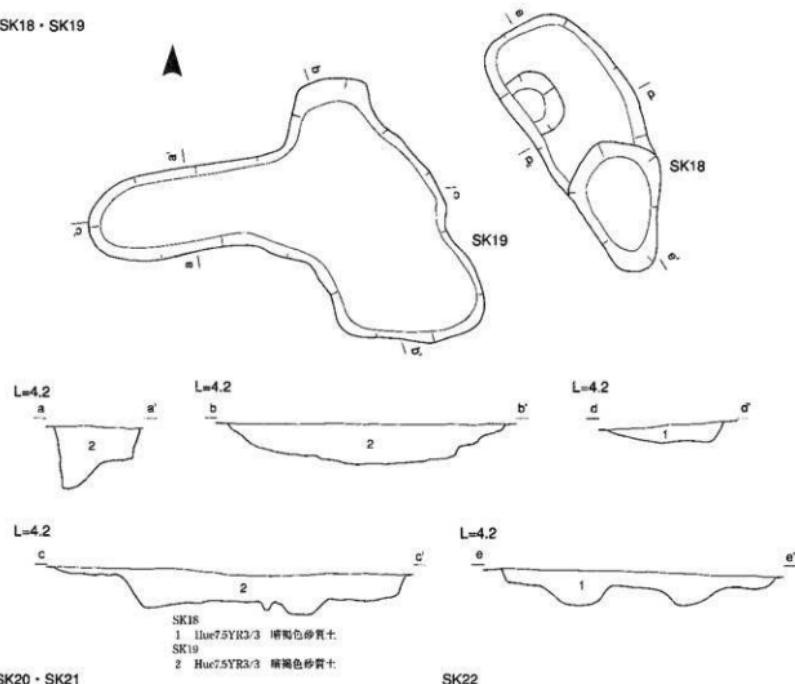
- SK32
- 1 Hue7.5YR3/3 單褐色砂質土
  - 2 Hue7.5YR6/1 灰色粘土ブロック
  - 3 Hue7.5YR2/2 黑褐色砂質土、粘性強

(S = 1/40) 0

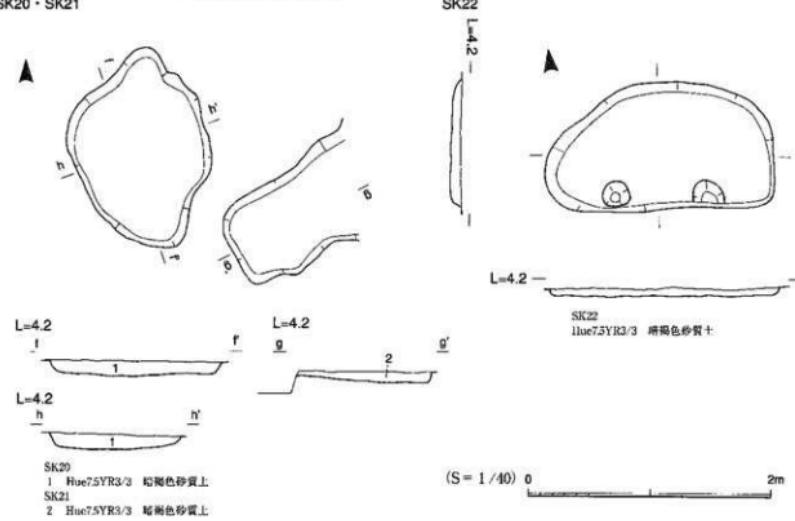
2m

第18図 遺構実測図(9) SK04・SK05・SK06・SK12・SK32 (S = 1/40)

SK18・SK19

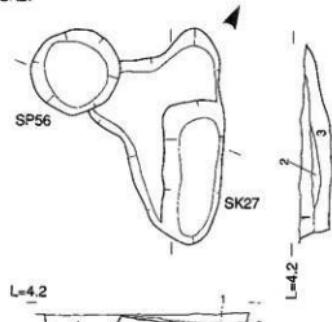


SK20・SK21

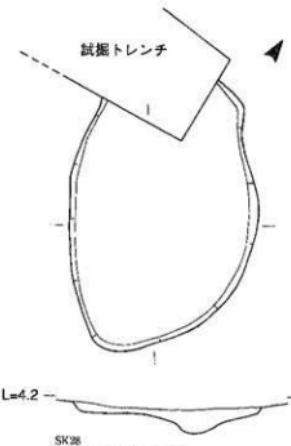


第19図 遺構実測図(10) SK18・SK19・SK20・SK21・SK22 (S = 1 / 40)

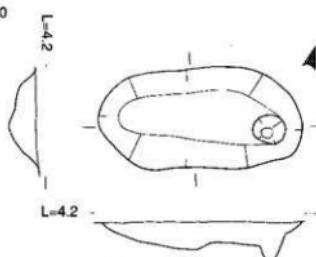
SK27



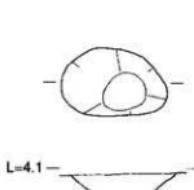
SK28



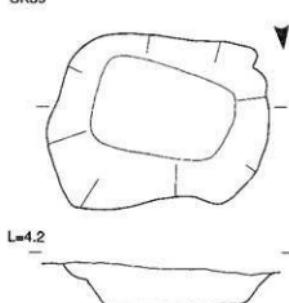
SK30



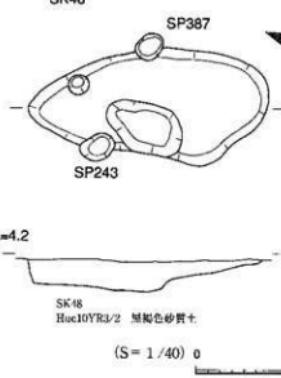
SK38



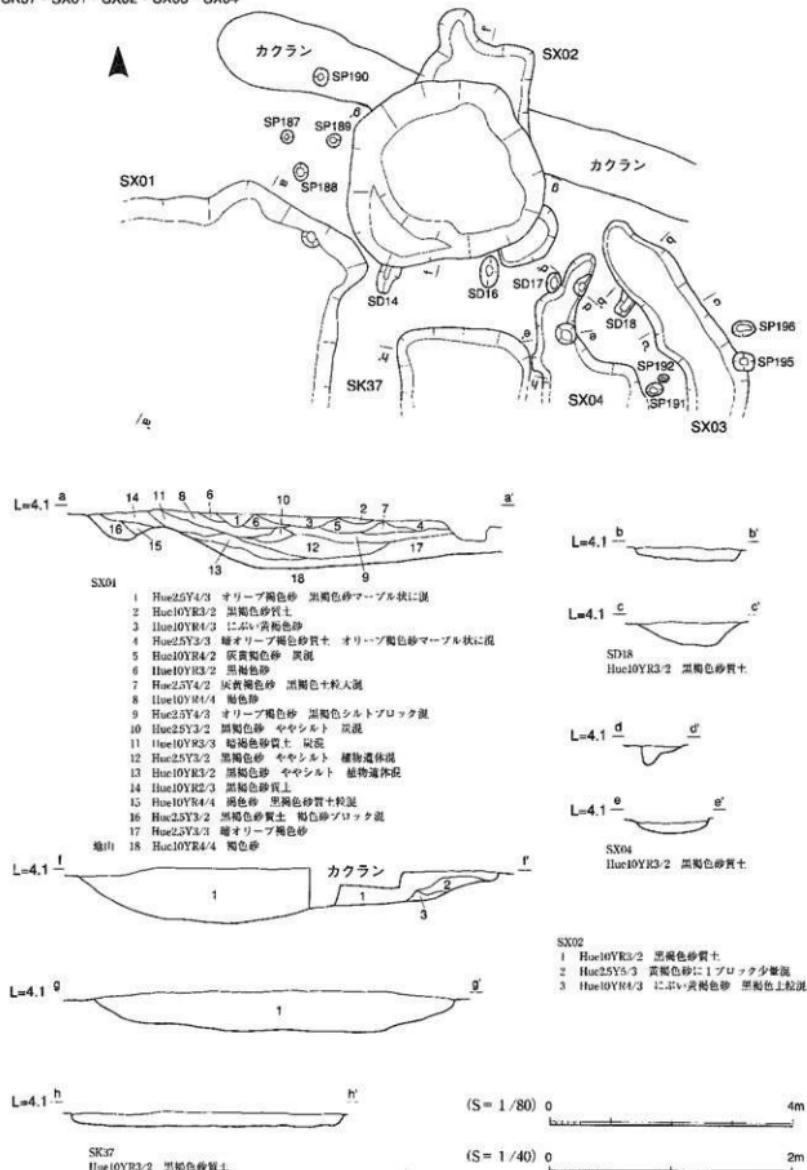
SK39



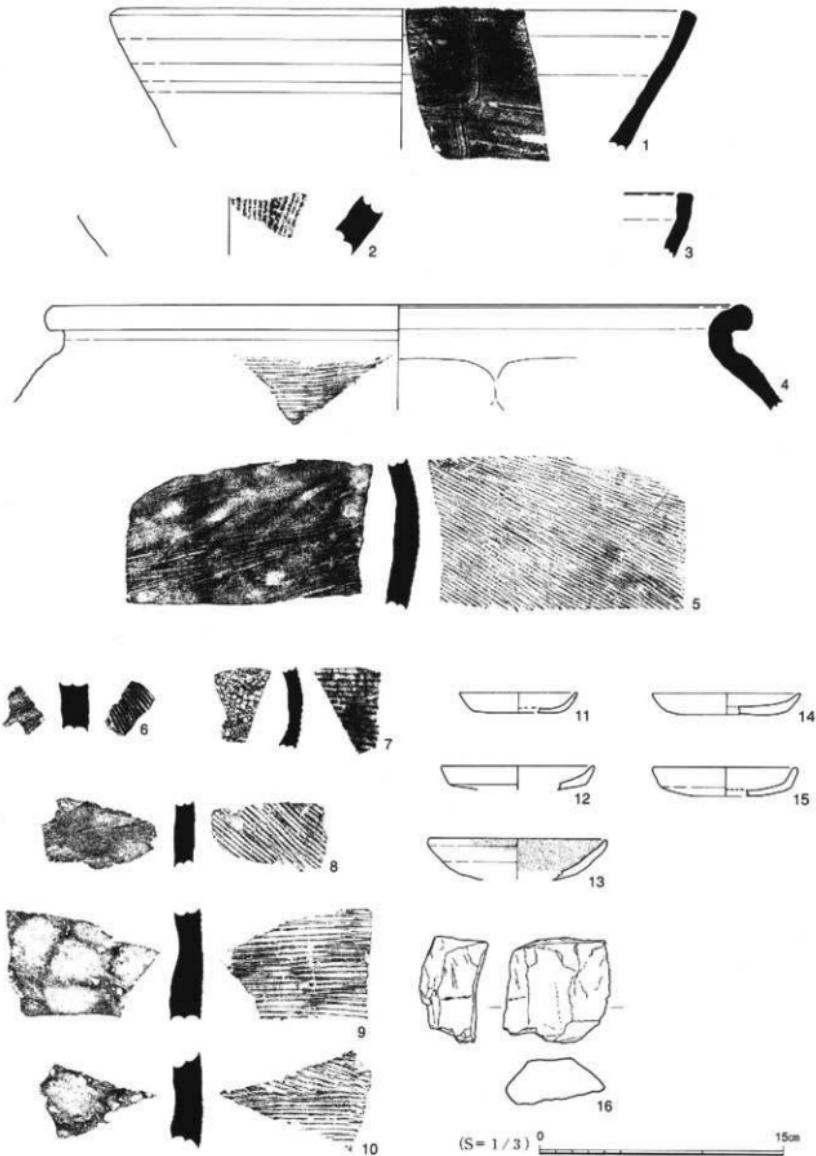
SK48



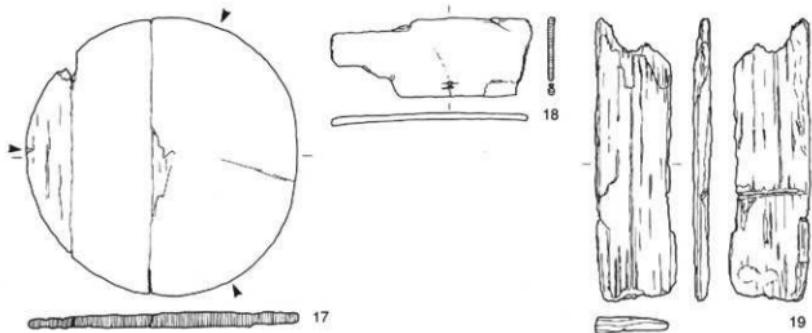
第20図 遺構実測図(11) SK27・SK28・SK30・SK38・SK39・SK48 (S = 1/40)



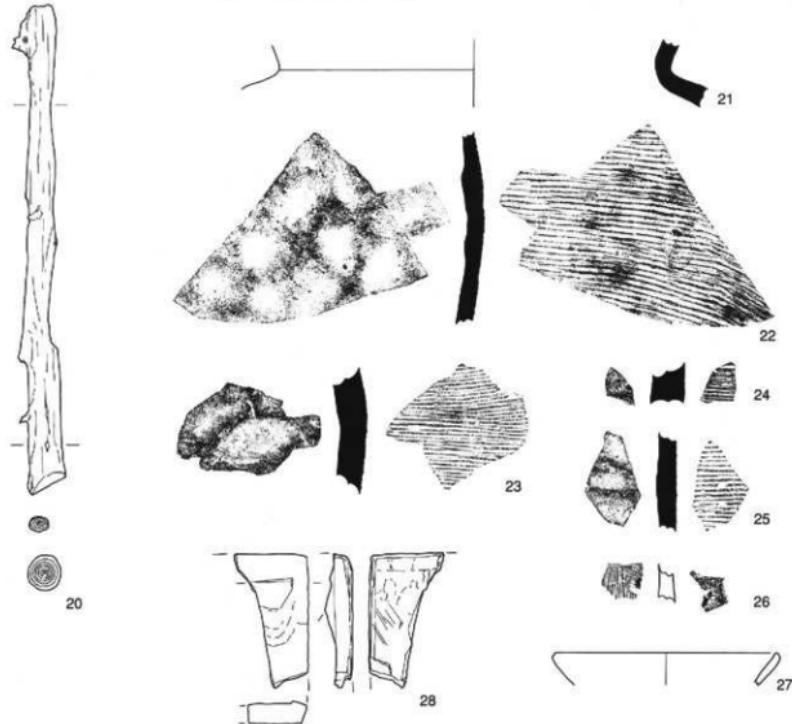
第21図 遺構実測図(12) SK37・SX01・SX02・SX03・SX04 (平面図はS = 1 / 80、断面図はS = 1 / 40)



第22図 遺物実測図(1) (S=1/3)



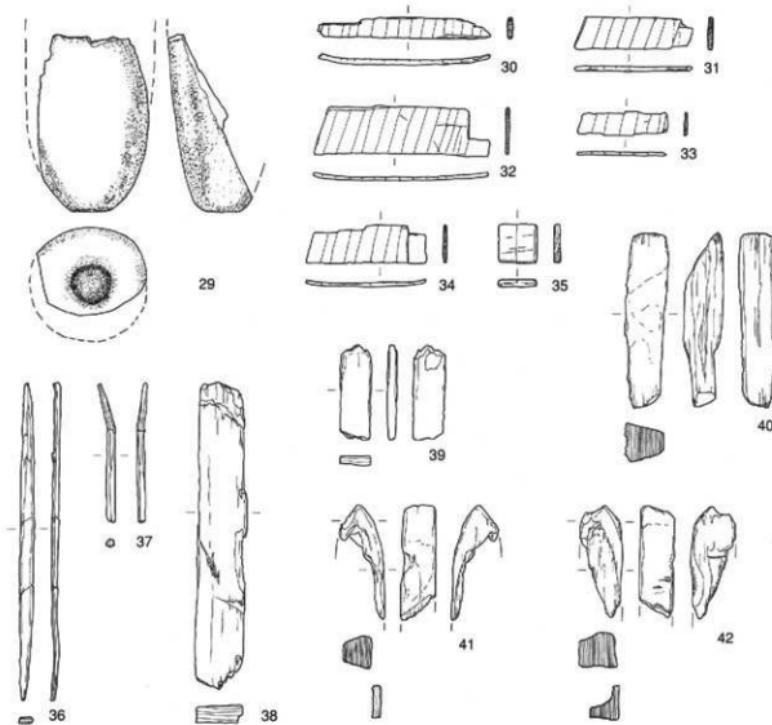
SE01 井戸側外側埋土出土遺物



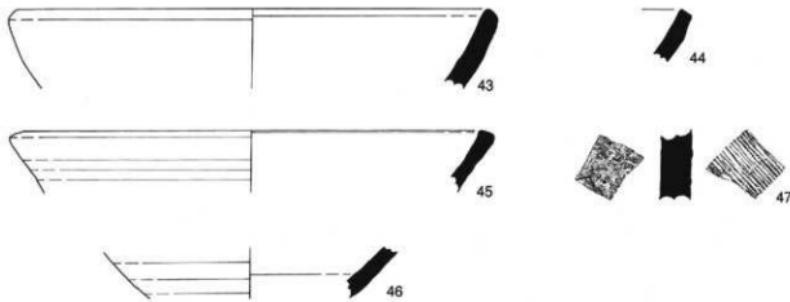
(S = 1 / 3) 0 15cm

(S = 1 / 10) 0 50cm

第23図 遺物実測図(2) (S = 1 / 3、20のみS = 1 / 10)



SE01 井戸側内堆積土出土遺物

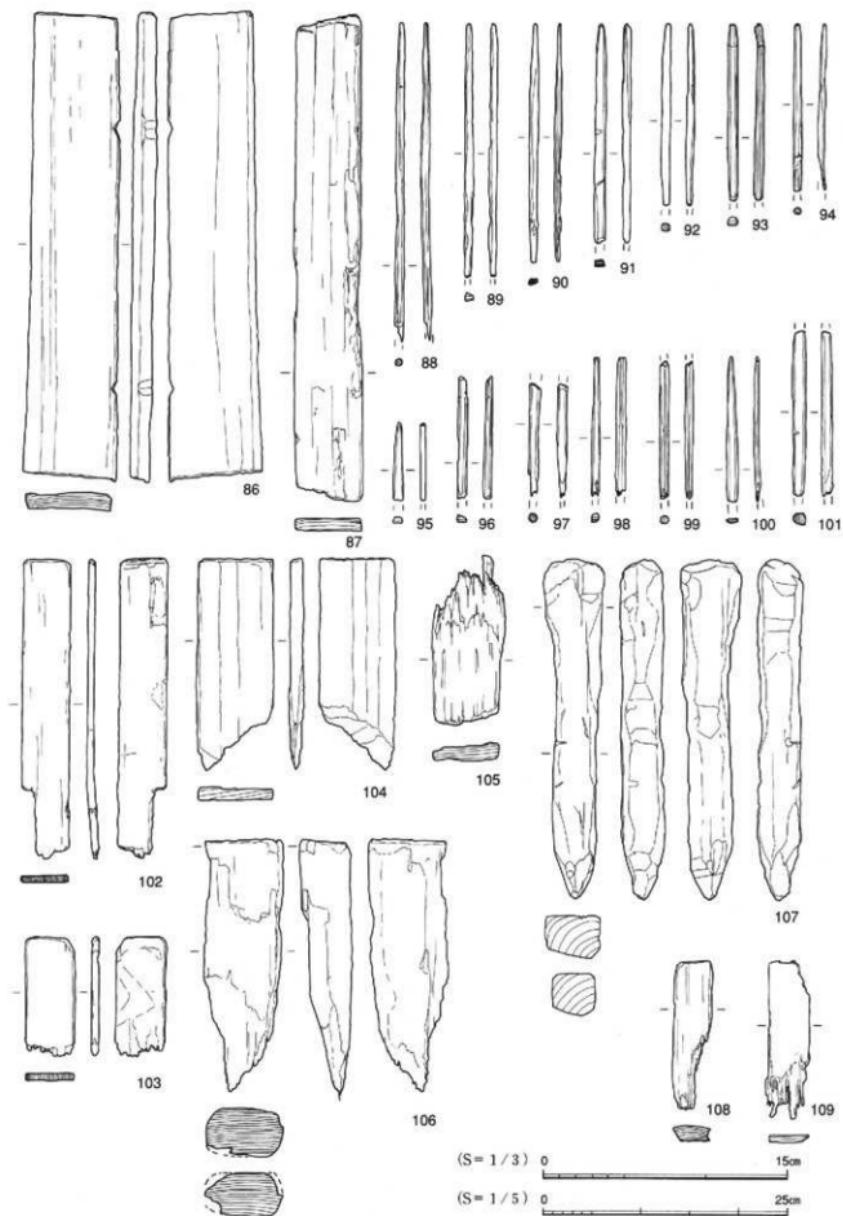


(S = 1 / 3) 0 15cm

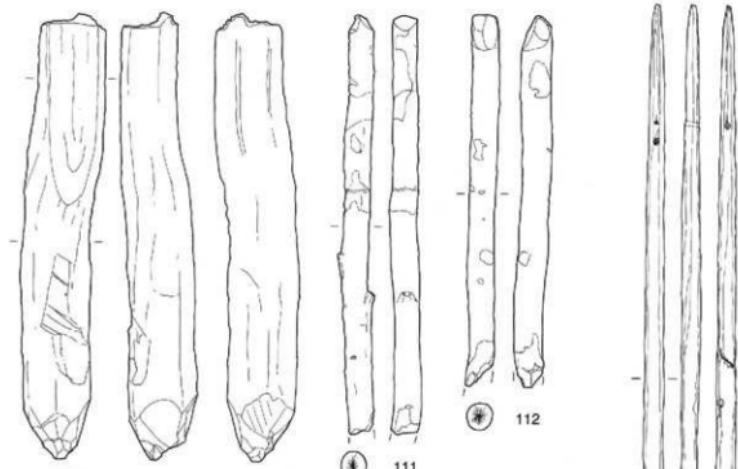
第24図 遺物実測図(3) (S = 1 / 3)



第25図 遺物実測図(4) (S = 1/3)

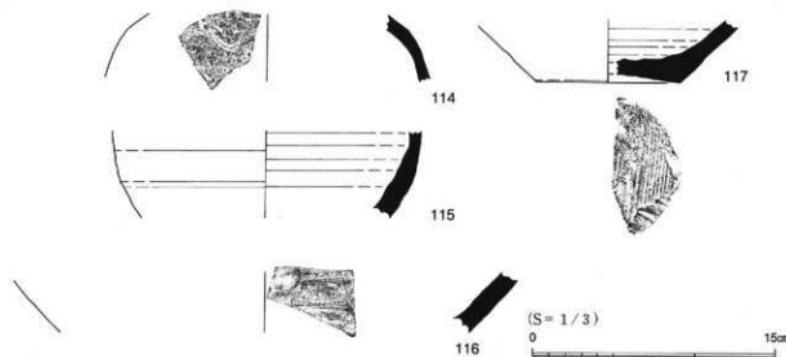


第26図 遺物実測図(5) ( $S = 1/3$ 、86のみ $S = 1/5$ )

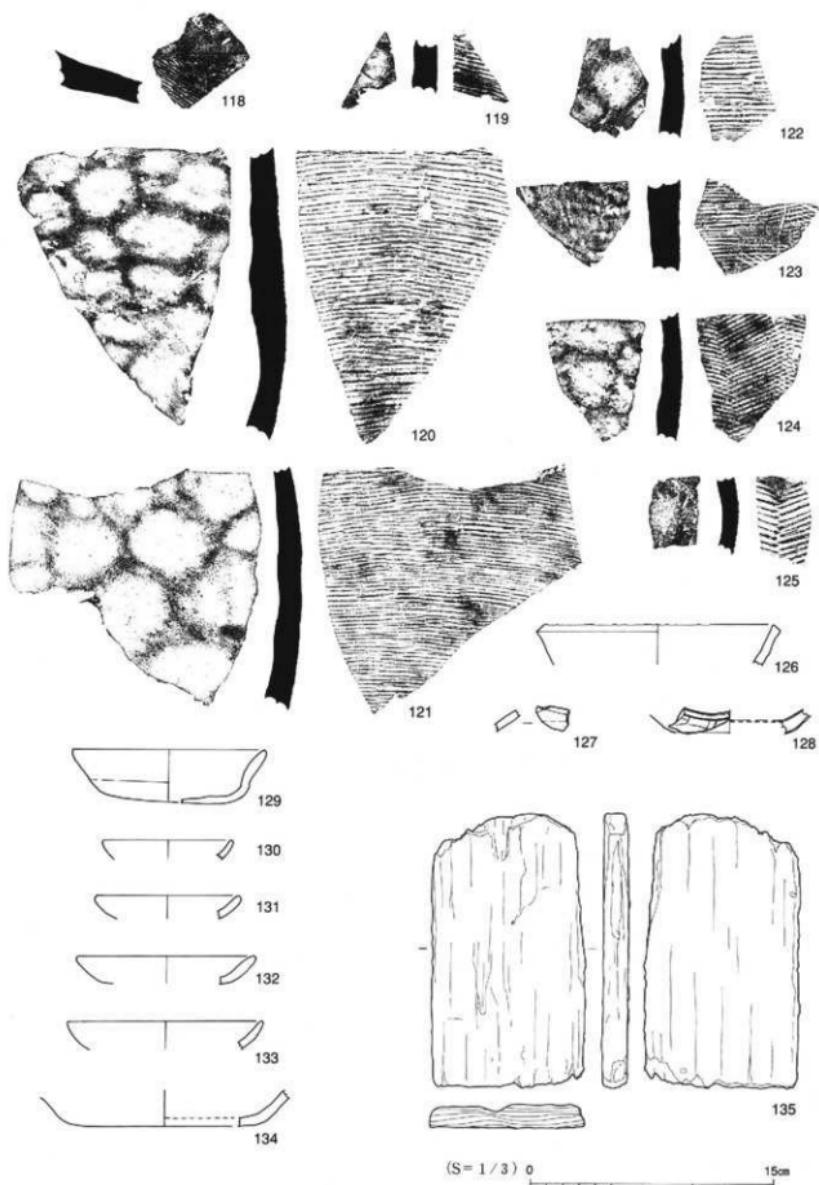


SE01 埋め戻し土出土遺物

113

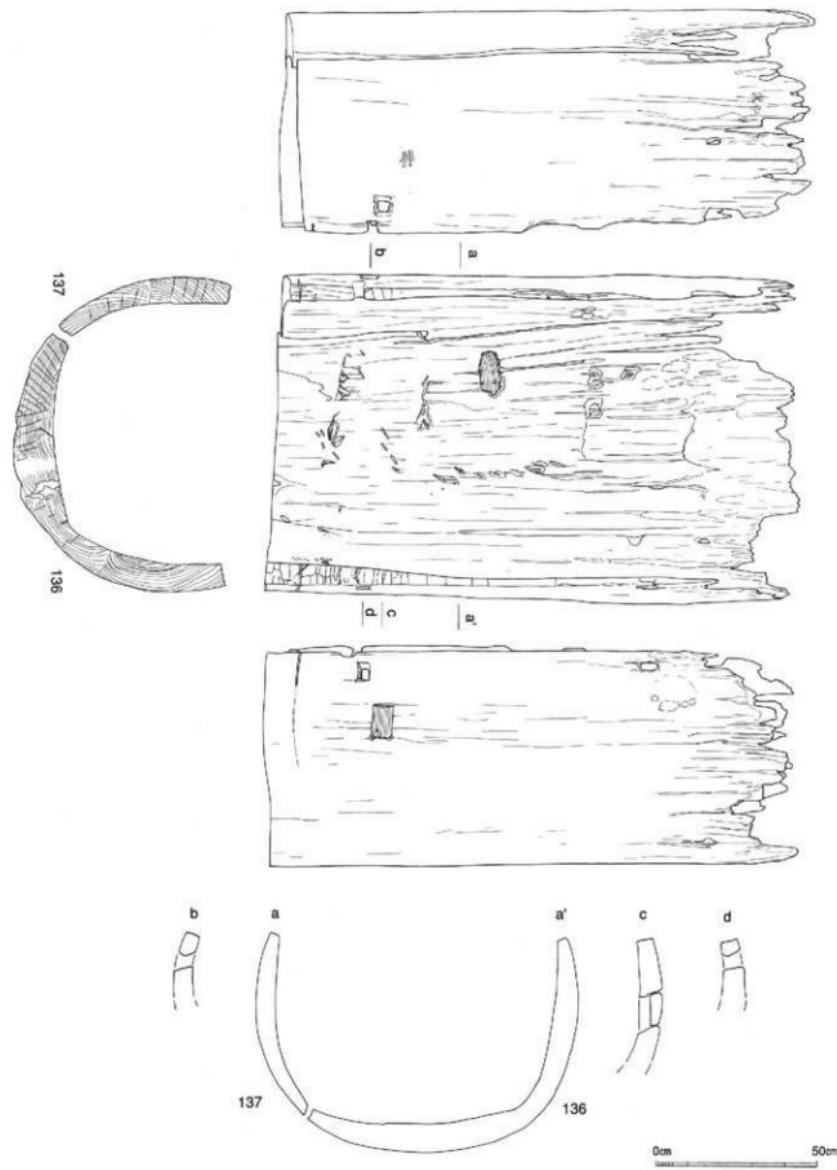


第27図 遺物実測図(6) (S = 1/3)



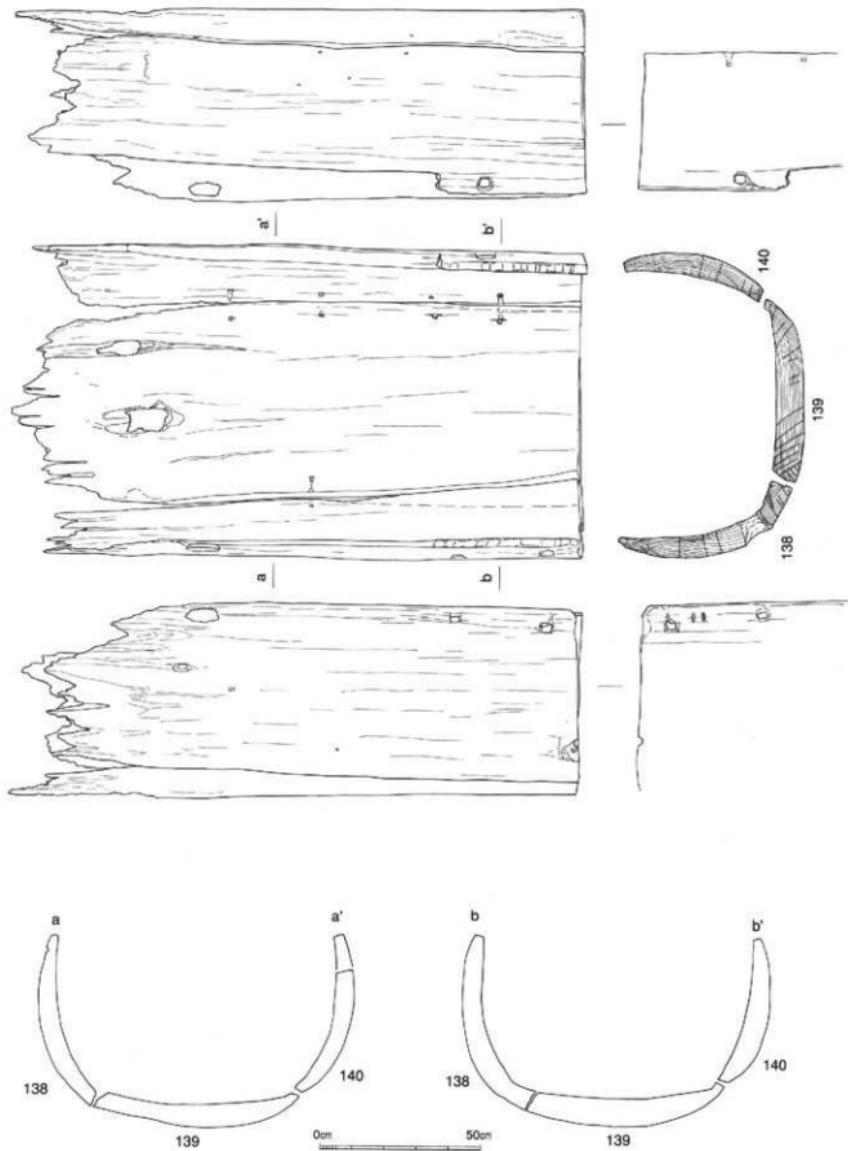
第28図 遺物実測図(7) ( $S = 1/3$ )

SE01 戸戸側構成材 丸木船(a)

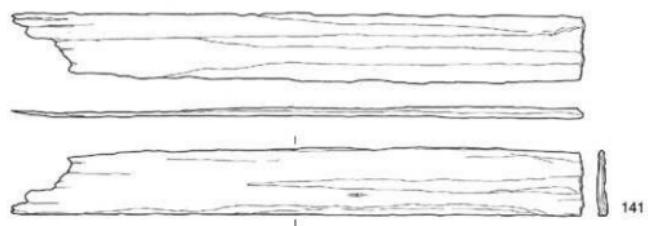


第29図 遺物実測図(8) (S = 1/15)

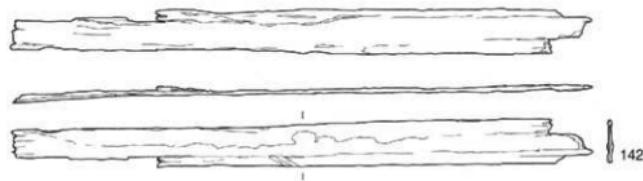
丸木船(b)



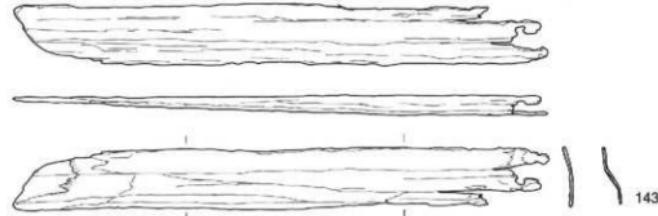
第30図 遺物実測図(9) (S = 1 / 15)



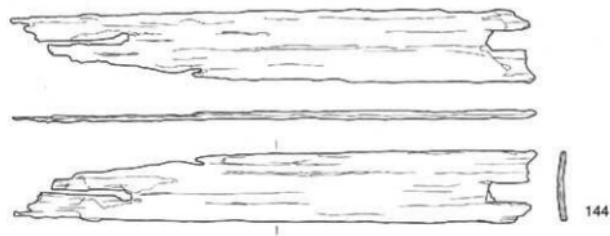
141



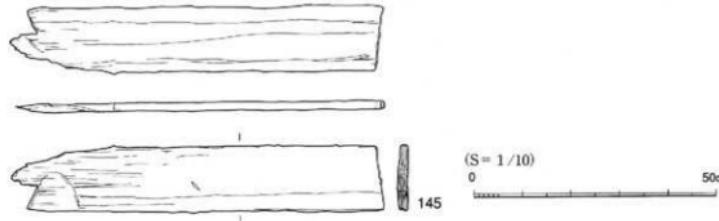
142



143



144



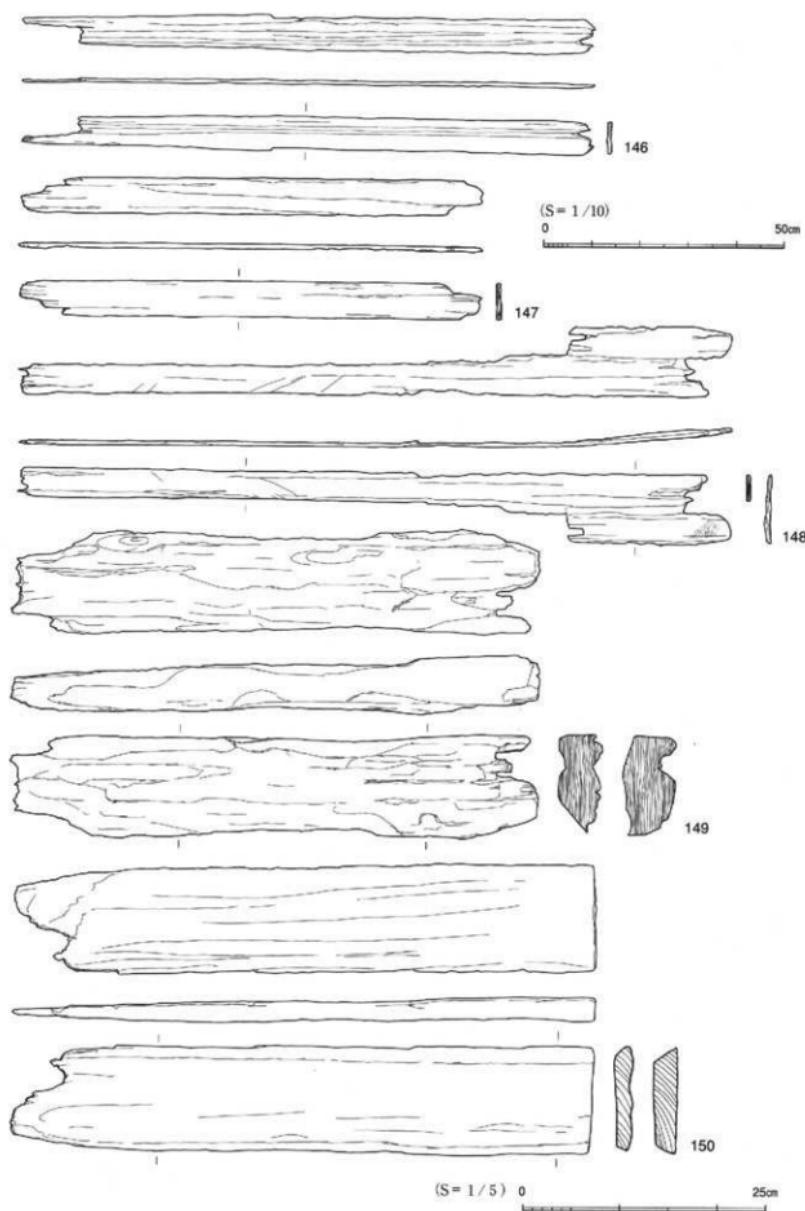
145

(S = 1/10)

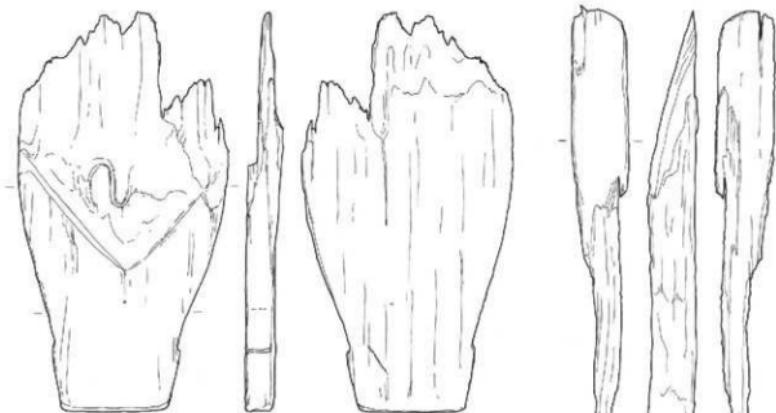
0

50cm

第31図 遺物実測図(10) (S = 1/10)



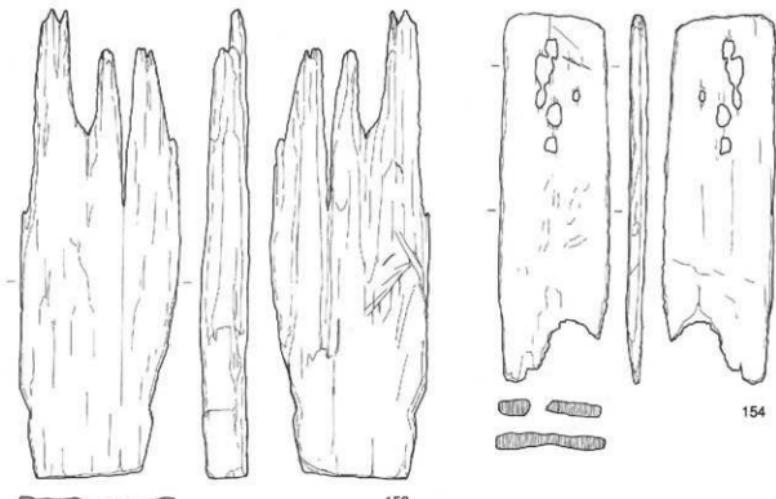
第32図 遺物実測図(11) (146~148はS = 1/10、149・150はS = 1/5)



151



153



152

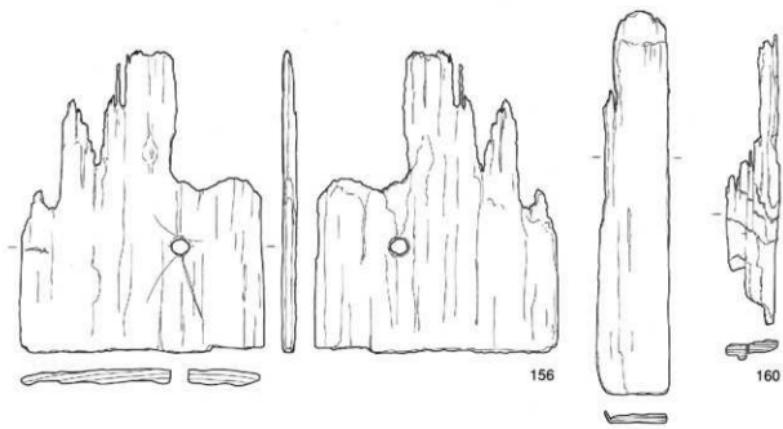
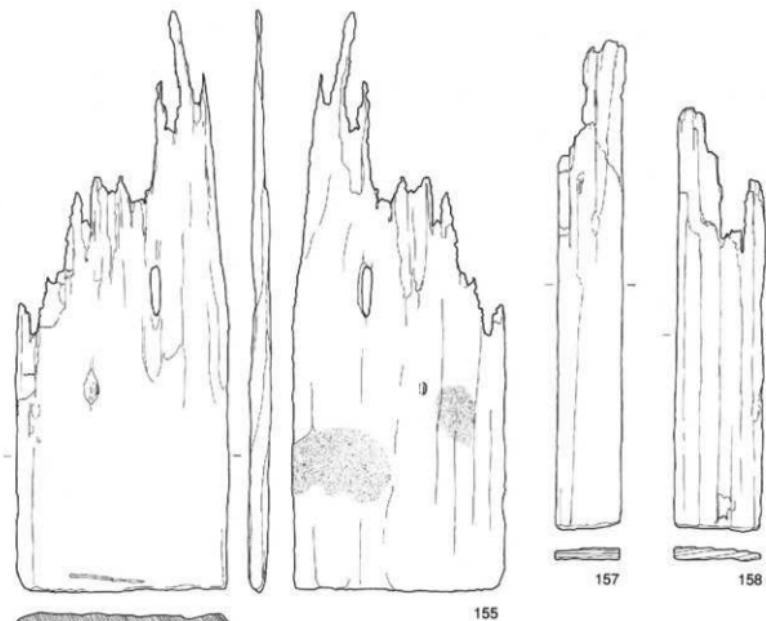


154



(S = 1/3) 0 15cm  
 (S = 1/5) 0 25cm

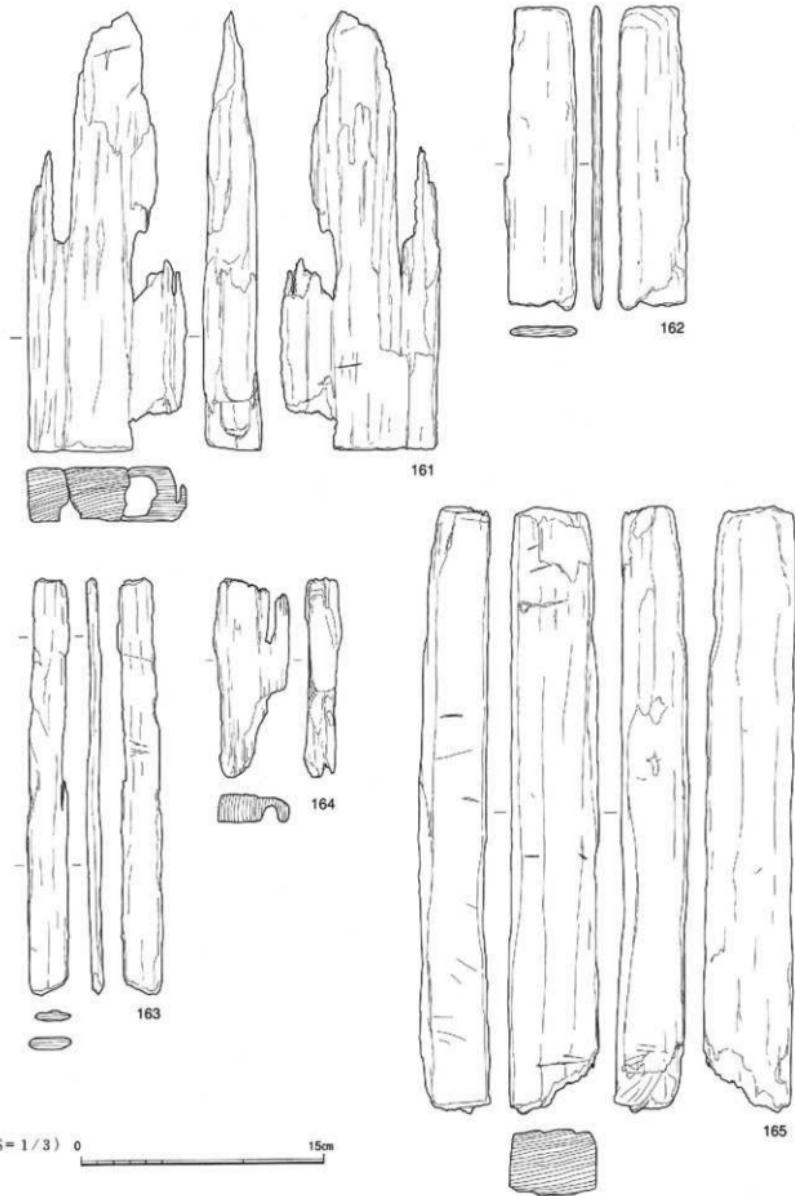
第33図 遺物実測図(12) (151・152はS=1/5、153・154はS=1/3)



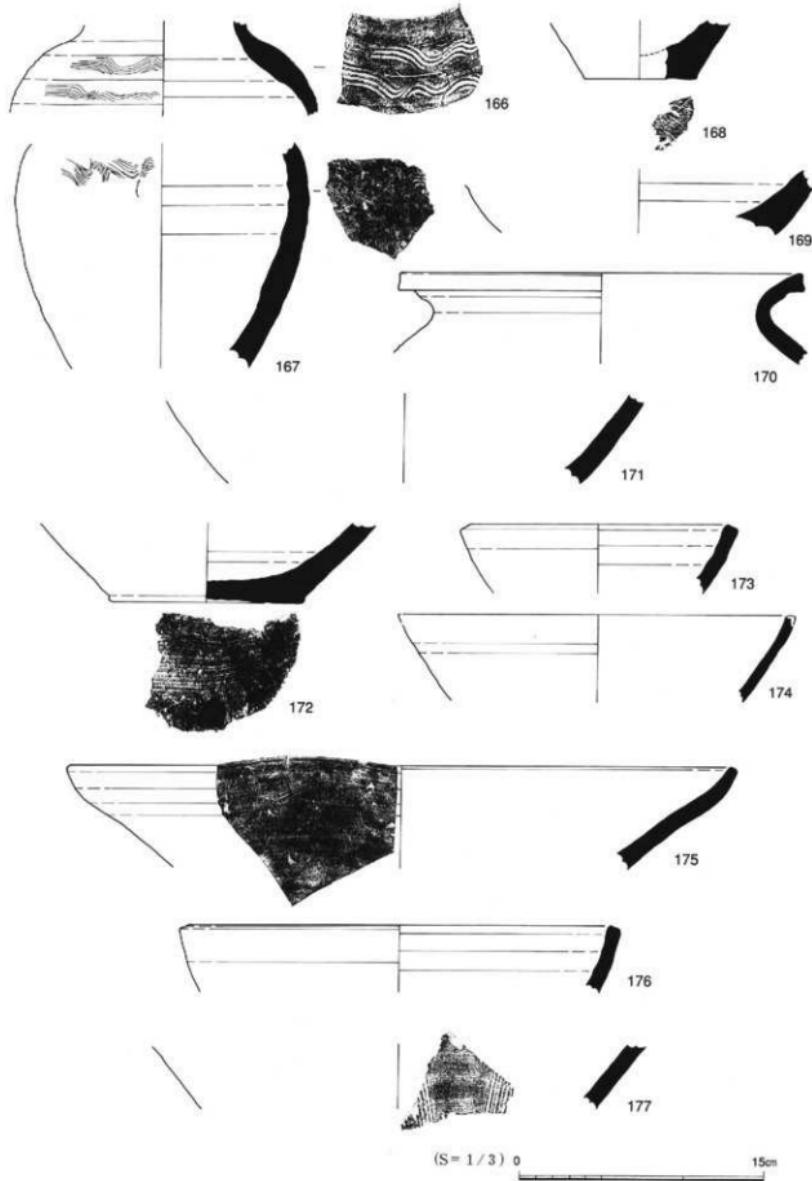
(S = 1 / 3) 0 15cm

(S = 1 / 5) 0 25cm

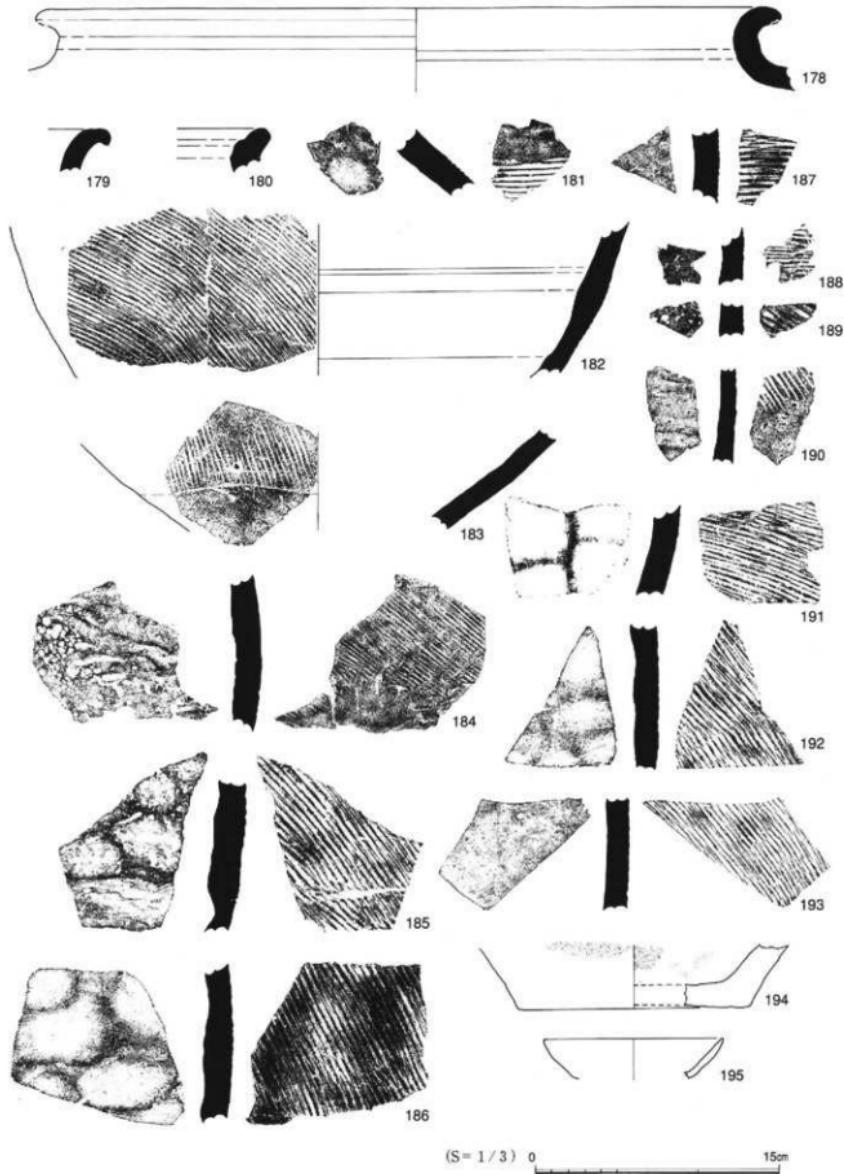
第34図 遺物実測図(13) (S = 1 / 3、 155のみS = 1 / 5)



第35図 遺物実測図(14) (S = 1/3)



第36図 遺物実測図(15) (S = 1 / 3)



第37図 遺物実測図(16) ( $S = 1/3$ )

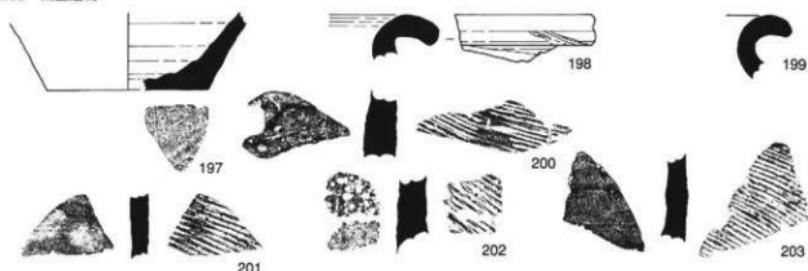
SD02 出土遺物



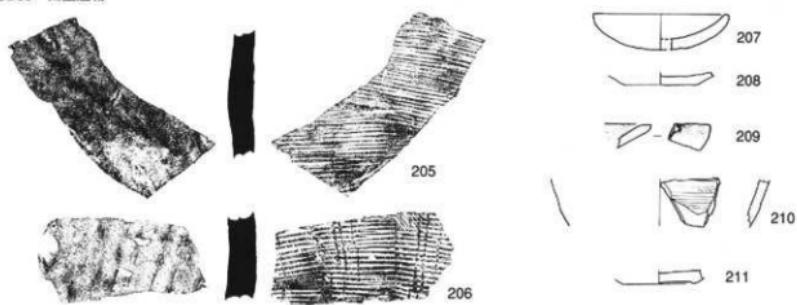
SD04 出土遺物



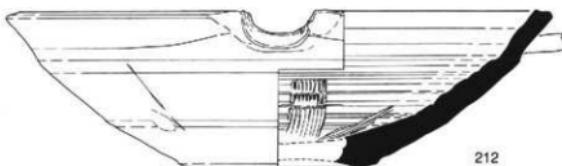
SD03 出土遺物



SD09 出土遺物



SD10 出土遺物



SD19 出土遺物



(S = 1 / 3)

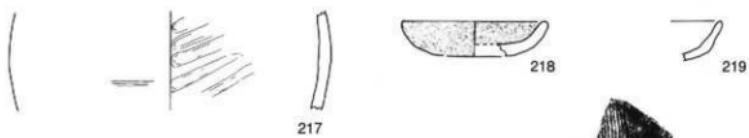


第38図 遺物実測図(17) (S = 1 / 3)

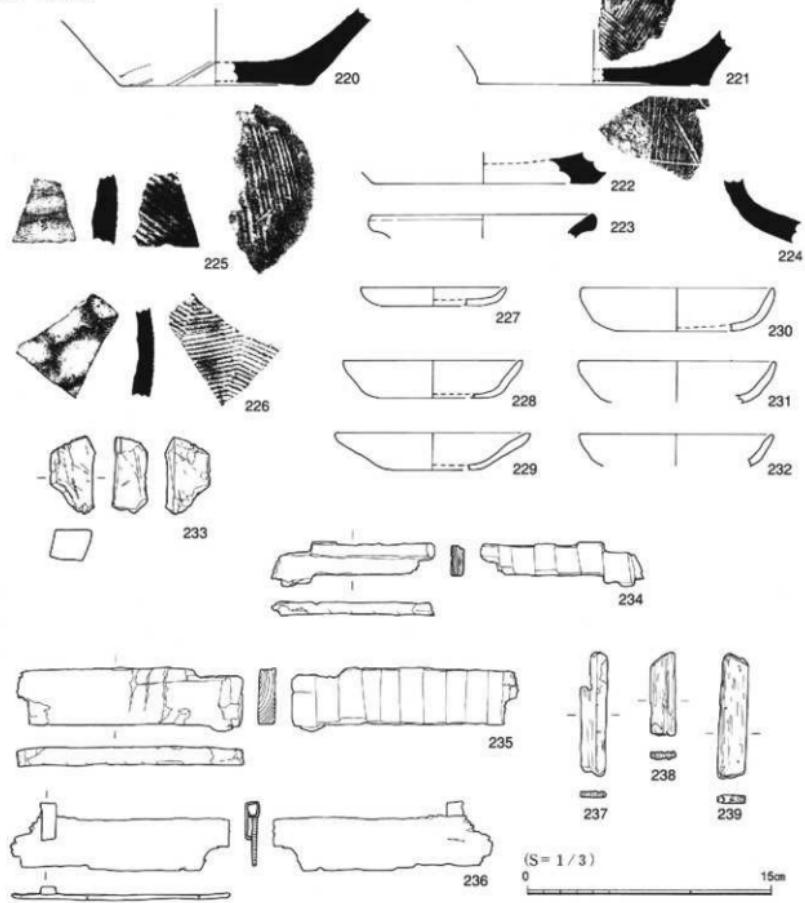
SD30 出土遺物



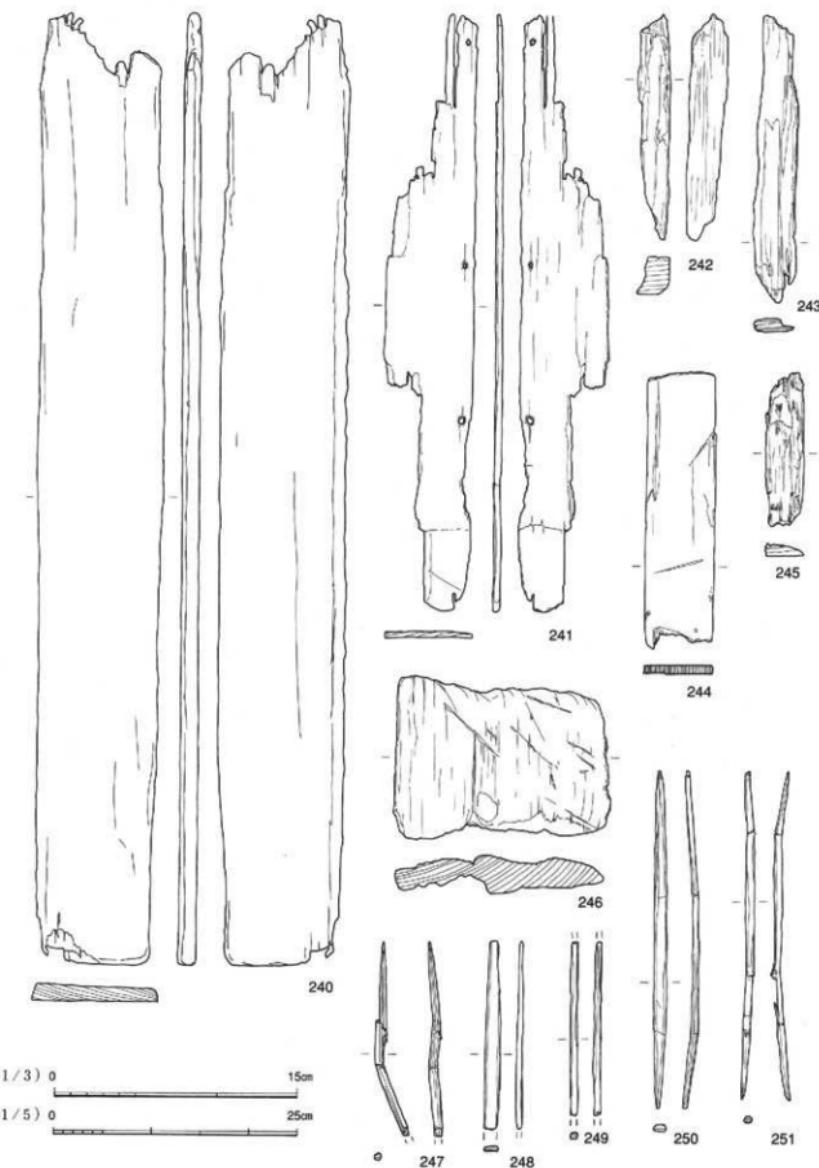
SD31 出土遺物



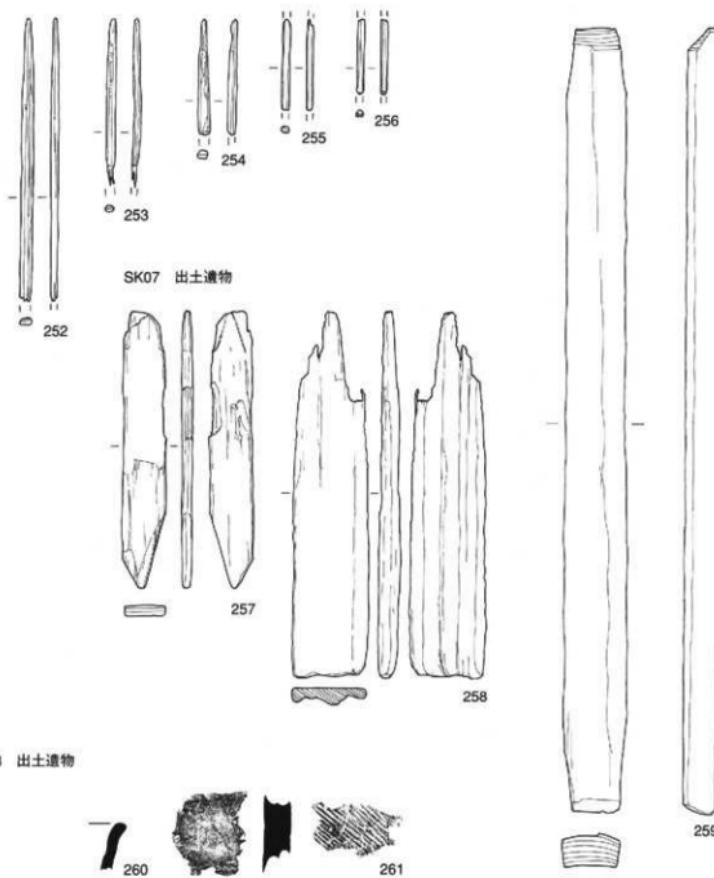
SK02 出土遺物



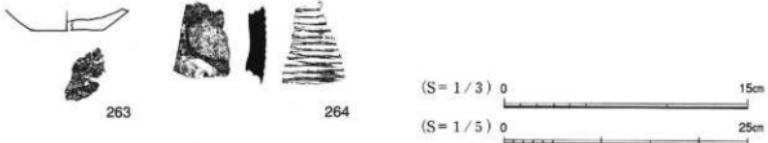
第39図 遺物実測図(18) ( $S = 1/3$ )



第40図 遺物実測図(19) (240・241は $S = 1/5$ 、242～251は $S = 1/3$ )

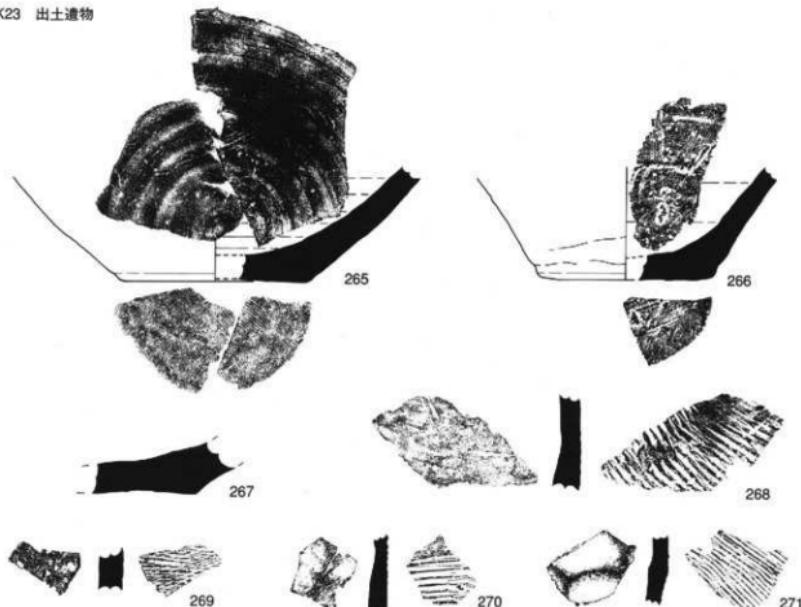


SK12 出土遺物

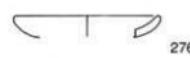


第41図 遺物実測図(20) (S = 1 / 3、258・259はS = 1 / 5)

SK23 出土遺物



SK25 出土遺物



SK33 出土遺物



SK41 出土遺物



SK49 出土遺物



SP67 出土遺物



SP131 出土遺物



SP133 出土遺物



SP217 出土遺物



(S = 1 / 3) 0 15cm

第42図 遺物実測図(21) (S = 1 / 3)

SP220 出土遺物



SP353 出土遺物



286

SP324 出土遺物



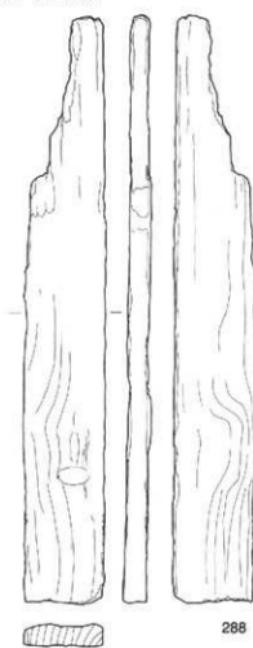
285

SP358 出土遺物



287

SX01 出土遺物



288

SX02 出土遺物



290



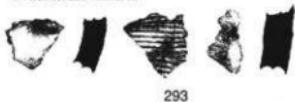
291

SX05 出土遺物



292

I 地区東壁出土遺物



293

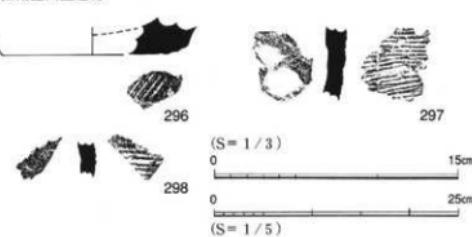
I 地区西壁出土遺物



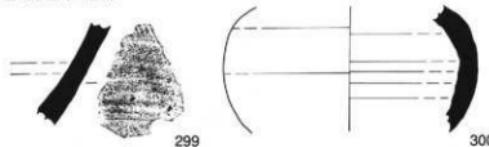
294

295

I 地区南壁出土遺物



II 地区南壁出土遺物



299

300

II 地区北壁出土遺物



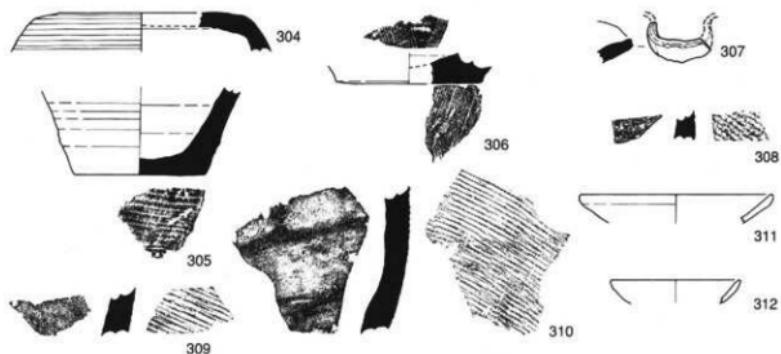
301

第43図 遺物実測図(22) (S = 1 / 3、288のみS = 1 / 5)

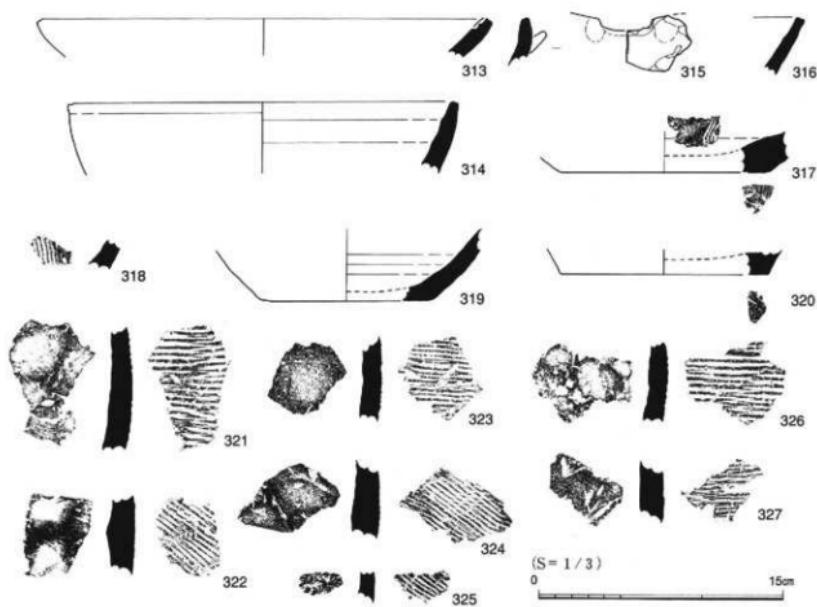
I 地区旧耕作土层出土遗物



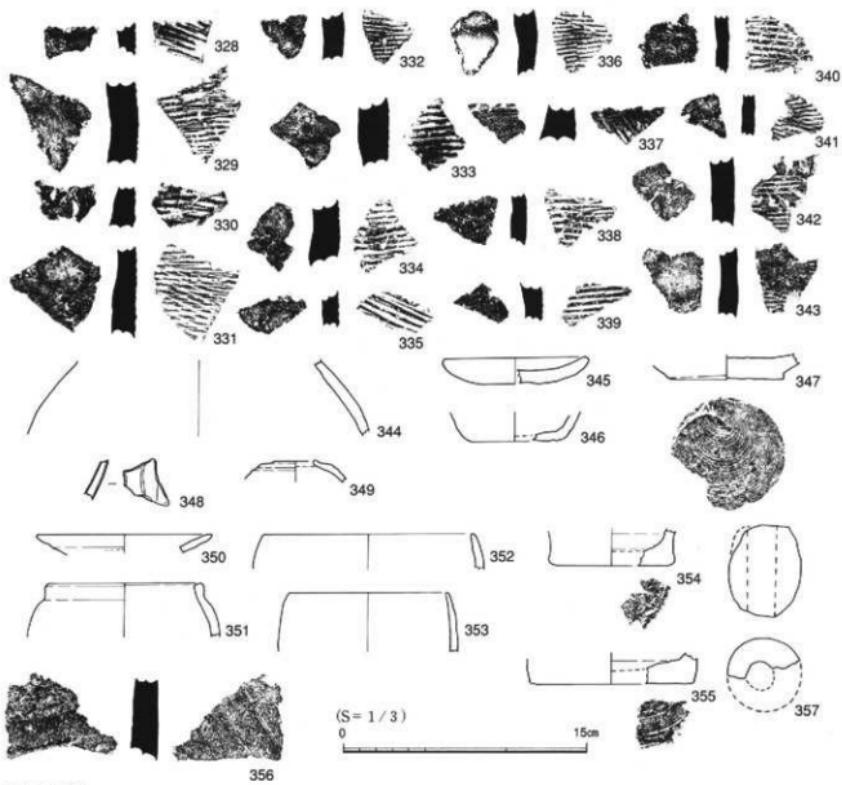
II 地区包含层出土遗物



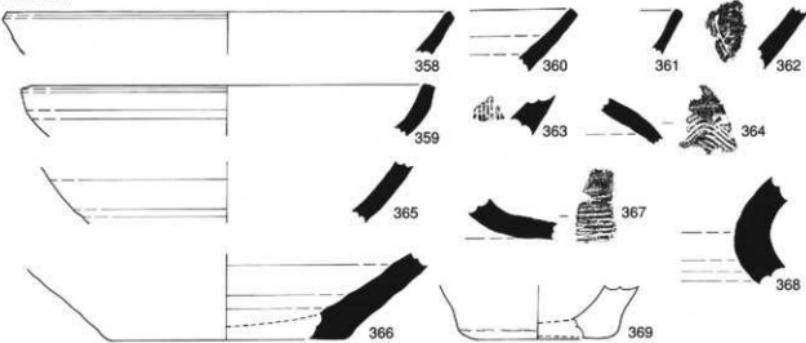
III 地区包含层出土遗物



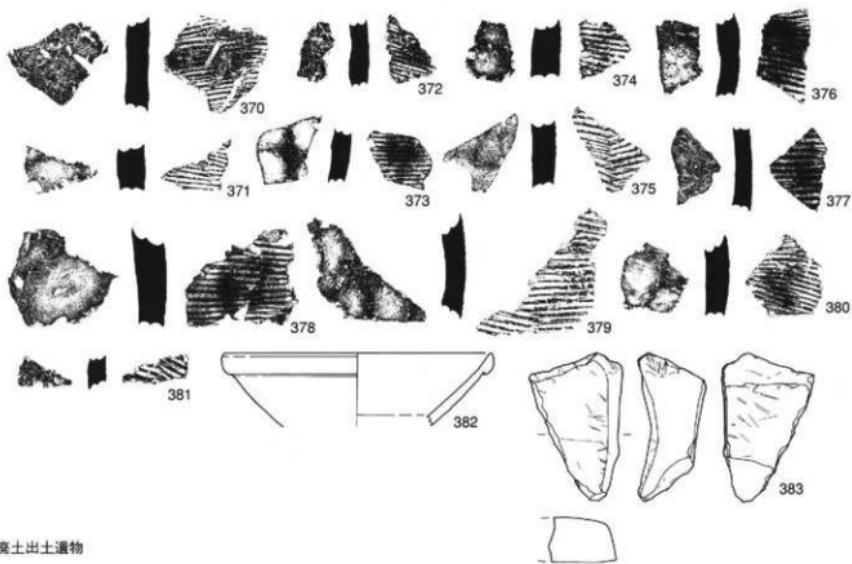
第44図 遺物実測図(23) (S = 1 / 3)



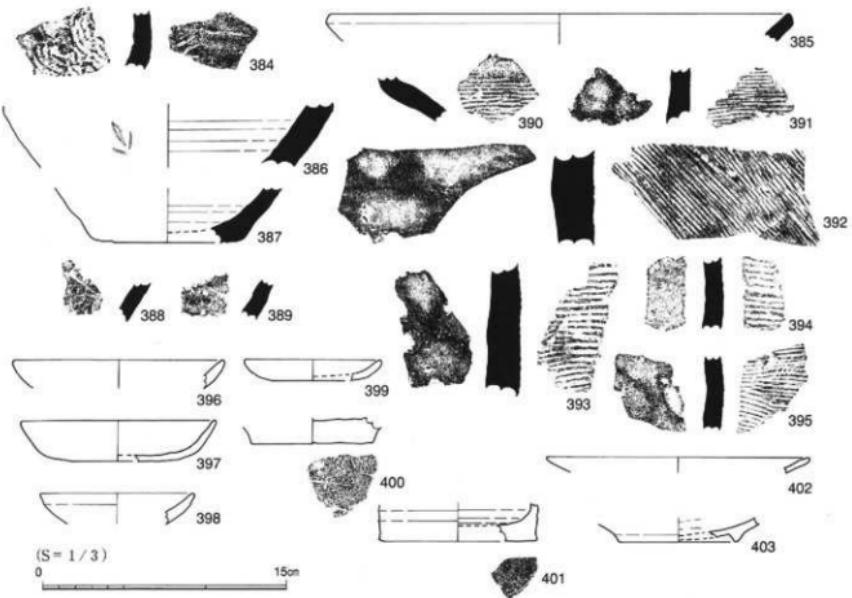
黄土出土遺物



第45図 遺物実測図(24) (S = 1 / 3)



廃土出土遺物



第46図 遺物実測図(25) (S = 1 / 3)

## 付章 樹種同定報告

元興寺文化財研究所

### 1. 試料

No 1 (井戸枠 (本体・別部材))、No 2 ~ 5 (井戸枠)、No 30 (漆椀)

\*なお上記Noは木製品の整理Noである。本報告書記載の遺物Noとの対応は以下のとおり

No 1 : 136、No 2 : 138、No 3 : 139、No 4 : 140、No 5 : 137、No 30 : 62

### 2. 同定方法

樹種同定に必要な木口面(横断面)、板目面(接線断面)、柾目面(放射断面)の3断面の切片をカミソリを用いて作製し、サフランで染色後、水分をエチルアルコール、n-ブチルアルコール、キシレンに順次置換した。その後、非水溶性封入剤を用いて永久プレパラートを作製し、光学顕微鏡で観察した。

顕微鏡写真は、木口面-30倍、柾目面-広葉樹100倍、針葉樹200倍、板口面-50倍で撮影した。

### 3. 同定結果

各試料の木材組織は顕微鏡写真のとおりである(図版28・29)。以下に樹種同定結果とその特徴となる木材組織の特徴について記す。樹木分類および植生分布は『原色日本植物図鑑木本編』(I)・(II)に従った。同定は井上美和子・木沢直子(財)元興寺文化財研究所が行った。

No 1 ~ 5 スギ *Cryptomeria Japonica* D.Don ひのき科(Cupressaceae)スギ属(Cryptomeria)

No 1 については井戸側部材と枘孔にはめ込まれていた別部材についてそれぞれ同定を行った。No 1 (本体・別部材)、No 2 ~ 5 いずれも仮造管と放射系細胞、樹脂細胞からなる針葉樹材。水平樹脂道、垂直樹脂道はない。早材から晚材への移行は急で、晚材部の幅は比較的広い。樹脂細胞は早材から晚材に散在する。分野壁孔はスギ型で1分野に1~2個見られる。放射組織は1~10数細胞高である。

分布:暖帯、温帯下部:本州、四国、九州、主として太平洋側

樹形:常緑高木で直幹性。樹高30~40m、胸高直径2mに達する

用途:建築、家具、桶、樽、船、土木、下駄、彫刻、楽器

出土事例における器種:建築材、桶、底板、舟・船、下駄、箸

No 30 トチノキ *Aesculus turbinata* Blume A とちのき科(Hippocastanaceae)

直径40~60μmの管孔が単独もしくは放射方向に2~3列複合して年輪間に均一に散在する散孔材である。道管の穿孔は單穿孔で道管要素にラセン肥厚が認められる。放射組織は單列、同性で層階状に配列する。

分布:北海道、本州、四国、九州

樹形:落葉高木で樹高25m、胸高直径2mに達する

用途:建築、器具、楽器、土木、船、櫻轆細工、下駄、経木

出土事例における器種:漆器、下駄、例物、短甲

### 参考文献

島地謙・伊東隆夫「図説木材組織」1982年

平井信二「木の辞典」1979年

北村四郎・村山源「原色日本植物図鑑」木本編 I・II 1979年

島地謙・伊東隆夫「日本の遺跡出土木製品総覧」1988年

「木器集成図鑑」近畿原始編 奈良国立文化財研究所 1993年

伊東隆夫・藤井智之・佐伯清監修「広葉樹林の識別」IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト 1998年

# 写 真 図 版



図版1 遺跡周辺空中写真（1947年米軍撮影） 国土地理院

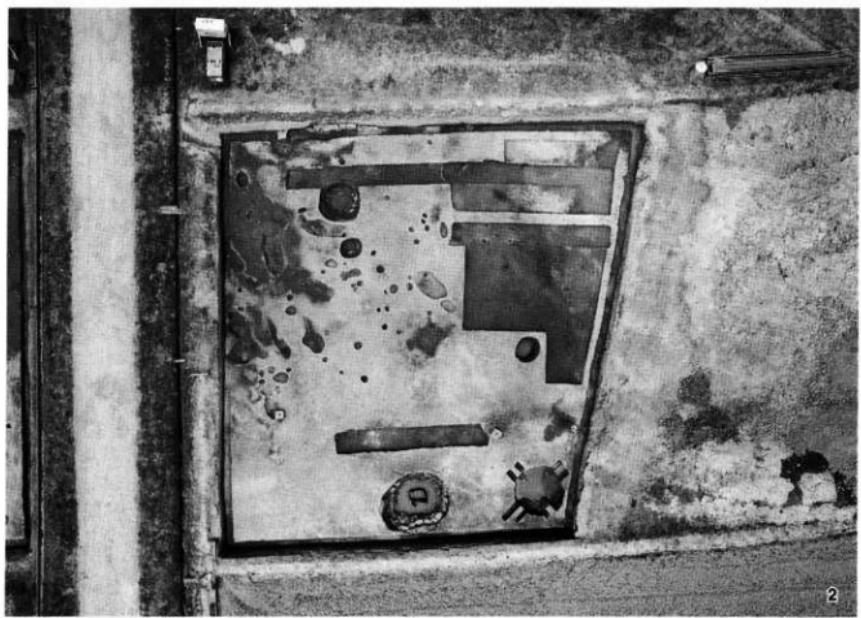
この写真は、国土地理院長の承認を得て、米軍撮影の空中写真を複製したものである。  
(承認番号) 平17 北復、第253号



図版2 遺跡周辺空中写真(1963年撮影) 国土地理院  
この写真は、国土地理院長の承認を得て、同院撮影の空中写真を複製したものである。  
(承認番号) 平17 北複、第253号

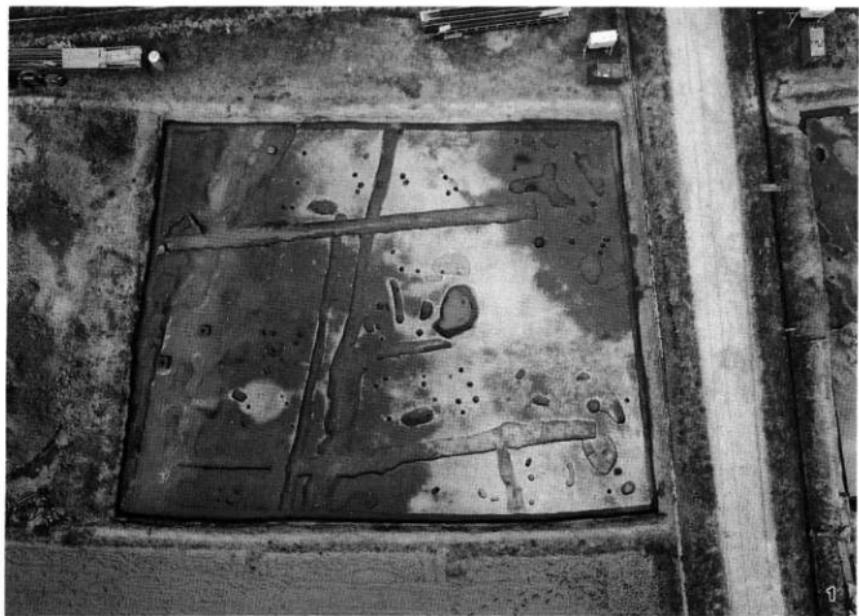


1



2

図版3 1. 調査区近景(東から) 2. I地区全景

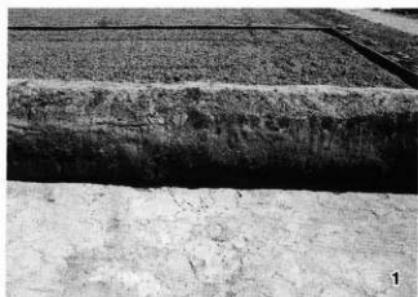


1



2

図版4 1. II地区全景 2. III地区全景



1



2



3



4



5



6



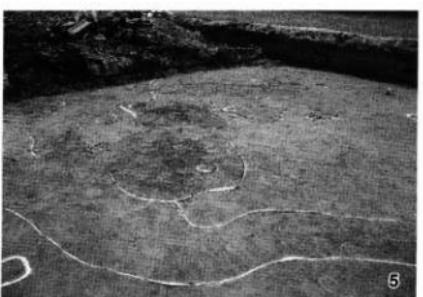
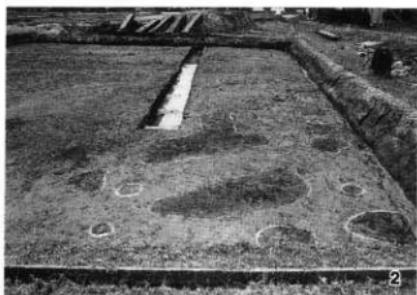
7



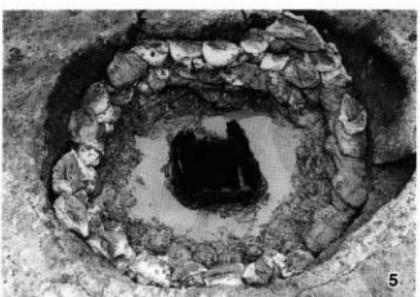
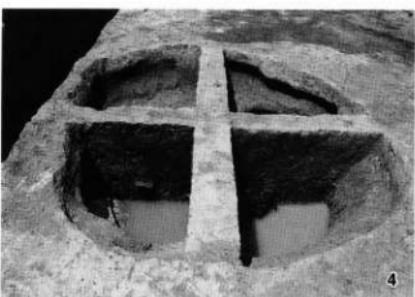
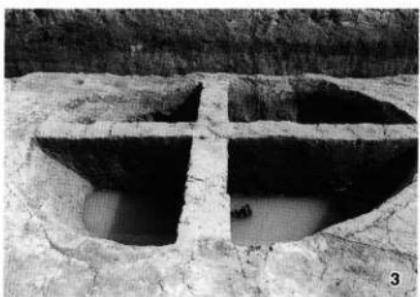
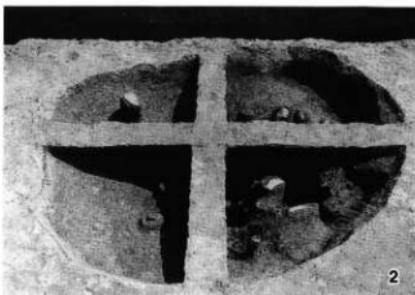
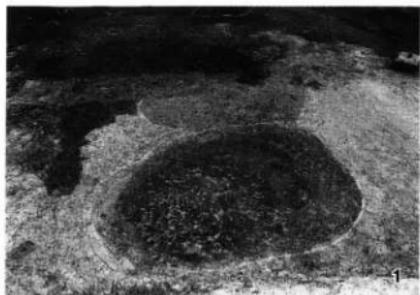
8

図版5 1・2. I地区土層断面(北から) 3. II地区土層断面(北から)

4. III地区土層断面(北から) 5・6. I地区遺構検出状況 7・8. I地区遺構完掘状況



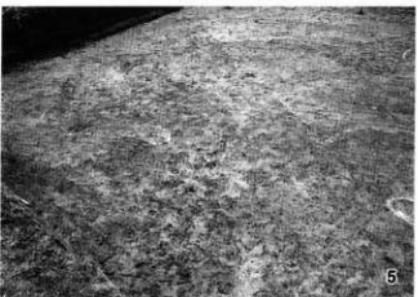
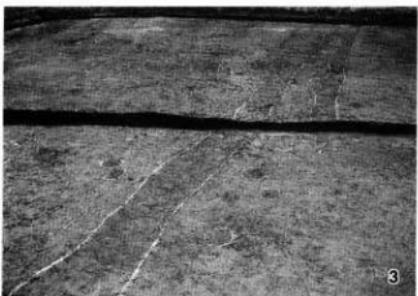
図版 6 1・2. II 地区遺構検出状況 3・4. II 地区遺構完掘状況 5・6. III 地区遺構検出状況  
7・8. III 地区遺構完掘状況



図版7 1. SE01検出状況(南から) 2. SE01上層遺物出土状況 3. SE01土層断面(北から)  
4. SE01土層断面(東から) 5. SE01完掘状況(北から) 6. SE01井戸側(北西から)  
7. SE01井戸側内 8. SE01井戸側(北から)



図版 8 1. SK02検出状況(南西から) 2. SK02板材出土状況 3. SK02土層断面(北東から)  
4. SK02土層断面(北西から) 5. SK02完掘状況(西から) 6. SK07検出状況(北西から)  
7. SK07土層断面(北から) 8. SK07完掘状況(北から)



図版9 1. SD01検出状況(北東から) 2. SD01完掘状況(北から) 3. SD02・03検出状況(北から)  
4. SD02・03完掘状況(南から) 5. SD09・10・11検出状況(南西から) 6. SD09・10・11  
完掘状況(北東から) 7. SD10遺物出土状況(北西から) 8. SD28完掘状況(北東から)



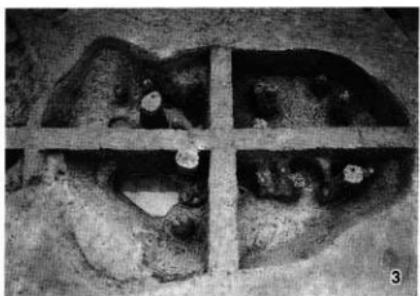
図版10 1. SD31検出状況(南西から) 2. SD31完掘状況(南西から) 3. SD25・26土層断面(西から)  
4. SK12土層断面(南から) 5. SK03検出状況(北から) 6. SK03完掘状況(北から)  
7. SK18・19検出状況(東から) 8. SK18・19完掘状況(東から)



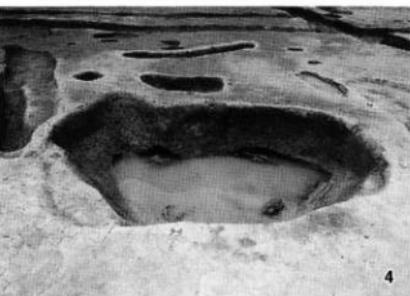
1



2



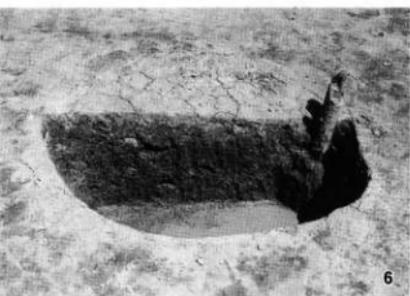
3



4



5



6



7



8

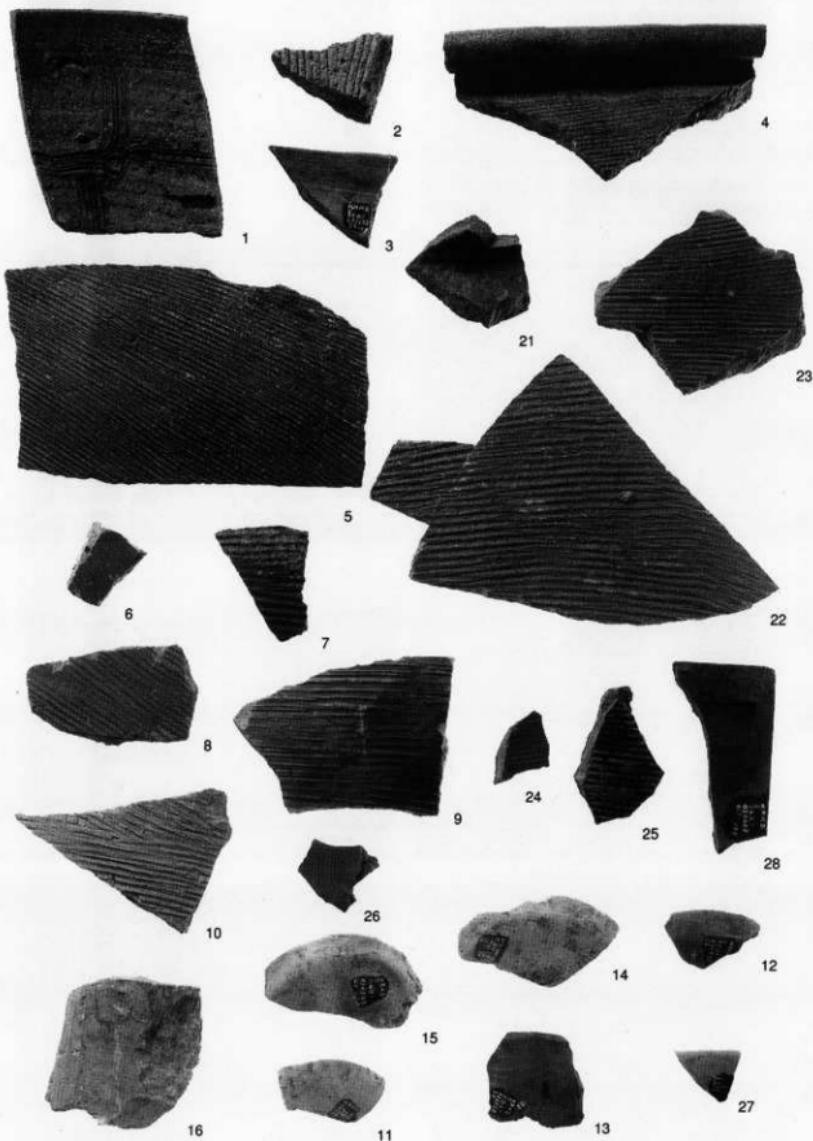
図版11 1. SD04・SK23検出状況(南から) 2. SK23土層断面(東から)

3. SK23遺物出土状況(東から) 4. SK23完掘状況(東から) 5. SK32検出状況(北西から)

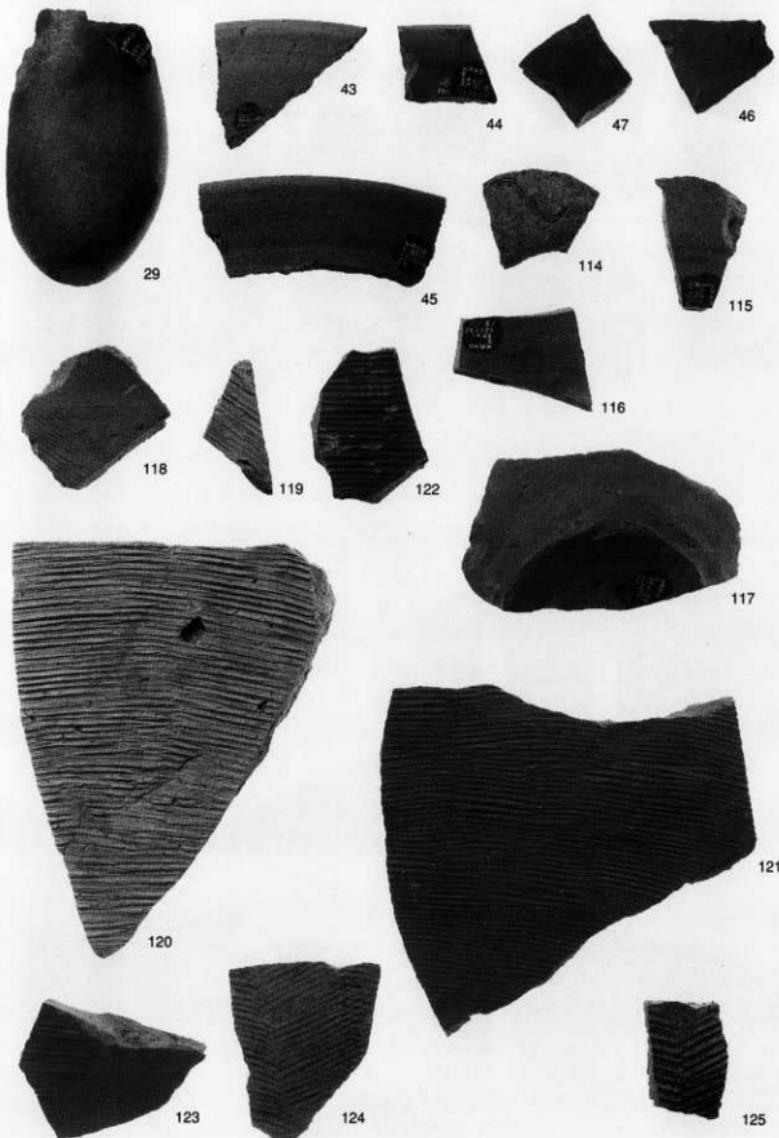
6. SK32土層断面(北西から) 7. SK46土層断面(北東から) 8. SX02土層断面(東から)



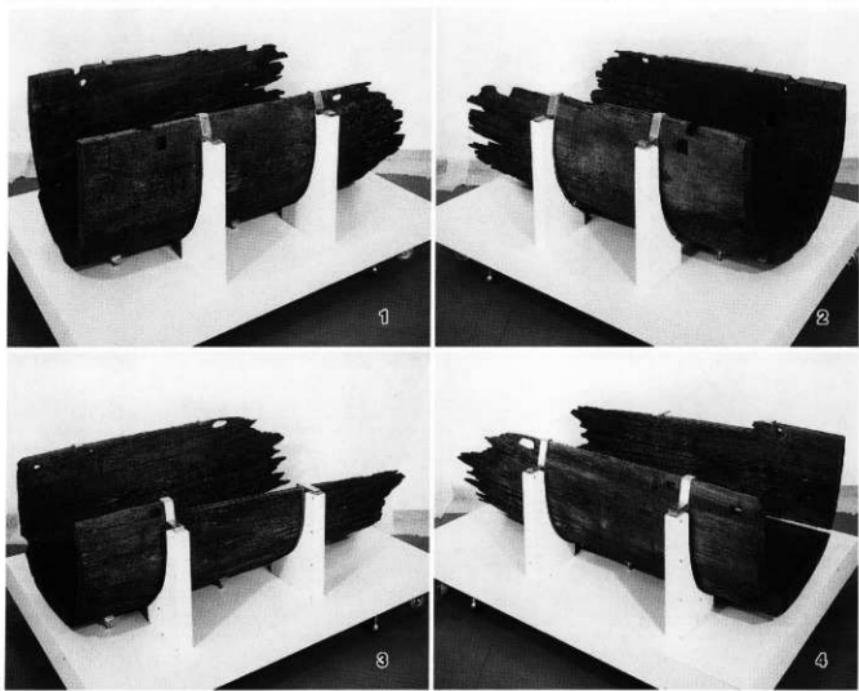
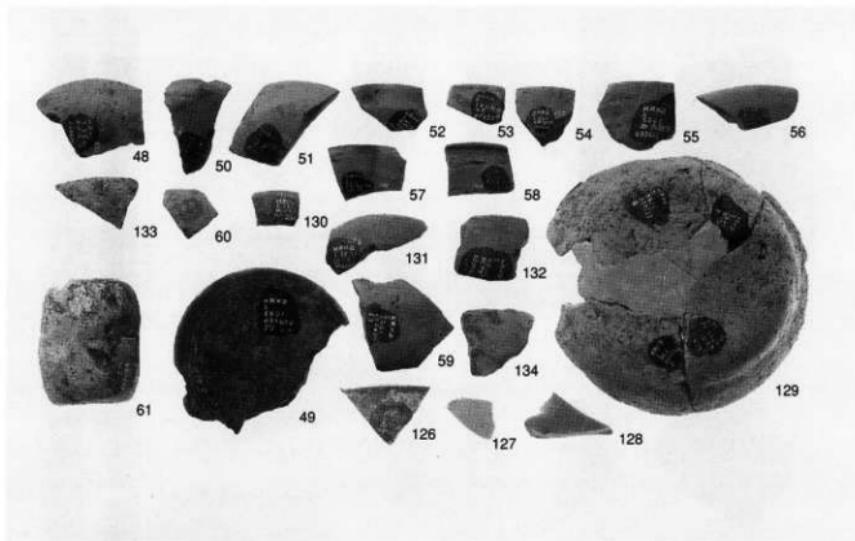
図版12 1. SX01検出状況(北東から) 2. SX01土層断面(東から) 3・4. Ⅲ地区柱穴群  
5・6. 作業風景 7・8. SE01井戸側取り上げ作業



図版13 遺物写真（1）



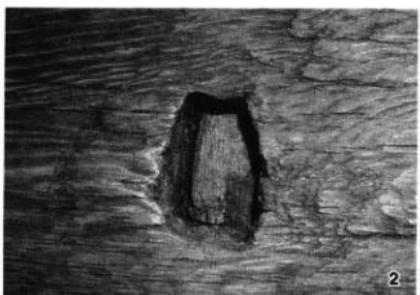
図版14 遺物写真（2）



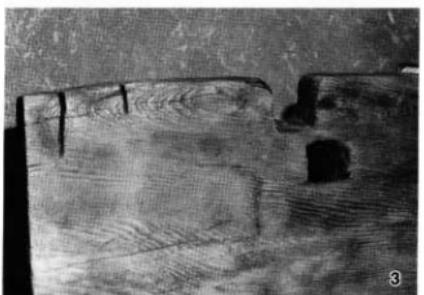
図版15 遺物写真 (3) 中段1・2：丸木舟 (a)  
下段3・4：丸木舟 (b)



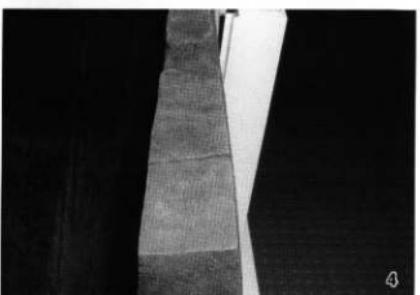
1



2



3



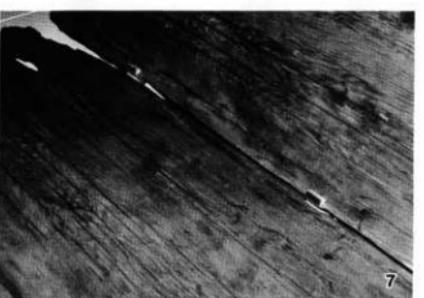
4



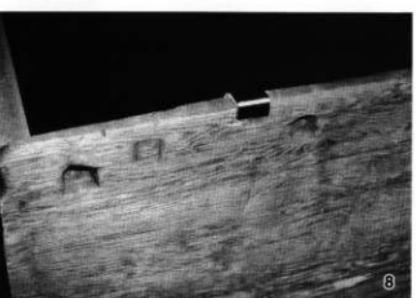
5



6



7



8

図版16 遺物写真 (4)

1. 136側面(外から)

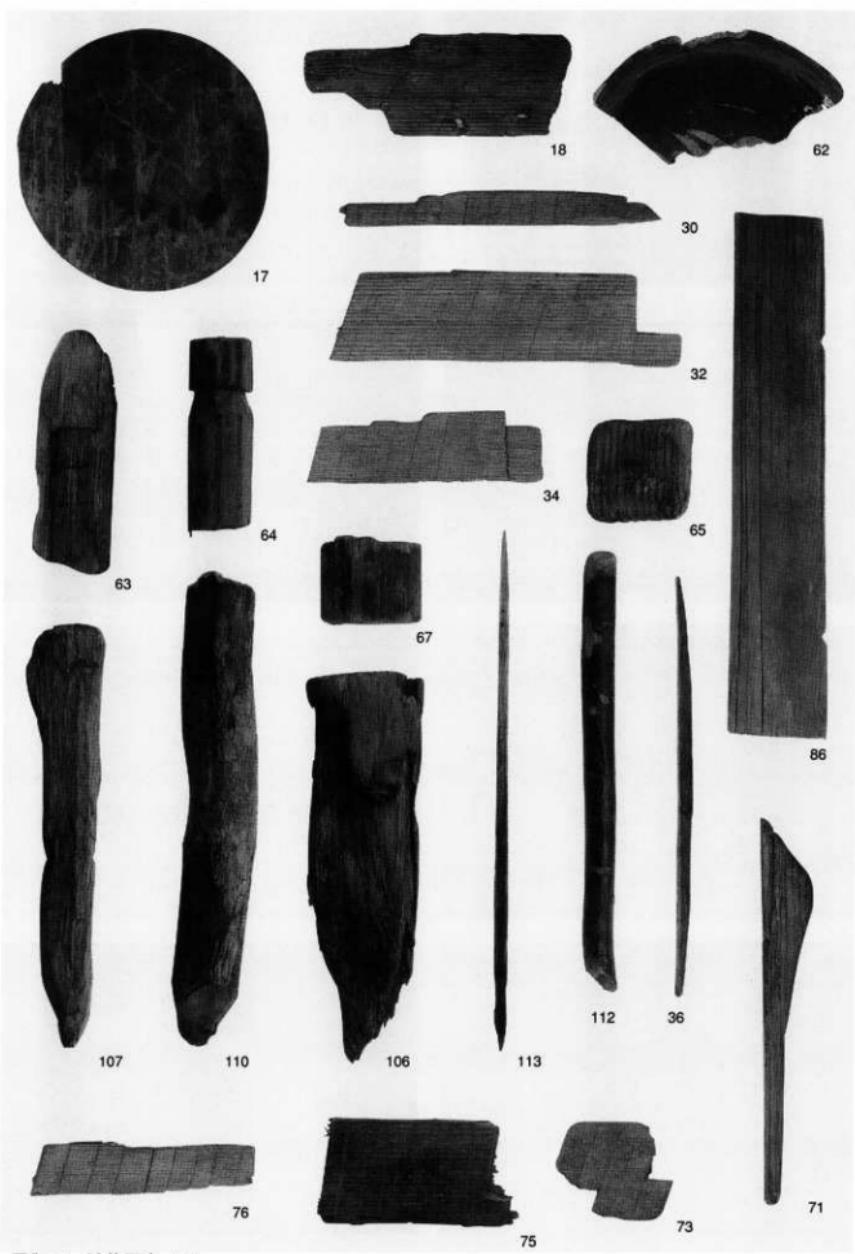
4. 136端部の加工痕

6. 136底外面の食害痕

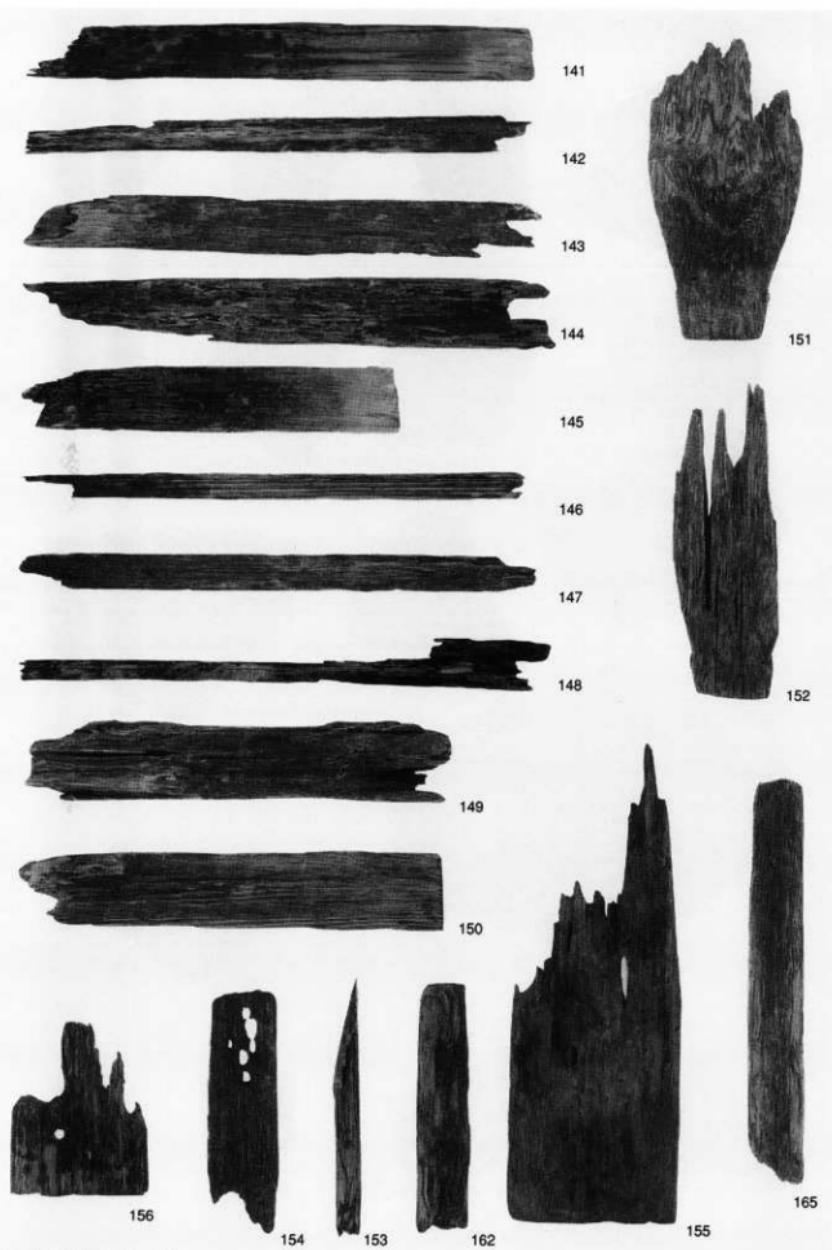
2. 136側面の埋木(内から) 3. 137(内から)

5. 136底内面の埋木と加工痕

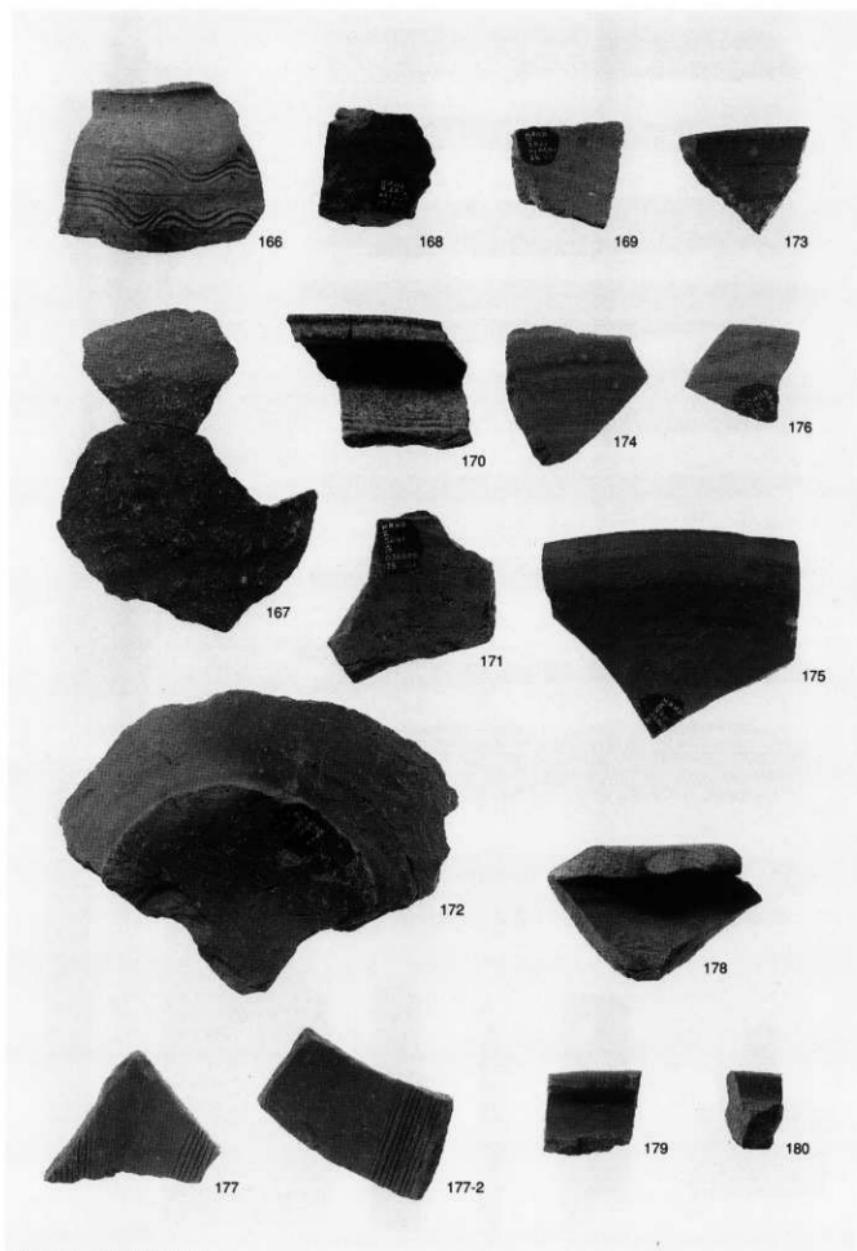
7. 丸木舟(b)内面のカスガイ痕 8. 138(内から)



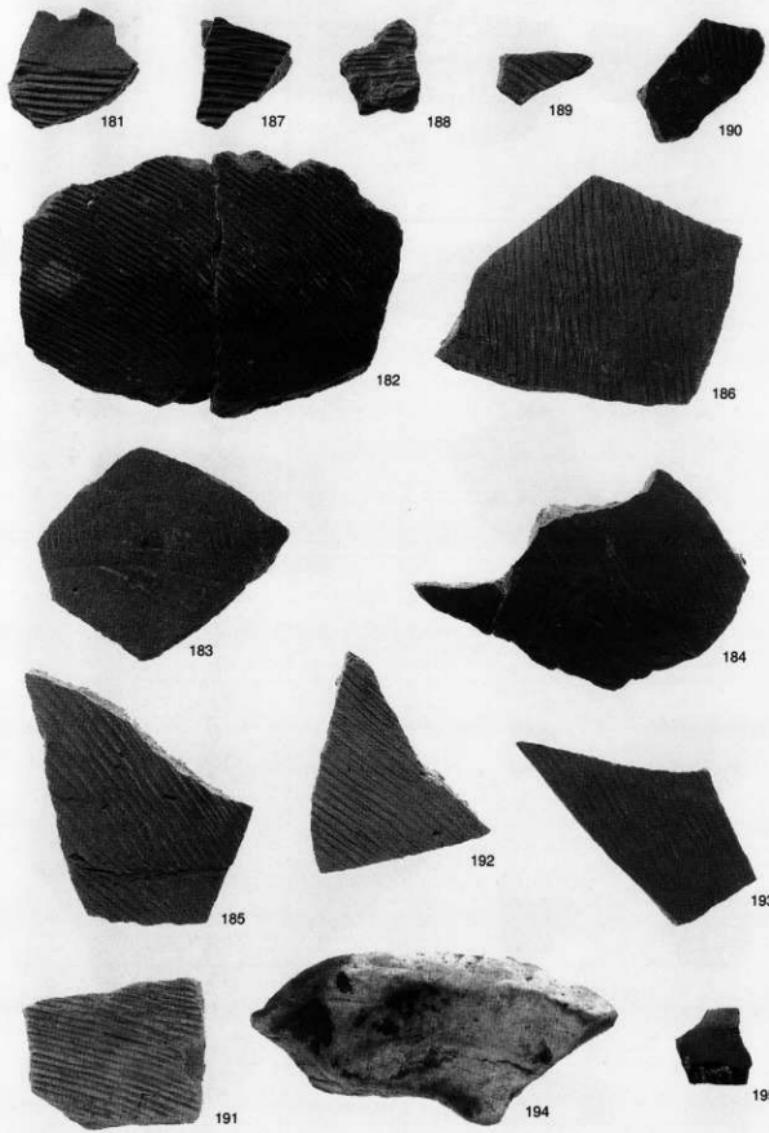
図版17 遺物写真（5）



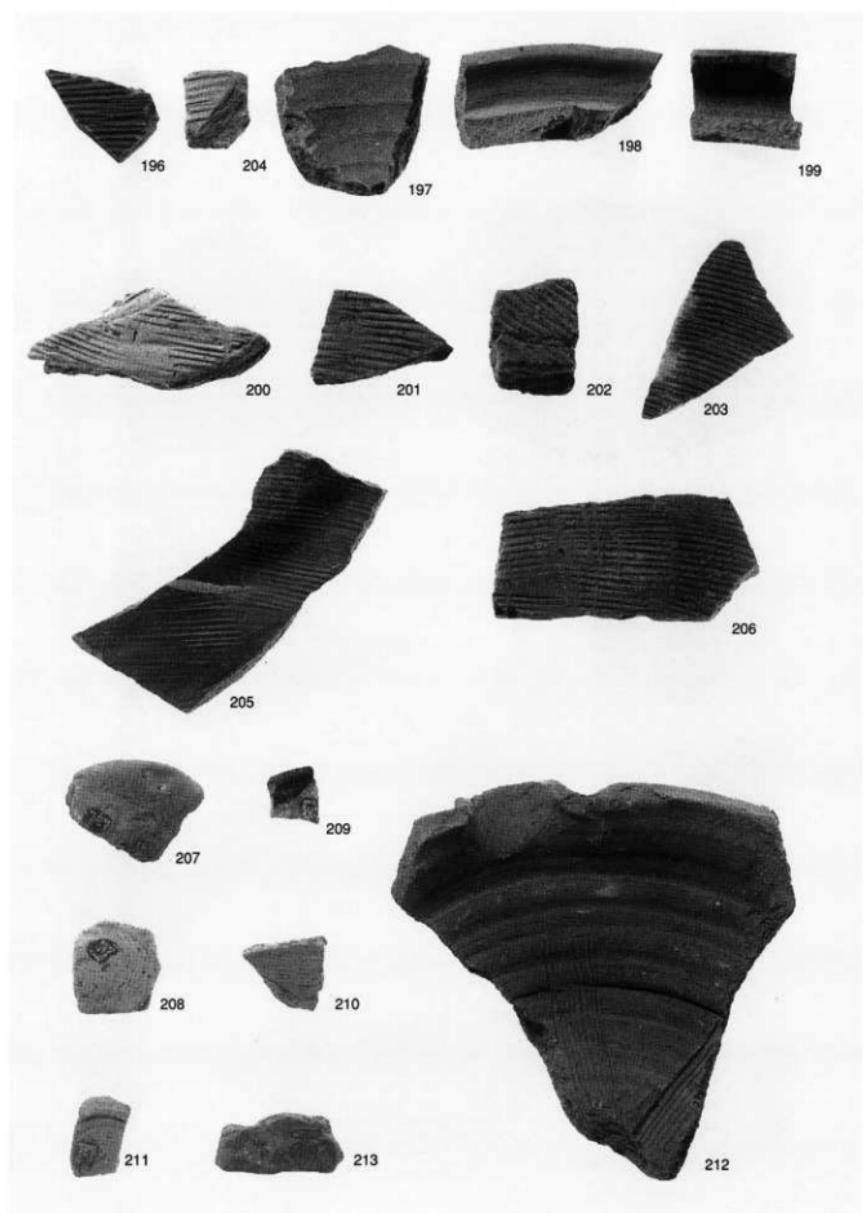
図版18 遺物写真（6）



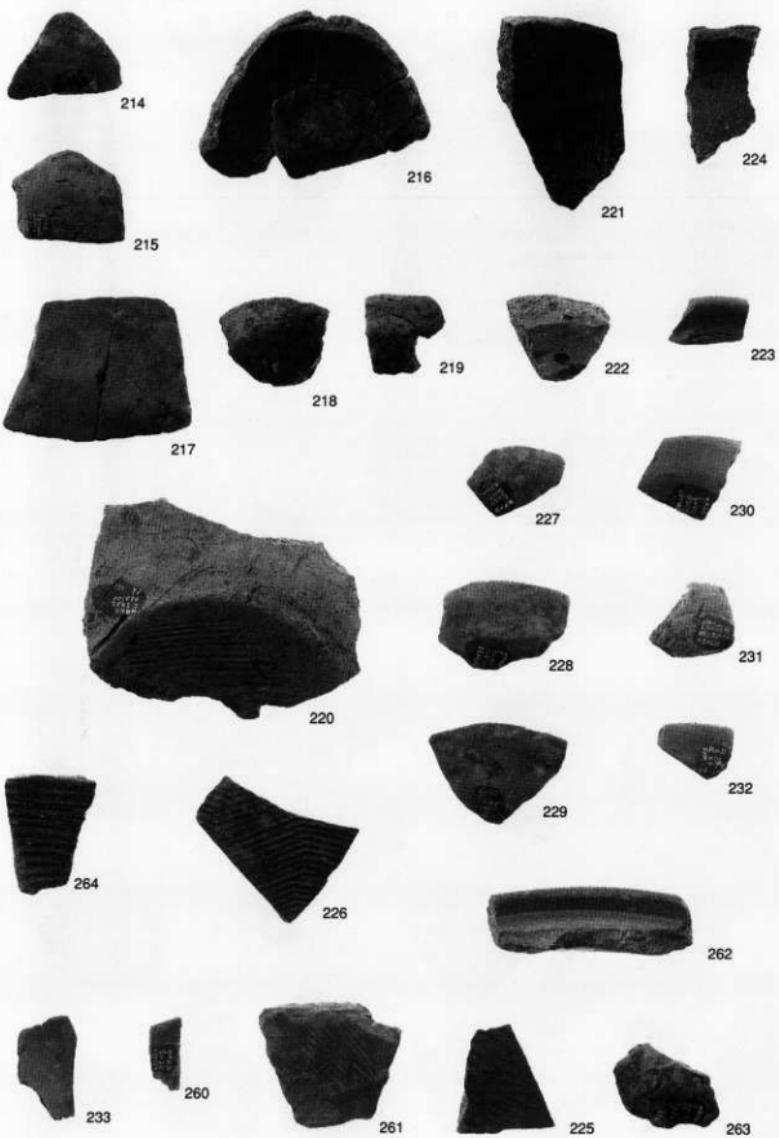
図版19 遺物写真（7）



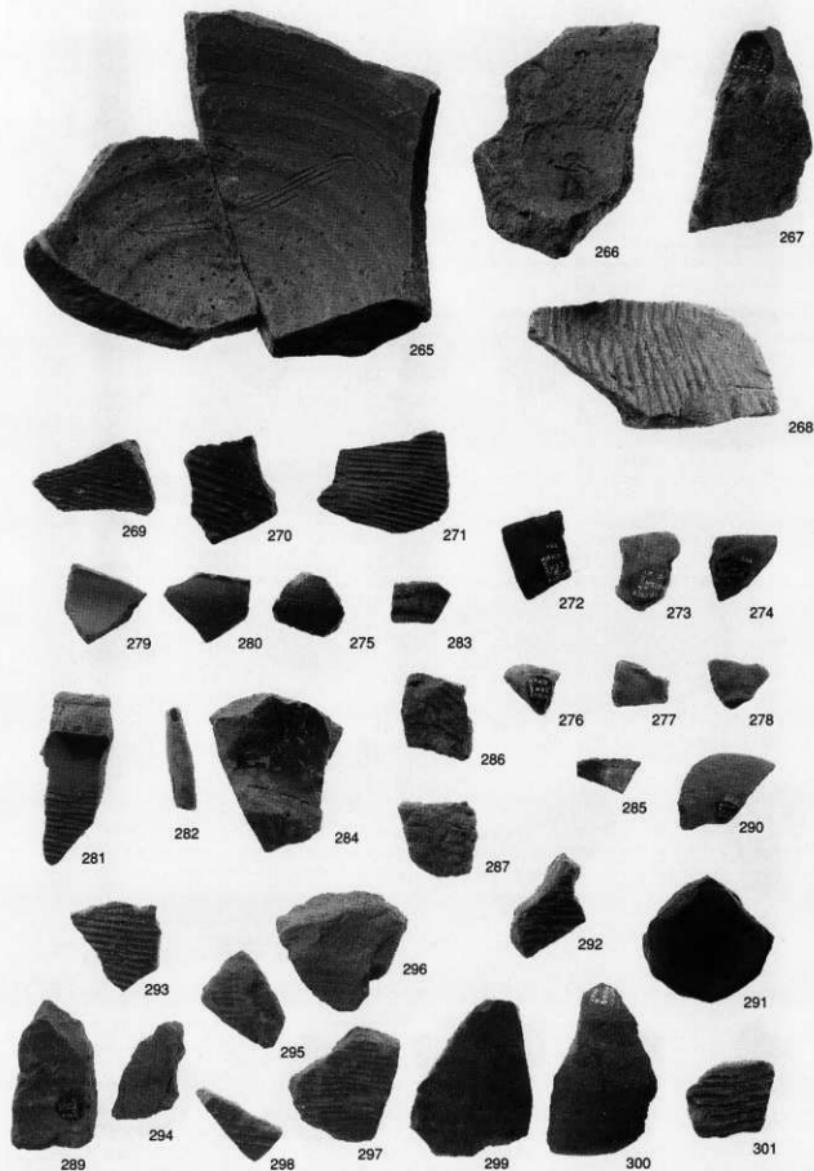
図版20 遺物写真 (8)



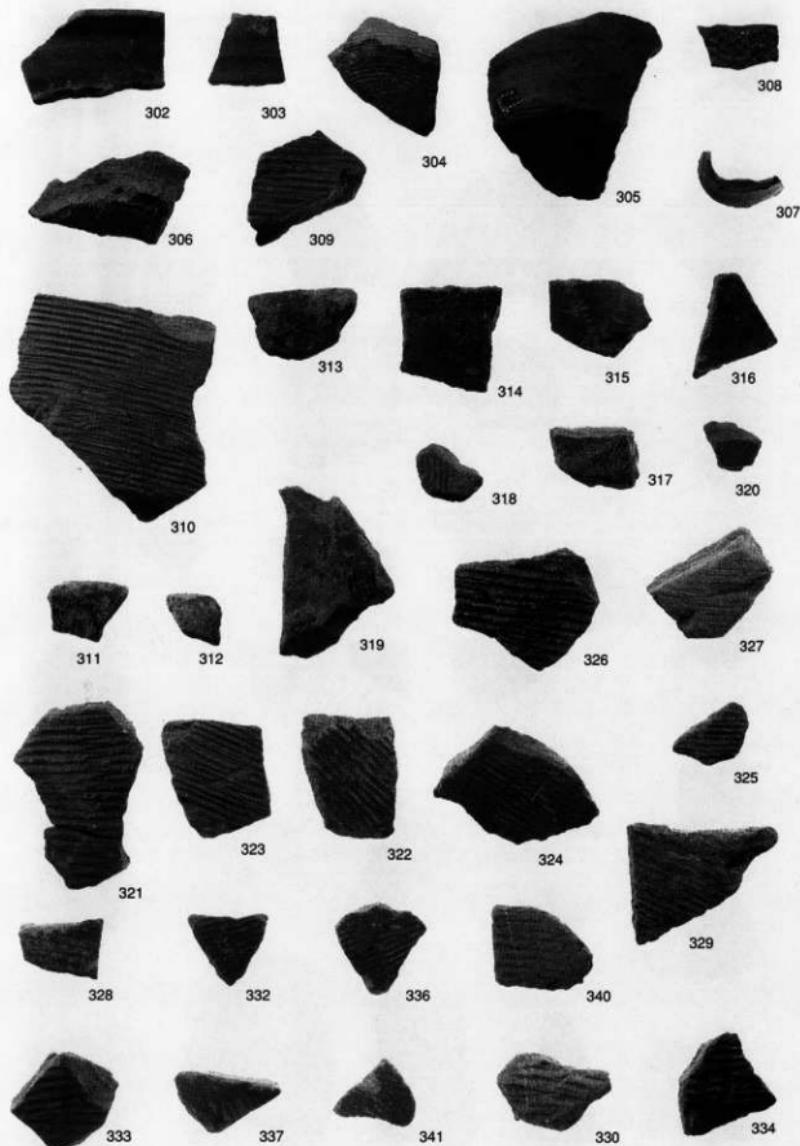
図版21 遺物写真（9）



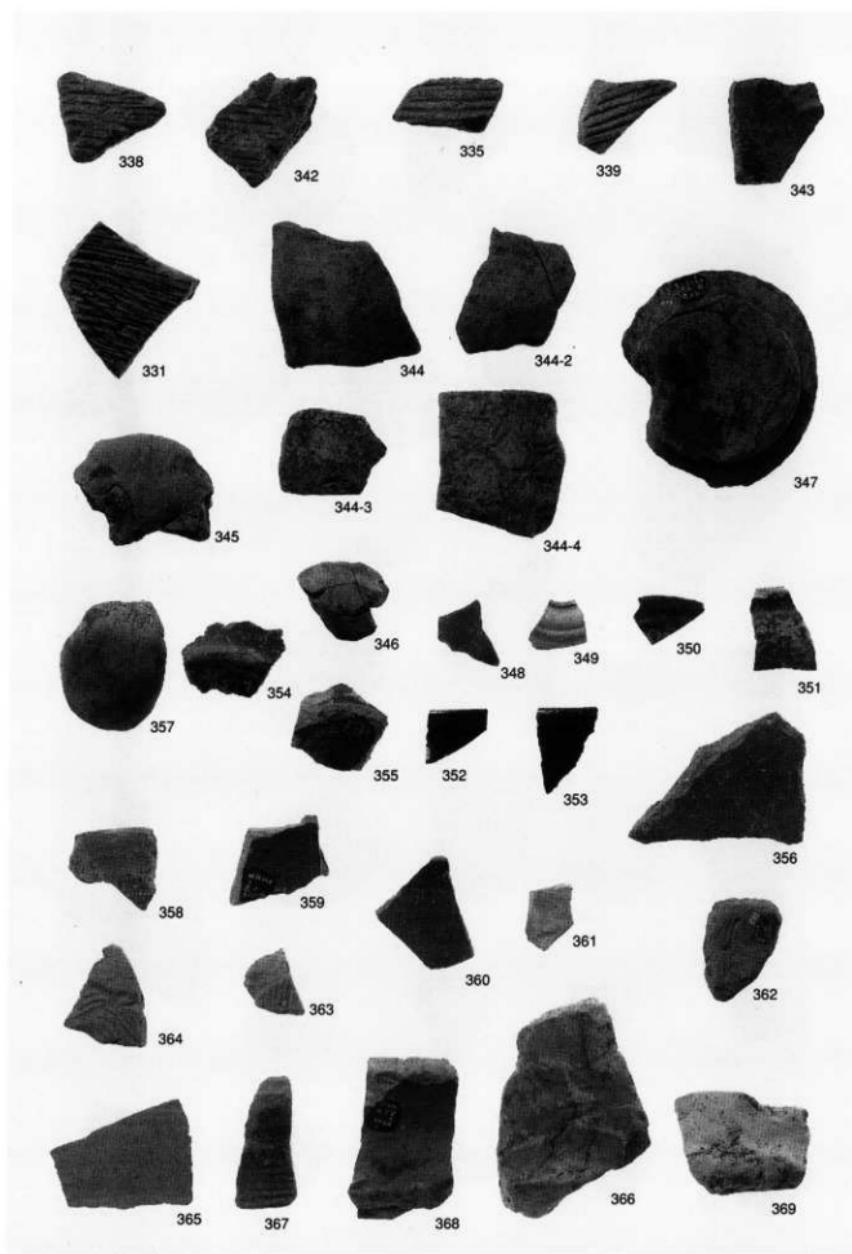
図版22 遺物写真 (10)



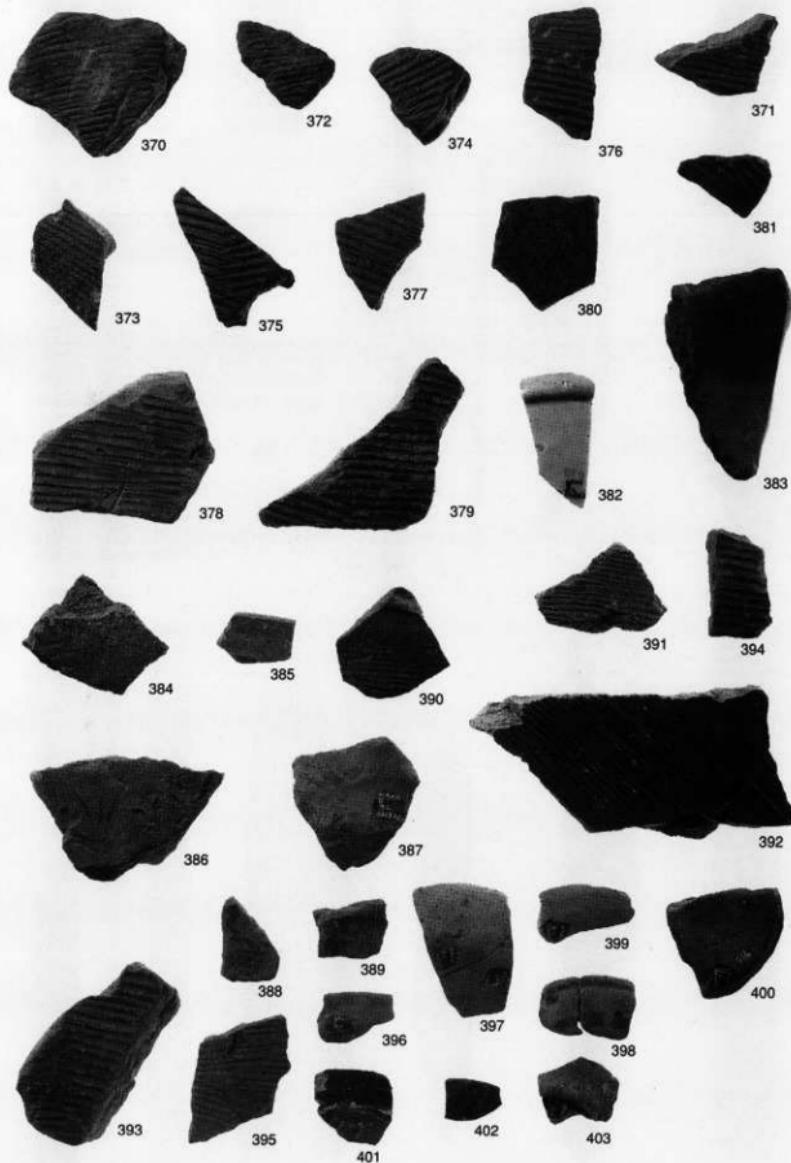
図版23 遺物写真 (11)



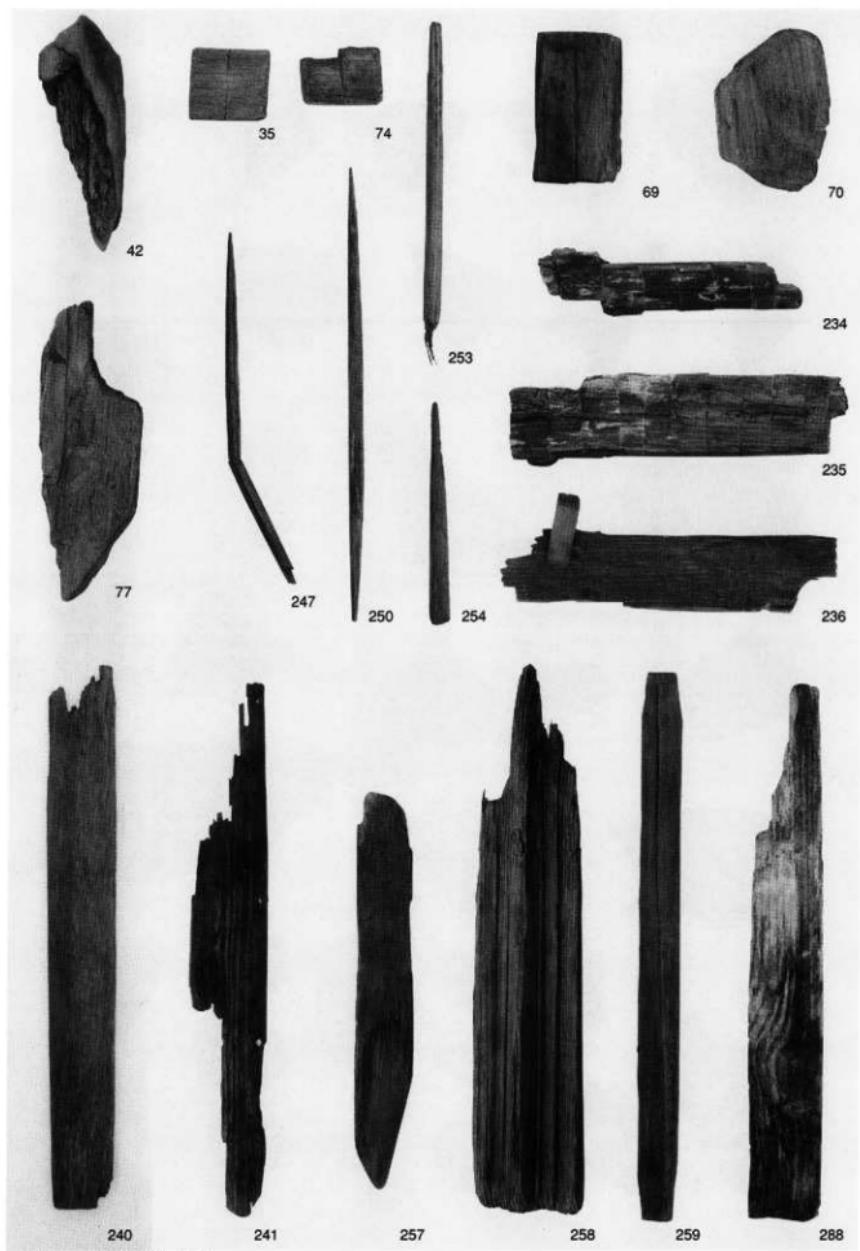
図版24 遺物写真 (12)



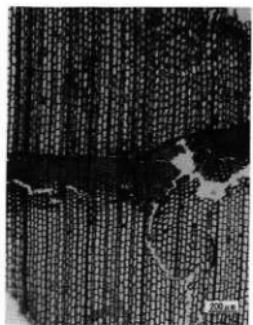
図版25 遺物写真 (13)



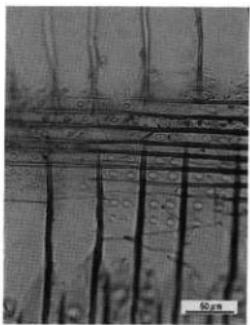
図版26 遺物写真 (14)



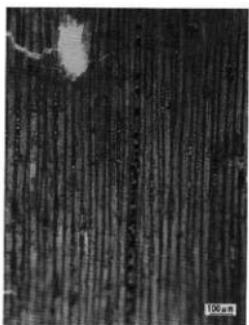
図版27 遺物写真 (15)



木口面

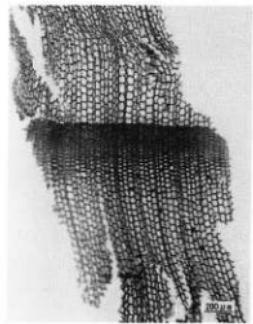


柾目面

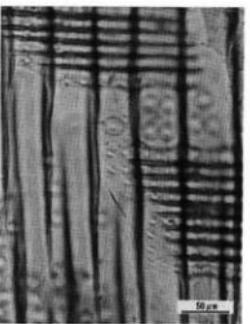


板目面

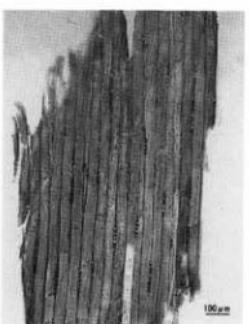
No.1-1 井戸枠（本体） スギ



木口面

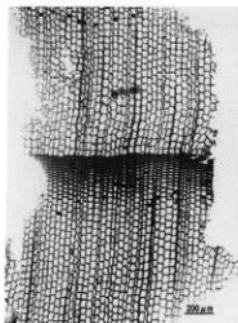


柾目面

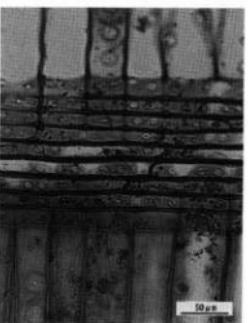


板目面

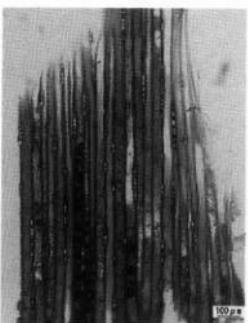
No.1-2 井戸枠（別部材） スギ



木口面



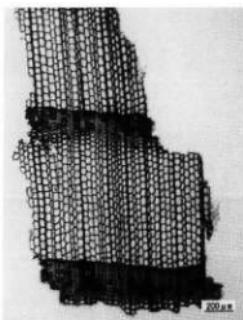
柾目面



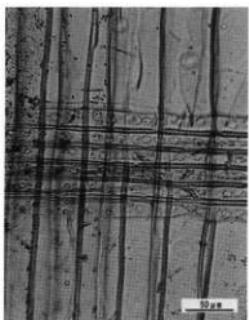
板目面

No.3 井戸枠 スギ

図版28 付章 樹種同定報告 跡微鏡写真(1)



木口面

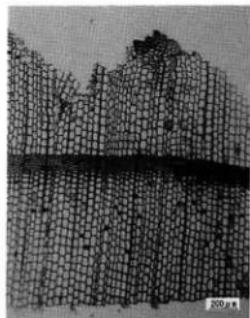


柾目面

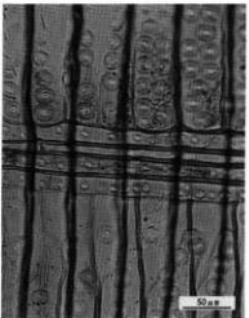


板目面

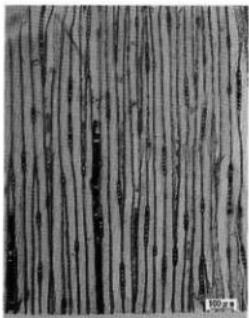
No. 4 井戸枠 スギ



木口面



柾目面

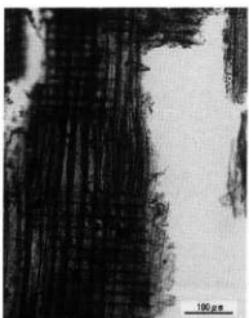


板目面

No. 5 井戸枠 スギ



木口面



柾目面



板目面

No.30 漆椀 トチノキ

## 報告書抄録

ふりがな	くらかわでいーいせき						
書名	鞍川D遺跡						
副書名	鞍川バイパス遺跡群発掘調査報告						
巻次	II						
シリーズ号	水見市埋蔵文化財調査報告						
シリーズ番号	第44冊						
編著者名	廣瀬直樹						
編集機関	水見市教育委員会						
所在地	〒935-0016 富山県水見市本町4番9号 TEL0766(74)8215						
発行年月日	2006年3月30日						
ふりがな 所収遺跡	所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経	調査期間	調査面積	調査原因
鞍川D 遺跡	富山県水見市 鞍川	16205	36° 250	51' 58' 12"	20030421 ~ 20030711	約1,371m <sup>2</sup>	道路建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
鞍川D 遺跡	集落	古代 中世 近世	井戸・溝・流路・ 土坑・小穴など	古代須恵器 古代土師器 中世丸木舟 中世珠洲焼 中世土師器	井戸側に転用された 中世の丸木舟が出上。		

平成18年3月27日 印刷

平成18年3月30日 発行

## 鞍川D遺跡

水見市埋蔵文化財調査報告第44冊

編集・発行 水見市教育委員会

〒935-0016

富山県水見市本町4番9号

TEL0766(74)8215

印刷 刷 富山スガキ 株式会社